一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡西伯町

福成早里遺跡

1998

財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書57

一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 『福成早里遺跡』正誤表

例言		23行目							
誤	誤仲田定夫			仲田忠雄					
81ページ 第93図 福成早里横			出土进	貴物実測図(6)(玄室内・2) 383					
	遺物実測図中の網掛けは、皮膜状物質の付着範囲を示す。								
102ページ 1		11行目							
誤	誤 掴み難い。			摑み難い。					
112ページ		第132図 遺構外出土遺物実測図(4) 509							
	拓本が左右逆。								



福成早里横穴墓・羨門部閉塞状況(南東から)



福成早里横穴墓出土・須恵器高坏・アカメガシワの葉脈圧痕

一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡西伯町

福成早里遺跡

1998

財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県西部地域においては、近年幹線交通網の整備も進み、「鳥取県全県公園化構想」のもと、秀峰大山を背景とした大規模なリゾート開発が積極的に取り組まれております。一方で、地元産業の育成、整備に向けての取り組みも活発で、観光と産業の両面で今後さらなる発展が見込まれる地域であります。

西伯郡西伯町は、法勝寺川に育まれた美しい自然環境の中で、古い伝統と文化を伝え守りながら、新たな産業の育成に積極的に取り組むなど、今後ますます飛躍の期待される町です。町は島根県との県境に接し、古代山陰道の推定ルート上に位置することから、古くから旧出雲国との交流も盛んな、政治、文化の要衝として、今日まで繁栄を続けております。近年の開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数もにわかに増加しており、法勝寺川流域の成り立ちを物語る遺跡が数多く発見されております。

当財団では、一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事に伴い、平成9年度に鳥取 県から委託を受けて、鳥取県教育委員会の指導のもと、西伯町地内において、埋蔵文化財 の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。調査の結果、縄文時代から中世に いたる多数の遺構、遺物が確認され、当地域の歴史の長さをあらためて認識することとな りました。古墳時代後期から奈良時代にかけての集落構造の解明にあたっては、従来考古 学的資料が少なく、今回の発掘調査によって、貴重な資料が提供されるものと考えます。 本発掘調査の成果が、今後の調査研究の一助となり、多くの方々に活用していただければ、 幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、そのほか関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

平成10年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 田 渕 康 允

例 言

- 1. 本報告書は、「一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務」に伴い、平成9年度に鳥取県西伯郡西伯町大字福成および境で実施した、埋蔵文化財発掘調査記録である。
- 2. 本発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
- 4. 本調査において、新だに確認された古墳および横穴墓の名称については、鳥取県埋蔵文化財センターによって決定された。古墳は、すでに登録されている早里古墳群の末番の続き番号が採用され、横穴墓については、遺跡名をもって横穴墓の名称とされた。以下が新たに確認された古墳、横穴墓である。

早里14号墳、早里15号墳、早里16号墳、福成早里横穴墓

- 5. 福成早里横穴墓出土の葉脈の押圧のある須恵器高坏については、葉脈およびその樹種について、鳥取県生物 学会田中昭彦先生にご鑑定いただき、ご教示を得た。明記して、深甚の謝意を表します。
- 6. 福成早里横穴墓出土鉄刀のX線写真は、鳥取市高整形外科院長高勇吉先生のご厚意により、撮影していただいたものである。明記して、深甚の謝意を表します。
- 7. 本発掘調査の実施にあたっては、調査地内の測量および基準杭の設定、ラジコンへリコプターによる空中写真撮影、福成早里横穴墓出土鉄刀および須恵器付着物質の分析をそれぞれ業者に委託して実施した。
- 8. 出土遺物及び発掘調査によって作成された記録類は、鳥取県埋蔵文化財センターで保管されている。
- 9. 本報告書の作成は、調査員の協議に基づいて執筆、編集し、執筆担当者は目次に記載した。本報告書に掲載 した実測図、写真図版は、西部埋蔵文化財西伯調査事務所及び鳥取県埋蔵文化財センターで作成した。
- 10. 発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、深謝いたします。(敬称略、順不同)

赤木三郎 井上貴央 田中昭彦 村上勇 西尾克己 高勇吉 松本哲 中村修身 小田和利 大久保徹也 亀尾公男 亀尾武尚 仲田定夫 仲田司朗 吾郷あきこ

西伯町 西伯町教育委員会 福岡県教育委員会 北九州市教育文化事業団

凡例

- 1. 本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海抜高である。X=、Y=の数値は、国土座標第V系の座標値である。
- 2. 本報告書において採用した遺構の略号は、次のとおりである。 SS:テラス状遺構 SI:竪穴住居跡 SX:墳墓 SK:土坑 SD:溝 P:ピット
- 3. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。
- 4. 遺物実測図のうち、網掛けのものは、赤色塗彩されたものであることを示す。
- 5. 遺物実測図における縮尺は、下記のとおりである。 土器、土製品、埴輪-1/4 or 1/6、剥片石器-1/2、礫石器-1/4、五輪塔-1/6、 金属製品-1/2 or 1/4、玉類-1/1
- 6. 遺物実測図中の遺物の掲載順については、出土状況によって優先順位を設け、これに拠った。詳細は、第3章および各遺構の記述中に触れられている。
- 7. 遺物番号は、本報告書中を通じて通し番号であり、本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

目 次

序		
例言、凡例		
目次		
写真図版目次		
第1章 発掘調査の経緯	(北浦)	1
第2章 位置と環境	(鬼頭)	3
第3章 発掘調査の概要	(北浦)	8
第4章 遺構と遺物		15
第1節 テラス状遺構・竪穴住居跡	(鬼頭)	15
1. A-1群 ······		15
2. A-2群 ····································		20
3. B-1群 ····································		23
4. B-2群 ····································		32
5. C群 ···································		45
第2節 古墳、横穴墓、その他の墳墓	(岡野)	47
1. 古墳		47
2. その他の墳墓		60
3. 横穴墓		60
第 3 節 土葬墓、火葬墓	(北浦)	82
1. 土葬墓 ······		82
2. 火葬墓		93
第 4 節 土坑	(北浦)	99
1. 落とし穴状土坑	•	99
2. 貯蔵穴		99
3 . 土坑		100
第 5 節 溝状遺構	(北浦)	107
第 6 節 遺構外出土遺物	(10 ///3/	109
出土遺物観察表		114
第 5 章 考察		136
第1節 福成早里遺跡における集落の構造について ·······	(鬼頭)	136
第2節 福成早里横穴墓について		138
1. 葉脈圧痕のある高坏について		138
2. 前庭部から羨道部にかけての遺物の出土状況について	(岡野)	139
3.福成早里横穴墓出土遺物の理化学分析(パリノ・サーヴェイ	・北浦)	142
第3節 福成早里遺跡出土の須恵器蓋坏について	(北浦)	146
第4節 福成早里遺跡の土葬墓と火葬墓	(北浦)	148
第 6 章 総括	(北浦)	150
遺構一覧表	(鬼頭)	151
報告書抄録		158

写真図版

写真図版目次

カラー図版

福成早里横穴墓・羨門部閉塞状況、福成早里横穴墓出土・須恵器高坏・アカメガシワの葉脈圧痕

調査地遠景、調査地全景・調査前、調査地全景・A、B区

図版 2

C-1, $5\boxtimes$, $SS1\sim5$

図版 3

SS6~11、A-1群

図版4

 $SI1\sim4$, $B\boxtimes$

図版5

SI5、6、18~20、B-1群北半

図版 6

SI7~11、SI11-P1、B-1群南半

図版7

B-2群、SS23、25、27、29、30

図版8

SS31~37、SI12、D区調査前

図版 9

早里14~16号墳、SD2、SX1

図版10

 $SX2\sim6$

図版11

福成早里横穴墓・前庭部、閉塞石

図版12

福成早里横穴墓・前庭部、閉塞石、羨門部、羨道部、玄室

図版13

福成早里横穴墓・玄室

図版14

SX7, 9, 10, 13, 16, 17

図版15

S X 18、20、21、26、30、32、S X 30出土のシイの実

図版16

S K 1 ∼10

図版17

SK11~13, SD5

図版18

S K15, 17~20

図版19

SK22, 23, SD1, 2

```
図版20
```

SS1、5、7、11、12出土遺物

図版21

SI3、4出土遺物

図版22

SI4、5、7、8、7~11上層、SS19出土遺物

図版23

SS18、20、21、SI6、SI6上層出土遺物

図版24

SS21、23、25、35、21上層、SI12出土遺物

図版25

SS26、26上層出土遺物

図版26

SS26上層、27、29、31出土遺物

図版27

SS31、36、37出土遺物

図版28

早里14号墳出土遺物

図版29

早里14、15号墳、SX1出土遺物

図版30

福成早里横穴墓出土遺物

図版31

福成早里横穴墓出土遺物

図版32

福成早里横穴墓出土遺物

図版33

福成早里横穴墓出土遺物、アカメガシワの葉(参考写真)

図版34

福成早里横穴墓出土遺物

図版35

福成早里横穴墓出土遺物

図版36

福成早里横穴墓出土遺物

図版37

福成早里横穴墓出土遺物、鉄刀 X 線写真

図版38

SX7、20、SK11、17、20出土遺物

図版39

遺構外出土遺物

図版40

遺構外出土遺物

第1章 発掘調査の経緯(第1図・写真図版1)

本発掘調査は、鳥取県により進められている一般県道福成戸上米子線地方特定道路整備工事を原因とし、西伯郡西伯町地内において工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。当該県道は、西伯町福成の国道180号線に端を発し、法勝寺川左岸沿いを北上して米子市車尾で国道9号線に合流する路線であり、当該工事は、西伯郡西伯町大字福成および境において、既存の県道の整備、拡幅を図るものである。県道の整備工事における埋蔵文化財の保護と事業計画との調整については、事業計画策定に伴って関係機関間で協議され、以後西伯町教育委員会によって分布調査が実施されてきた。

県道が整備される西伯町大字福成、境は、従来より遺跡の密集地域として把握されており、縄文時代から近世に至る遺構、遺物が確認されている。特に古墳の密集地域として知られ、現在までのところ、境古墳群37基、早里古墳群16基、福成古墳群49基など、100基を越す古墳の存在が確認されている。近辺には、古代山陰道のルートが推定されており、旧出雲国との往来も盛んな政治、文化の要衝として繁栄した地域である。

今回の発掘調査地については、西伯町教育委員会により遺跡の有無、範囲等を確認する事前の試掘調査が行われ、埋蔵文化財の存在が確認されたものである(註1)。調査地内に計12本の試掘トレンチが設定され、弥生土器、土師器、須恵器とともに遺構と思われる落ち込みが検出されている。特に横穴墓の前庭部状の落ち込みが確認され、遺跡の立地条件からも調査地内に横穴墓が存在する蓋然性が高いものと推察された。これを受けて、鳥取県土木部道路課および鳥取県米子土木事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、記録保存のための事前発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。調査の対象となった遺跡は、福成早里遺跡である。これにより、平成9年度に西部埋蔵文化財西伯調査事務所が調査を担当することとなった。

-1-

陵の東側裾部を一部削平して通っており、地元には、この掘削部にかつて横穴が存在したとの証言がある。先述のとおり、試掘調査によって横穴墓の存在が推察される所見も得られており、横穴墓調査を視座にいれた調査計画が必要であった。そのため、県道敷設によって生じた比高約3mほどのほぼ垂直に近い法面も調査の対象となった。安全性と調査足場の確保から、調査域の東側、県道に接して約150mの範囲にH鋼打ち込みによる高さ5mの土留め柵を設置し、調査を行った。また、横穴墓調査の可能性の低い調査域についても、落石等の危険防止のため、木柵による土留め柵を設置した箇所がある。調査地は、工事の性格上南北に狭長な範囲設定となった。これを北から順次A、B、C、Dの4区に分け(第1図)、調査を行った。急峻な斜面地でもあり、調査の進捗上大きな制約となった。特に排土処理にあたっては、連続する調査区を便宜的にA、Bの2区に区分し、B区を先に調査し、調査終了後A区調査の排土処理のためのストックヤードとした。

平成9年4月より調査を開始し、B、C区同時に着手した。C区終了後はD区に移行し、B区終了後はA区に着手した。現場作業は11月に終了し、その後平成10年3月まで、調査成果のまとめを行った。調査面積は、6,538㎡である。なお、平成9年11月に現地説明会を実施し、遺跡を一般に公開し、多数の参加を得た。

調査体制

調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田渕康允(鳥取県教育委員会教育長)

常務理事 森田哲彦 (鳥取県教育委員会教育次長)

事務局長 岩本武夫

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井喜紀(鳥取県埋蔵文化財センター所長)

次長 八木谷昇

調整係長 松田 潔 調査員 亀井熙人 小谷修一

庶務係主任事務職員 矢部美恵 谷口幹彦

調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター西部埋蔵文化財西伯調査事務所

所長 船森康弘

主任調查員 北浦弘人 調查員 鬼頭紀子 岡野雅則 整理員 杉田千津子

調査指導 鳥取県教育委員会 鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々が発掘調査作業、整理作業に従事ないし協力をいただいた。

長谷川芳之 秦 美香 篠村孝美 高塚克人 勝部 恵 高塚公栄 井澤正治 後藤菊夫 野口民雄 都田三郎 長谷川節子 安達圭子 伊藤景子 後藤貞子 後藤位子 山川愛子 富永武子 加藤久嗣 足立由希 堀江 利 笹谷加寿夫 吉田 茂 細田恒夫 入江修子 前田文子 渡 貞夫 遠藤綾子 伴藤 栄 大泉英夫 野口久子 片岡登志枝 前谷節子 安部好江 遠藤和子 板 英臣 潮 哲男 秋田康一 枝野秋男 日置恒夫 中橋智明 青木弥介 佐伯正子 垳畑友雄 畠 延子 吉原和行 野口葉子 佐伯寛之 内藤祐介 (故)左藤 博 黒見まゆみ 塩谷和子 西村薫子 船越綾子 山根 都 米山麻紀 野島尚子 伊藤恵美子 野崎悦子 佐々木瑞枝 松本敬子 古谷京子 表 明美 山田美幸 清水房子 牧田理恵 南條孝子 河口優子 山本清子 福田弥千代 西尾朋子 山本博子 厨子彰子 大東敦子 畑さおり 中原千恵 小原 円 青木展子 福田延子 小山菜穂子 山本久美恵

註1 『西伯町内遺跡発掘調査報告書 江原所在遺跡・早里所在遺跡』 西伯町教育委員会 1997年

第2章 位置と環境(第1~4図)

北に日本海、南に中国山地を控え、豊かな自然環境に彩られた鳥取県は、古代より東の因幡国、西の伯耆国に 二分され、それぞれに文化を発展させていった。

伯耆国は中国地方最高峰の大山を境に、東伯耆、西伯耆に区分されるが、その西伯耆の最も西端、島根県との県境に接するのが西伯町である。北は米子市、東は会見町、溝口町、南は日野町、日南町と接しており、米子と山陽地方とを結ぶ国道180号線が町を縦断するかたちで走っている。

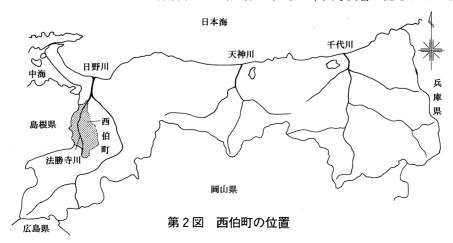
町の中心を流れる法勝寺川は北へ向かい、日野川と合流して日本海へと注ぐ。法勝寺川流域の沖積平野には集落や耕地が集中している。町東南部には手間山、金華山、鎌倉山といった標高200~700m級の山々が、また島根県との県境側も200~600m級の山地が連なる山がちな地勢である。町北部には旧出雲国へ抜ける古代山陰道のルートが推定されており、江戸時代には法勝寺地区に宿駅が置かれるなど、交通の要所として発展を遂げてきた歴史を持つ。

福成早里遺跡は、法勝寺川左岸に南北に伸びる丘陵の東側斜面部から麓部にかけて立地しており、川を隔てた東側に会見町をのぞむ。川沿いに2kmほど北上すれば米子市に行き当たる西伯町の北東端に位置している。山がちな西伯町のなかにあって、大山が一望できる眺めの良い場所である。

調査区は西伯町大字境と大字福成に跨がっており、A区の北側半分が内海道西、A区南側半分とB・C区が早里山及び早里、D区が荒神山という小字よりなる。早里山から荒神山にかけての標高50~60mをピークとした尾根上には早里古墳群(1)が存在する。その尾根の北西側はヒヨトリ山、西側は亀尾山、南西側は荒神山という小字名である。早里山より西南方向に谷をひとつ隔てた標高60~70mの春日山丘陵尾根上には福成古墳群(2)が、また調査区の北方約1km、境集落の北西側にあたる標高70m近い丘陵上には境古墳群(4)が形成されている。一方、法勝寺川の対岸、調査地の東方約500m地点には県下最大級の規模を誇る前方後円墳・三崎殿山古墳(15)が、また調査地の南東800mには三角縁神獣鏡を出土した前方後方墳・普段寺1号墳(22)が位置している。法勝寺川右岸の会見町側には古墳時代前期から中期に比定される大型古墳が築かれるのに対し、当遺跡を含む法勝寺川左岸丘陵では主に古墳時代後期の群集墳が形成されている。その他、調査地周辺の集落遺跡として、西方300mに福成石佛前遺跡(弥生時代~中世・3)、南西約1.5kmに清水谷遺跡(縄文時代~中世・7)などが存在する。調査地の北方約1kmには、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器を多数出土した米子市大袋丸山遺跡(12)が位置する。

弥生時代から古墳時代かけては、法勝寺川流域の沖積平野、現在の西伯町鴨部、西、絹屋、馬場、原、坂根、 境付近において集落の存在が想定されている。

古代律令体制の下で、西伯町の大部分は会見郡鴨部郷として編成された。奈良時代には、鴨部の一族の青年・ 秋麿が東大寺に入って僧になったことが、神護景雲四(西暦770)年の東大寺文書に記されている。



近世になると西伯町の南域ではたたらを利用した鉄生産が盛行し、製鉄業は当地の主要産業となる。法勝寺には宿駅が置かれ、鉄運搬の重要ルートとして法勝寺街道は賑わいを見せた。

現西伯町は、旧天津・大国・法勝寺・上長田・東長田の5ヶ村が昭和30年に合併して成立したものである。

大山山麓、西伯耆の黎明期の遺物として今日知られる最古のものは、会見町諸木 (13)、米子市奈喜良他で採集されたサヌカイト製の有舌尖頭器である。当遺跡より西方約300mに位置する福成石佛前遺跡からもサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。これらは縄文時代草創期に比定される。法勝寺川中流域の西伯町清水谷遺跡からは、縄文時代早期の押型文土器が発見されている。縄文時代中期、後〜晩期の遺物としては、福成石佛前遺跡から出土した縄文土器の鉢がある。調査地の南西約700mに位置する会見町枇杷塔遺跡 (19) からも縄文時代晩期の土器が出土しており、貯蔵されたものと思われる大量のドングリが土坑より検出された。

弥生時代になると台地上の広い範囲に集落が見られるようになる。とりわけ当遺跡周辺は前期の環濠を伴う集落が比較的集中して検出されている地域である。会見町諸木遺跡、宮尾遺跡(16)、西伯町清水谷遺跡(7)などで断面 V 字状の環濠が検出されており、中でも清水谷遺跡では、全長125mを測る大規模な環濠が集落を楕円形に囲んでいるのが確認された。福成石佛前遺跡、北福王寺遺跡(25)などは、後期に短期間存在した集落として知られている。

西伯町は鳥取県内でも有数の古墳密集地域であり、とりわけ30基以上からなる群集墳が多数存在することが特徴的である。当遺跡も古墳時代後期の群集墳のひとつである早里古墳群に属する。標高50~60mの早里山尾根上に3基の前方後円墳と13基の円墳が造られており、各規模は最も大きな4号墳(前方後円墳)で全長29.5m、8号墳・9号墳(ともに前方後円墳)が全長20m、円墳(1~7号墳、10~12号墳、13~16号墳)は直径7~10m前後である。早里7号墳では円筒埴輪片が採集されている。なお、今回調査した早里14~16号墳以外は未発掘である。

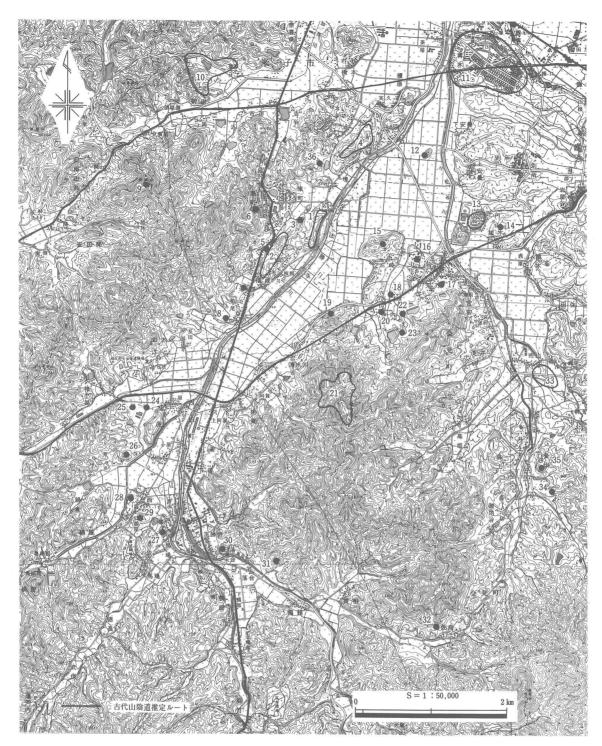
早里山を谷ひとつ西へ隔てた春日山丘陵上には、同じく群集墳である福成古墳群が存在する。この内福成4号墳では頭蓋骨を朱塗りにした人骨が箱式石棺に埋葬されていたことが知られており、古墳時代中期のものと推定されている。

早里山から約1km北上した法勝寺川左岸丘陵には、総数50基からなる境古墳群が存在する。同丘陵上に位置する境古墳は、玄室の奥壁幅よりも前壁幅、羨道の羨門幅より玄門幅が狭くなる羽子板形の平面形を示す横穴式石室を持つ後期古墳である。調査地の東南約500mに位置する会見町寺内8号墳(20)も羽子板形プランの横穴式石室を持つ径10mほどの円墳である。寺内8号墳の石室内からは陶棺が検出され、2面の須恵器屍床も確認されている。

横穴墓は、比較的大規模なものとして西伯町マケン堀横穴墓群(24)が知られるが、2~3基の小単位からなる小提山横穴墓群(26)、西横穴墓群(28)、谷川横穴墓群(5)、今長龍徳横穴墓群なども存在する。当遺跡でも調査開始当初から横穴墓の存在が予測されていたが、地元の情報によれば、かつて早里山(調査区内・字内海道西に属する麓部か)に開口した横穴が2・3存在したという。

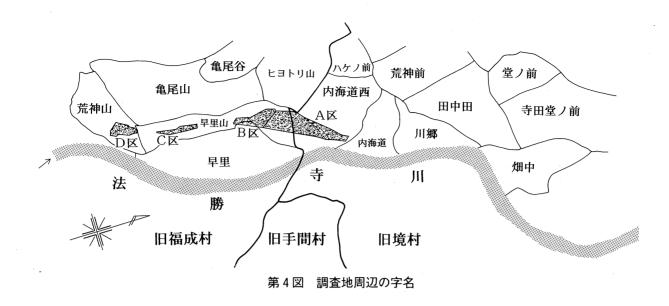
当遺跡の南西約2㎞に位置するマケン堀古墳群では、標高65m前後の丘陵上及び斜面において2基の円墳と35基の横穴墓、また横穴墓に伴うと考えられる6基の後背墳丘が検出されている。横穴墓の玄室形態はすべて断面三角形妻入りに限定されているが、このタイプのものは西伯耆・法勝寺川上流域の主流形態といえる。また、横穴墓に伴う後背墳丘であるが、米子市陰田横穴墓群、大垳山横穴墓群で確認されており、出雲東部にも類例が見られる。

古墳時代の集落は、清水谷遺跡で前期から後期まで引き続き展開されており、また今回の調査で福成早里遺跡



第3図 周辺遺跡分布図

- 1 福成早里遺跡・早里古墳群 2 福成古墳群 3 福成石佛前遺跡 4 境古墳群 5 谷川横穴墓群
- 6 深塔横穴墓群 7 清水谷遺跡 8 小鷹城跡 9 新山要害 10 新山遺跡群 11 青木遺跡
- 12 大袋円山遺跡 13 諸木遺跡 14 後塔山古墳 15 三崎殿山古墳 16 宮尾遺跡 17 天万遺跡
- 18 天萬土井前遺跡 19 枇杷坋遺跡 20 寺内 8 号墳 21 手間要害 22 普段寺 1 号墳
- 23 普段寺2号墳 24 マケン堀古墳群 25 北福王寺遺跡 26 小提山横穴墓群 27 八幡山横穴墓群
- 28 西横穴墓群 29 稲荷山横穴墓群 30 三本木横穴墓群 31 湯屋谷横穴墓群 32 金ツキ横穴墓群
- 33 口朝金遺跡 34小松城跡 35 金田瓦窯跡 36 寺池遺跡



においても古墳時代後期に斜面地を切り開いた集落が存在したことが明らかとなった。

旧山陰道は、現米子市諏訪、青木、榎原、古市から新山を通り島根県能義郡伯太町へ抜ける北側ルートと、岸本町坂長、会見町手間、西伯町阿賀、原を通って島根県へ抜ける南側ルートが推定されているが、当遺跡は両推定ルートのほぼ中間、距離的には北側ルート・南側ルートまでそれぞれ約1kmに位置しており、人々の往来頻繁な開けた地であったものと想像する。

奈良・平安時代以降の西伯町域を知る上での考古学的資料は、当遺跡のほか清水谷、北福王寺遺跡、福成石佛 前遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認されている。なお、当遺跡近辺と思われる西伯町境地内より、か つて土馬が採集されたという記録がある。(註1)

調査地の近辺、米子市榎原から西伯町境に抜ける谷筋には瓦窯があったことが知られており(36・寺池遺跡・現在は所在地不明)、付近より緑釉陶器が採集されている。(註2、3)

注()内の数字は、第3図・周辺遺跡分布図の番号に対応する。

参考文献 『西伯町誌』 西伯町誌編纂委員会 1975

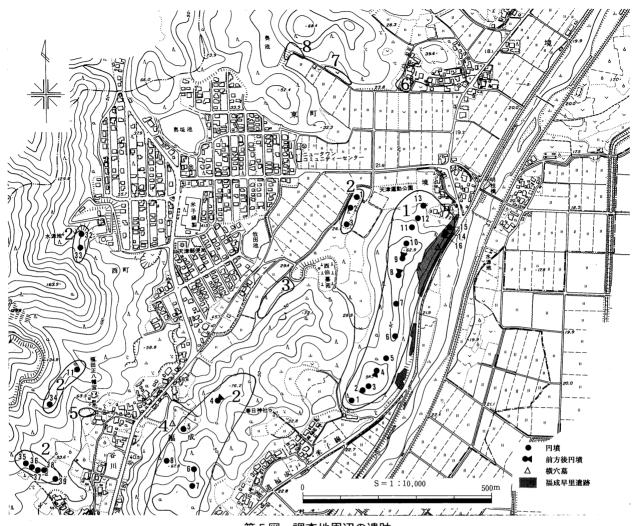
『マケン堀古墳群・北福王寺遺跡』 西伯町教育委員会 1990

『福成石仏前遺跡』 西伯町教育委員会 1993

『清水谷遺跡』 西伯町教育委員会 1992

『島根考古学会誌』 第2集 島根考古学会 1985

- 註1 『福岡古墳群』 佐々木古代文化研究室 1964
- 註2 『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 鳥取県教育委員会 1984
- 註3 「大寺廃寺第4次発掘調査報告書」 岸本町教育委員会 1977



第5図 調査地周辺の遺跡

- 1 福成早里遺跡、早里古墳群(1~16号墳)、福成早里横穴墓
- 2 福成古墳群(1~8・11・32~39号墳・4号墳は通称春日山古墳) 3 福成石佛前遺跡
- 4 福成所在横穴墓群 5 谷川所在遺跡 6 境第1遺跡 7 境第2遺跡 8 境第3遺跡
- 註) 図中のゴシック体数字は、それぞれの古墳の号数を表す

早里古墳群一覧表

名 称	墳 形	規模-高さ(m)	備考	名 称	墳 形	規模-高さ(m)	備考
1号墳	円	径7-0.8		9 号墳	前方後円	全長20-1.8	
2 号墳	円	径9-1.2		10号墳	円	径8-1.8	
3 号墳	円	径17-1.4		11号墳	円	径8-1.0	
4 号墳	前方後円	全長29.5-2.0		12号墳	円	径8-3.5	
5号墳	円	径11- 1.2		13号墳	円	径11-1.0	
6 号墳	円	径10- 1.2		14号墳	円	径12.6-1.2	横穴式石室
7 号墳	円	径16- 1.8	埴輪片採集	15号墳	円	径14.5-1.5	土壙墓
8号墳	前方後円	全長20-1.6		16号墳	円	径12?	
福成早里横穴墓		玄室2.4×2.4	後背周溝				

第3章 発掘調査の概要(第1、6、7、134図)

最初に、本章の内容の理解を容易にするため、調査区の設定について述べておきたい。調査区は、地形的には大きく3つに分かれる。A、B区とC区とD区である。最も北側にあたる早里山の丘陵斜面部は、A、B区、最も南側にあたる荒神山の丘陵斜面部がD区、その間の亀尾山の裾部にあたる狭長な調査区がC区である(第1図)。A、B区は排土処理の必要から便宜的に区分されたもので、B区を先に調査し、そののちA区の排土処理用のストックヤードとした。ただしA区とB区の境界には、尾根がやや張り出す地形の変換ラインをあてており、全く便宜的な区分というわけではない。

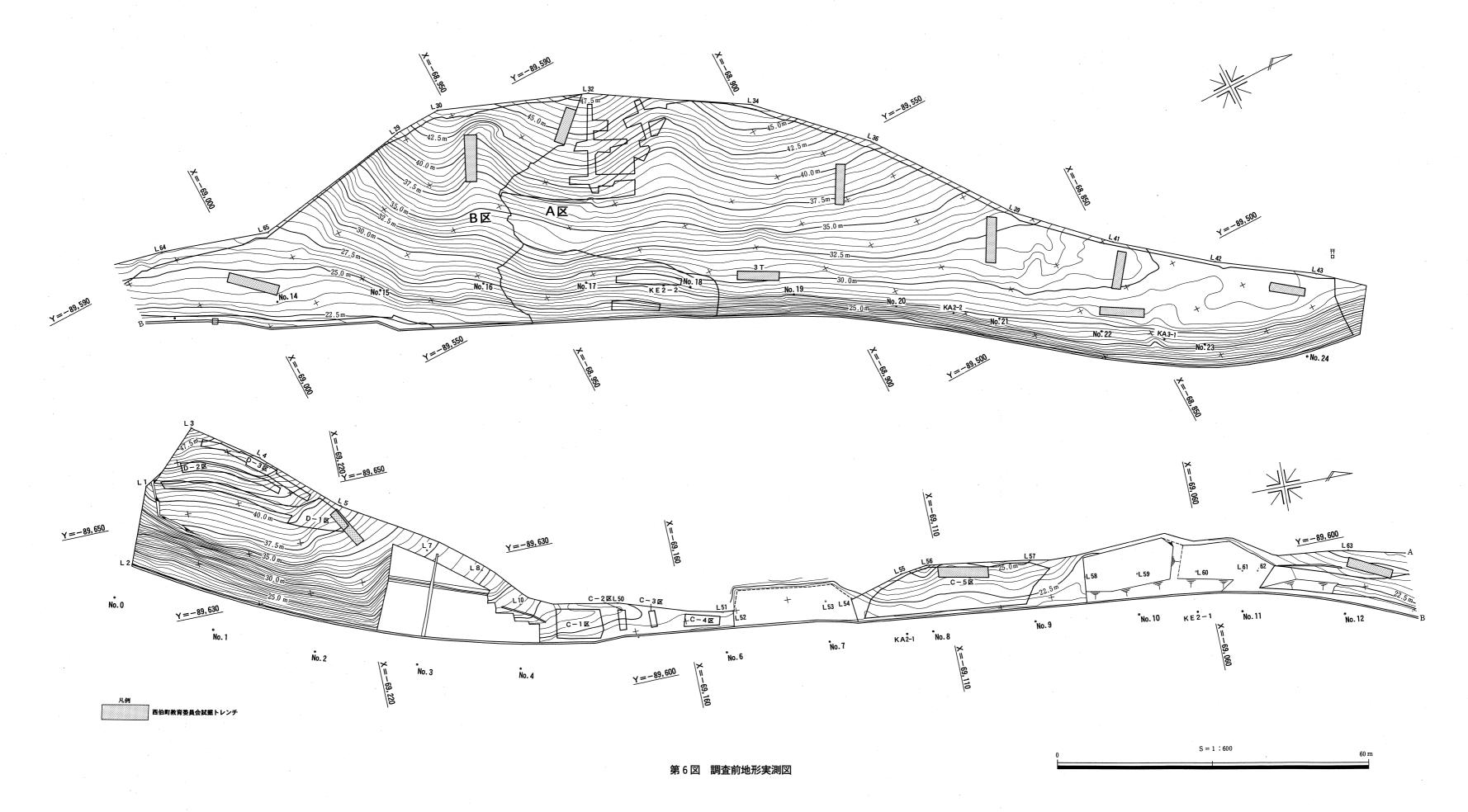
調査地は、法勝寺川左岸のほぼ南北に伸びる丘陵の東側斜面部および麓部に立地し、東側の裾部は法勝寺川の 氾濫原に接しており、侵食を受けているものと思われる。また既存の県道によっても削平されており、A、B区 では標高22~28m、C区では22~23m、D区では22~37mの範囲で原況をとどめていない箇所が生じている。

前章でも述べたとおり、調査地の所在する丘陵上に早里古墳群が分布している。前方後円墳3基、円墳10基からなる古墳群で、調査地には7基の古墳が隣接している。丘陵上方からの遺物の転落など予測される状況にある。またA区の北東端にあたり、県道によって削平され法面になっている箇所に、かつて横穴が開口していたとの地元の方の話もあり、調査地の立地条件からも、調査地内に横穴墓が存在する可能性が推測された。

平成8年度に西伯町教育委員会によって試掘調査が実施された。A区内に6ヶ所、B区内に4ヶ所、C区とD区にそれぞれ1ヶ所ずつの合計12ヶ所の試掘トレンチが設定され、遺跡の有無、範囲等の確認が行われた。A区内のトレンチからは弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器とともに土坑状、柱穴状の落ち込みが検出された。3 Tからは須恵器蓋坏、大型の甕とともに溝状の落ち込みが検出され、横穴墓の前庭部である可能性が指摘された。本調査によって確認された福成早里横穴墓の前庭部に相当するものであった。B区内のトレンチでは、弥生土器、土師器、須恵器とともに土坑状、柱穴状の落ち込みが検出された。C区内のトレンチでは、遺物は検出されず、土坑状の落ち込みが確認されたが、本調査の結果、地形のくぼみと判明した。D区内のトレンチでは、弥生土器、須恵器とともに土坑状、柱穴状の落ち込みが検出された。本調査によって確認されたテラス状遺構SS37に相当するものであった。この試掘調査の結果と調査地の立地条件から、下記のとおり推定された。①A区には、横穴墓の存在が推察される。②A区には、古墳の存在が推察される。③A区の北端に平坦地があり、近辺から土師質土器の皿が出土していること、調査地の北側に近世の墓地が存在することから、中近世の墳墓の存在が推定される。④調査地全域を通して弥生時代の遺構が存在する可能性がある。

以上の所見から、A区においては横穴墓調査を視座に入れ、県道敷設によって生じた比高約3mほどのほぽ垂直に近い法面も調査の対象となり、安全性と調査足場の確保のために、高さ5mのH鋼打ち込みによる土留め柵を県道に沿って約150mの区間に設置した。また、弥生時代遺構の存在が推察されることから、古墳、中近世墓の存在が予測される範囲については、調査遺構面は2面であった。

発掘調査は、ラジコンへリコプターによる調査前の全景写真撮影、調査前の地形測量後、着手した。表土の除去については、B、C区はバックホーにより試掘結果を勘案しながら徐々に行い、D区については手掘りとした。 A区は、古墳相当域については全面手掘りとし、それ以外については試掘結果を勘案しながらバックホーによって徐々に表土除去した。横穴墓の前庭部と目された箇所については予察トレンチを設定し、遺物の出土状況等勘案の上で、第1層のみをバックホーで徐々に除去した。県道沿いの法面については、アームの届く距離までバックホーで薄く表土除去した。遺構の検出にあたっては、場所により遺構のベース面たる地山面の様相が異なるため、一律の判断とはいかなかった。適宜サブトレンチを設定し、土層断面を確認しながらの検出となった。古墳については、墳丘測量、写真撮影終了後、盛土を除去し、下層の遺構検出を行っている。横穴墓については、陥没により玄室内に土砂が充満しており、安全性を考慮して、直上から掘り下げを行って玄室の天井部をオープンカットとし、調査を行った。県道沿いの法面については、横穴墓等の遺構は検出されなかった。表土除去後に10



遺構名新旧対象表							
新	旧	S S 31	S S 12	S X 2	S K 54	S X 32	S K 30
S S 1	S S 34	S S 32	_	S X 3	S K 53	S X 33	S K 70
S S 2	S S 44	S S 33	S S 31	S X 4	S X 18	S K 1	S X 22
S S 3	S S 35	S S 34	S S 32	S X 5	S X 19	S K 2	S X 22
S S 4 -1	S S 33	S S 35	S S 5	S X 6	S S 51	S K 3	S K 63
S S 4 -2	S S 33	S S 36	S S 8	福成早里	S S 45	S K 4	SK1
S S 5	S S 411	S S 37	S S 9	横穴墓	S S 42	S K 5	S K 2
S S 6	S S 38	S S 38	S S 16	S X 7	S K 55	SK6	S K 6
S S 7	S S 40	S I 1-1	S S 50	S X 8	S K 65	S K 7	S K 7
S S 8	S S 43	S I 1-2	S S 50	S X 9	S K 58	S K 8	S K 4
S S 9	S S 39	S I 2-1	S S 49	S X 10	S K 57	S K 9	S K. 5
S S 10	S S 52	S 1 2-2	S S 49	S X 11	S K61	S K 10	S K 8
S S 11	S S 47	S I 2-3	S S 49	S X 12	S K 69	S K 11	S K 39
S S 12	S S 48	S I 3-1	S S 37	S X 13	S K 60	S K 12	S K 45
S S 13	S S 46	S I 3-2	S S 37	S X 14	S K 59	S K 13	S K 28
S S 14	S S 53	S I 3-3	S S 37	S X 15	S K34	S K 14	S K 10
S S 15		S I 4	S S 3	S X 16	S K21	S K 15	S K 9
S S 16	S S 18	S I 5	S I 1	S X 17	S K49	S K 16	S K 48
S S 17	S S 20	S I 6	S S 17	S X 18	S K 52	S K 17	S K 68
S S 18	S S 6	S I 7	S S 2	S X 19	S K 56	S K 18	S K 26
S S 19	S S 7	S I 8	S S 2	S X 20	S K 62	S K 19	S K 23
S S 20	S S 27	S I 9	S S 28	S X 21	S K72	S K 20	S K 22
S S 21	S S 1	S I 10	S S 29	S X 22	S K73	S K 21	S K 27
S S 22	S S 19	S I 11-1	S S 30	S X 23	S K74	S K 22	S K 20
S S 23	S S 15	S I 11-2	S S 30	S X 24	S K71	S K 23	S K 16
S S 24	S S 21	S I 12-1	S S 23	S X 25	S K75	S K 24	S K 19
S S 25	S S 25	S I 12–2	S S 24	S X 26	S K 51	SD1	SD4
S S 26	S S 14	早里14号墳	S X 14	S X 27	S K 64	SD2	SD1
S S 27	S S 13	早里15号墳	S X 15	S X 28	S K76	SD3	_
S S 28	S S 22	十五1774	S X 16	S X 29	S K77	SD4	S D 3
S S 29	S S 10	早里16号墳	S D 2	S X 30	S K46	SD5	S S 36
S S 30	S S 11	S X 1	S X 20	S X 31	S K47	SD6	_

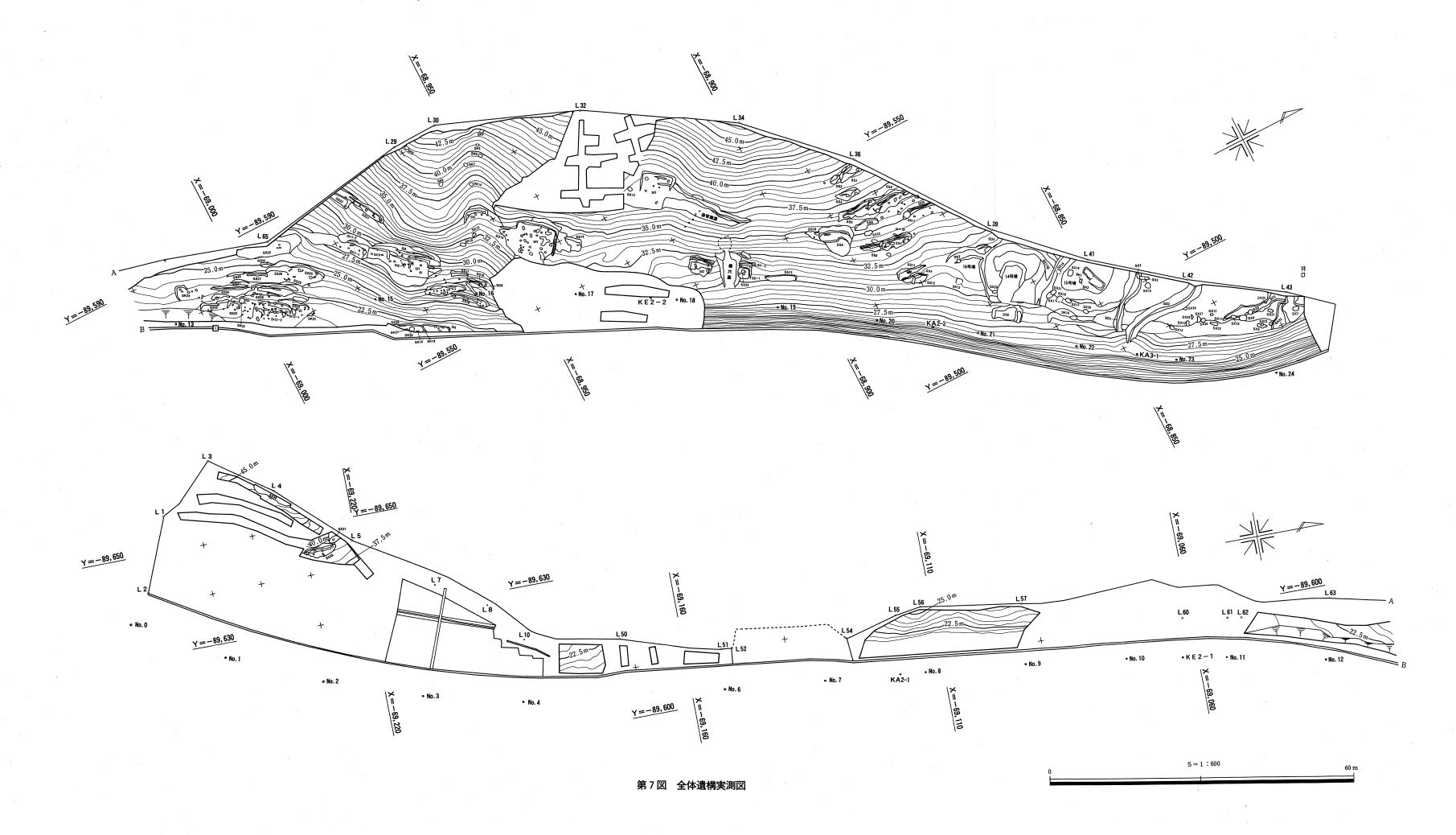
mメッシュの方眼杭を設定して測量の基準とし、個々の遺構について実測を行っている。遺物の取り上げについては遺構ごととし、全体を通じてNO. 1からの通し番号とした。遺構の埋土上層の遺物については、特別な場合を除き、層位確認の上取り上げ、下層または床面直上の遺物については出土状況を実測の上、適宜出土状況の写真撮影を行い、取り上げている。本書中の遺物図の掲載にあたっては、遺物の出土状況によって3段階にランキングし、①床面直上出土かあるいはその遺構に確実に伴うことが明かなもの、②埋土最下層中の出土のもの、③埋土中出土のものと優先順位を付け、この順に掲載した。遺構の完掘後はそれぞれ写真撮影を行い、遺跡全体についてもラジコンへリコプターで全景写真、大型遺構の全景写真を撮影している。

発掘調査は、B区とC区に分かれ2班体制で同時進行した。C区は、調査区を南側から順にC-1~C-5区 に分けて調査した。C-1区では、弥生時代前期末葉~中期初頭の弥生土器、古墳時代後期の土師器、須恵器、 中世の土師質土器、白磁が出土したがプライマリーな状況ではなく、遺物包含層自体が二次的に動かされたもの と思われた。瓦礫等が多数出土し、全体的に撹乱を受けており、遺構は検出されなかった。 $C-2\sim C-4$ 区で は、遺構、遺物は検出されなかった。C-5区では、古墳時代後期の土師器、須恵器、青磁等が出土したが、遺 構は検出されなかった。C区の調査終了後は、調査班はそのままD区の調査に移行した。D区は、急峻な斜面部 上に位置し、比高約13mのややオーバーハングした法面上に立地する。調査は3つの細長い調査区に分けて行い、 東側の下位側から上位に向かって順にD-1~D-3区と呼称した。遺構の検出状況に即して、適宜拡張した。 D-1区では、北側にテラス状遺構が確認されたため拡張し、SS36、37の2基を検出した。SS36は7世紀の 後葉に比定される。D-2区では、遺構は確認されなかったが、鍛造の袋状鉄斧が上方からの転落と思われる状 況で出土した。D-3区では、西側の調査区外に平坦な地形が現況で確認でき、テラス状遺構の存在が推察でき た。しかし、実際に調査区内にかかるのはその一部のみであり、わずかにテラスの縁辺部を検出した(SS38)。 A、B区では、テラス状遺構35基、竪穴住居跡12基を確認した。結果として、これら遺構群にはまとまりが認 められ、A-1群、A-2群、B-1群、B-2群とグルーピングした(第134図)。 B区では、丘陵斜面部に B -1群、丘陵裾部にB-2群が検出され、B-1群にテラス状遺構9基(SS14 \sim 22)、竪穴住居跡8基(SI $4\sim11$)、B-2群にテラス状遺構13基(SS23~35)、竪穴住居跡1基(SI12)が確認された。B-1群は古 墳時代後期に、B-2群は古墳時代中期〜後期に比定され、SS35のみ鎌倉時代に比定される。B-1群の北西 側の丘陵斜面部では、落とし穴状土坑 7 基 $(SK4\sim10)$ 、焼土を伴う土坑 2 基 (SK14、15) が検出されたが、

時期は特定できなかった。B-1 群の最裾部、SI6、SS20を切って、 $SK18\sim21$ の 4 基の土坑が検出された。そのうち SK20からは、複数個体の土師器の甕が出土したが、一括性の高い資料である。B区ではこのほか土坑

3基(SK22~24)、溝状遺構1基(SD6)が検出されている。

A区では、A-1群にテラス状遺構12基($SS1\sim12$)、A-2群にテラス状遺構1基(SS13)、竪穴住居跡 3基(SII \sim 3)が検出された。A-1群は、SS-3 \sim 5、7が奈良時代、SS11が弥生時代後期、SS12が弥生時代前期末葉~中期初頭に比定され、A-2群については、SI3が古墳時代後期に比定される。古墳は 3基確認され、早里古墳群に新たに加えられた。早里14号墳~16号墳である。早里14号墳は横穴式石室を主体部 とし、早里15号墳は川西編年V期の円筒埴輪を有し、土壙墓あるいは木棺墓を主体部とする。早里16号墳は主体 部、墳丘ともに遺存せず、周溝のみの検出となった。14号墳と15号墳の間からは、土壙墓(SX1)が検出され、 馬具の副葬をみた。横穴墓は1基のみの検出で、後背部に周溝が確認された。前庭部の埋土中から須恵器、土師 器、馬具が出土し、追葬時の搬出遺物と思われた。このうち須恵器の高坏の坏部内面に葉脈の押圧が確認され、 アカメガシワの葉によるものと鑑定された。羨門部は、高さ1.24mの1枚石による閉塞石で塞がれており、その 下部に角礫を配置し、隙間に須恵器の蓋坏が詰め込まれていた。この状況から、盗掘を受けていないものと推察 された。玄室内からは、鉄刀、鉄鏃、刀子、馬具、耳環、ガラス小玉、須恵器が出土した。A区ではこのほか、 土壙墓2基(SX2、3)、木棺墓1基(SX4)、石蓋土壙墓1基(SX5)、テラス状をなす埋葬施設1基 (SX6)、土葬墓14基 (SX7~20)、火葬墓13基 (SX21~33)、落とし穴状土坑3基 (SK1~3)、貯蔵穴 2基(SK11、12)、土坑3基(SK13、16、17)、道と思われる溝状遺構5基(SD1~5)が検出されている。 遺構に伴わない遺物としては、縄文時代晩期最終末の突帯文土器が最古のものであり、以後断続的に近世までの 遺物が出土している。



第4章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡・テラス状遺構

福成早里遺跡では、山の斜面を断面L字状に掘削して平坦面を造成した遺構を総計50基検出した。これらは、従来の竪穴住居跡の概念に収まるものとそうでないものとに二分される。後者は、平坦面が狭長な長方形あるいは半月形を呈する、柱穴は一直線上に4基以上が並ぶ、緩やかな円弧を描く溝が見られる、溝及び柱穴がまったく存在しないなど、従来の竪穴住居跡の範疇から逸脱する要素を持つもので、以下、テラス状遺構と呼称する。

テラス状遺構は、規模・形態を検討した上、以下に分類した。①平坦面に柱穴が直線上に並ぶ、大型のもの、②平坦面に柱穴が直線上に並ぶ、小型のもの、③柱穴が存在しない、大型のもの、④柱穴が存在しない、小型のものの4タイプである。テラス状遺構の規模の基準については、長さ5m以上を大型とし、それ以下のものを小型として分類した。遺構の分布状況を検討した結果、遺構群を北側から順にA-1群、A-2群、B-1群、B-2群、C群の5群にグルーピングしている。

なお、福成早里遺跡出土遺物の実測図においては、遺構の時期決定資料となり得る遺構床面直上より出土した 資料を最優先し、以下、埋土下層出土遺物、埋土中出土遺物の順に掲載している。

1. A-1群(SS1~12)(第8~12図、写真図版2·3·20)

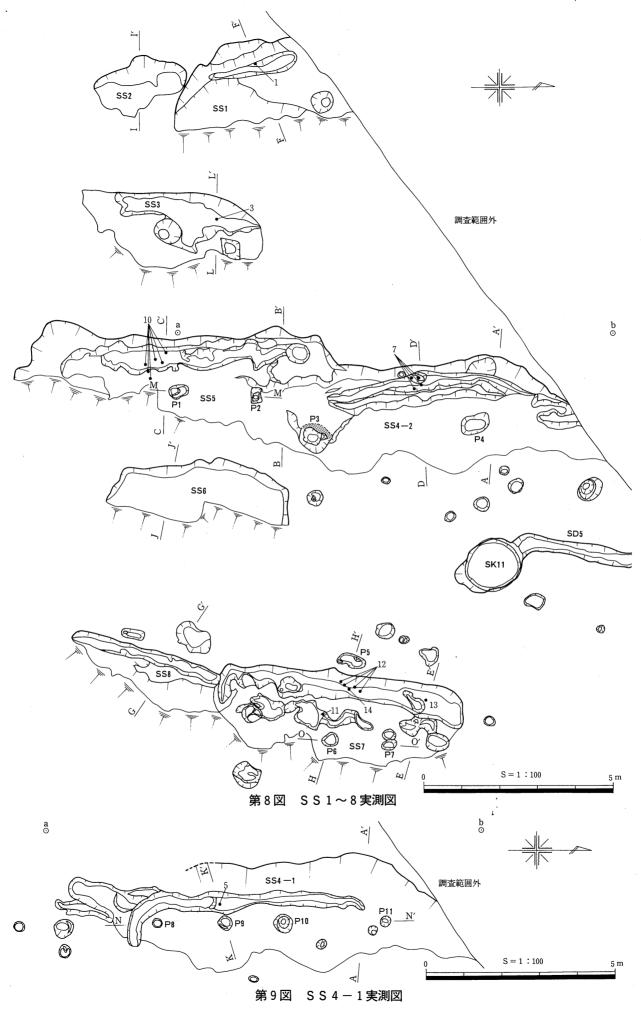
調査区の北西、標高31~39.5m付近に位置するテラス状遺構群である。大小12基のテラス状遺構が、比高差約8.5m、南北約15m幅の間に拡がっているが、SS1・4の北西側は調査区外へ続いているため、その全体像は明らかでない。現状では調査区北西側に急激な地形変化は見られず、同じような傾斜面が続いていることから、このテラス状遺構群が調査区外にも展開しているものと思われる。

テラス状遺構は、①タイプに相当するものにSS4・5・7、②タイプにSS3、③タイプにSS9、④タイプにSS2・6・8・10が挙げられる。以下、各タイプ別に代表的なものを取り上げながら、A-1群のテラス状遺構について報告する。

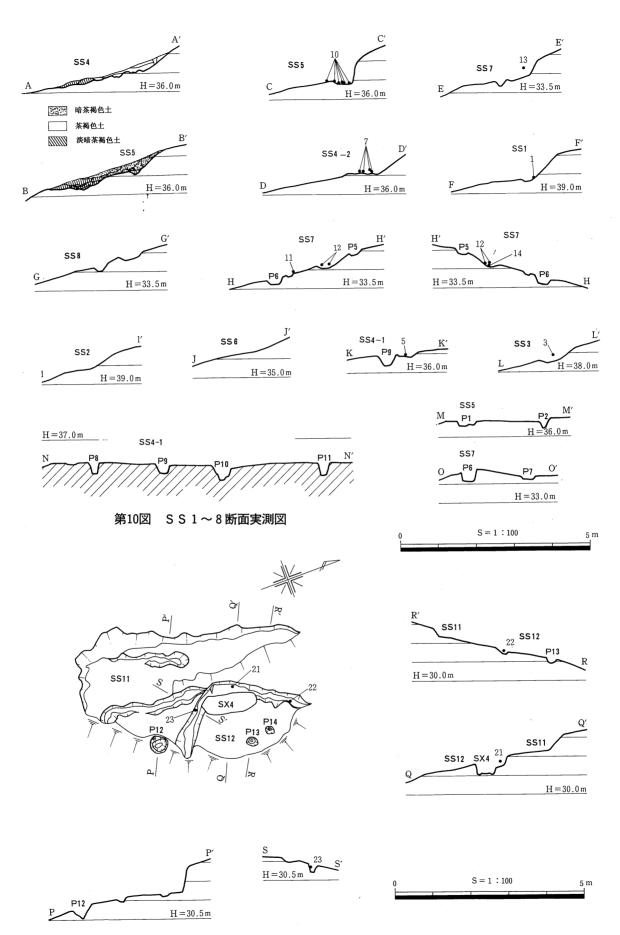
SS4-2はSS4-1を建て替えたものと考えられる。溝は底面幅約20cm、深さ約10cmを測り、後背壁面裾を南北5mにわたりほぼ直線状に伸びる。SS4-1の溝よりも西側に造られており、建て替えの際、住居は全体に西側へ移動したものと考えられる。

SS5はSS4の南隣に位置する。南北約8.5m、東西約2mの不整形に拡がる平坦面が造られており、後背壁裾には底面幅約40cm、深さ約10cmの溝が4mほど南北方向に伸びる。溝に平行するかたちで、主柱穴と考えられるピット (P1・2) が並ぶ。両ピットは径約40cm、深さ約20cmと小規模なもので、両ピット間は1.6mを測る。SS5の平坦面はSS4-2とほぼ同レベルであり、両者の境界付近には壁面に焼土が見られるP3が存在するが、これがどちらのテラス状遺構に所属するものかは判断できなかった。

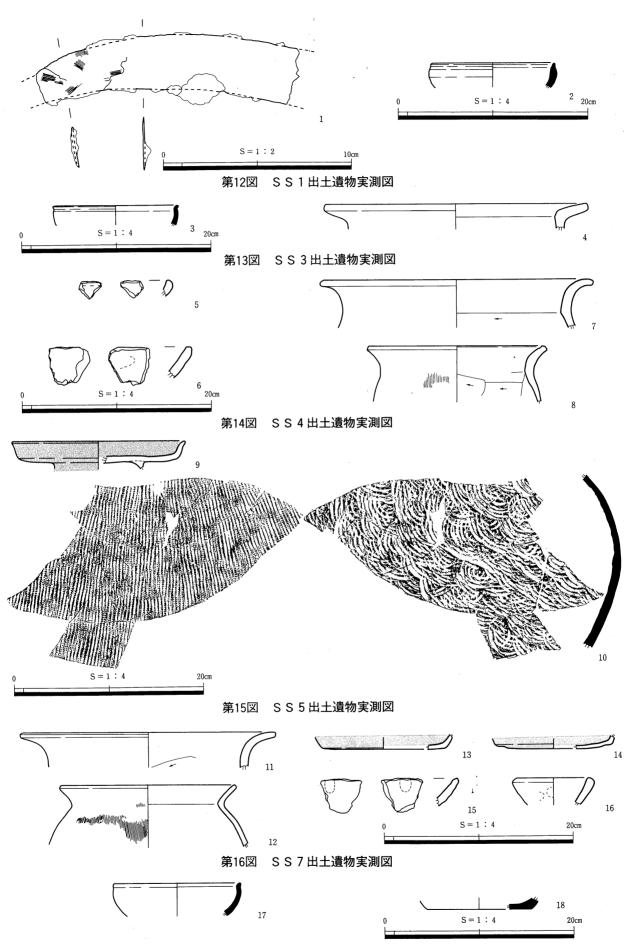
SS7・8はSS4・5に近似した形態をとる①及び④タイプのテラス状遺構である。標高33.5~34m付近、



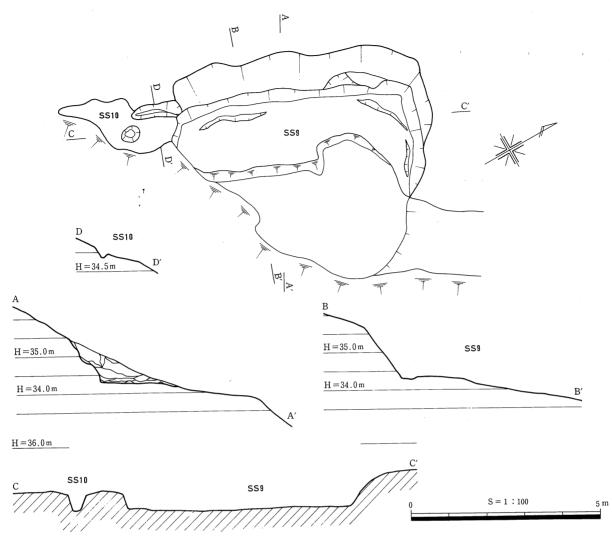
— 16 —



第11図 SS11・12実測図



第17図 SS9出土遺物実測図



第18図 SS9・10実測図

 $SS4 \cdot 5 \cdot 6$ の下方に位置し、南北に連なっている。 $SS4 \cdot 5$ との比高差は約2 m。両者の切り合い関係は明らかにできなかった。 $SS7 \cdot 8$ とも後背壁面裾に、底面幅約20cm・深さ15cm前後の溝を持つ。SS7においては平坦面上に不整形な平面形態をとるピットが12基見られ、また平坦面の中央から南端にかけて3 mほど伸びるいびつな溝が存在する。土層の断面観察では明らかにできなかったが、溝やピットの配列を見ると、SS7も建て替えが行われた可能性がある。

②タイプのテラス状遺構としては、SS3が挙げられる。 $SS4\cdot 5$ の上方、標高 $38\sim 38.5$ m付近に位置し、 $SS4\cdot 5$ との比高差は約1mである。東西約4m、南北約2mの不整形な平坦面が広がり、後背壁面裾には深さ約15cm、最大底面幅1.1mを測る不整形な溝が見られる。また、溝に接するかたちで径約60cm、深さ約40cmのピットが1基、溝から20cmほど東寄りに 50×50 cm・深さ約50cmを測る方形のピット1基が存在する。

③タイプのテラス状遺構としては、SS9が挙げられる。標高 $34\sim35.5$ m付近、 $SS4\sim6$ の南西に位置しているが、ほぼ真東を向くA-1群テラス状遺構の中にあってSS9だけはわずかに南東に振ったかたちに造られている。その規模は南北約6.9m、東西約6m、残存壁高約1.5mで、全体的に長方形状の平面形をなす。壁面裾部にはごく浅い溝が認められる。

④タイプのテラス状遺構としては、SS6が挙げられる。SS6は $SS4\cdot5$ の下方、標高35.5 \sim 36m付近に位置しており、 $SS4\cdot5$ との比高差は0.5mを測る。長方形を意識した南北約4.5m、東西約1mの平坦面が造られている。

なお、SS1については、検出した範囲内において溝とピットが確認できたが、調査区外に続くため遺構全体の規模及び形態が把握できず、タイプ分類の対象外とした。

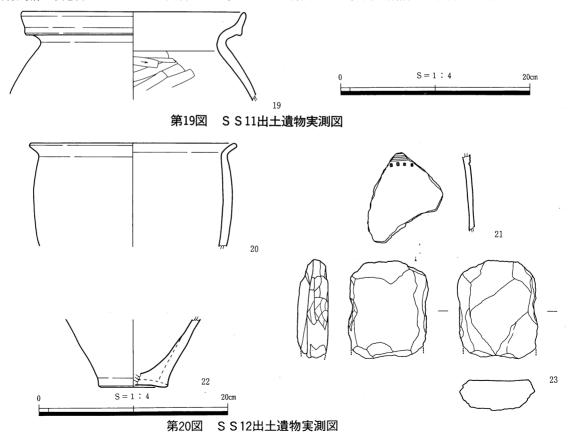
A-1群、SS1~10の出土遺物としては、土師器の甕・皿、須恵器の坏・甕、製塩土器、鉄製品が挙げられる。製塩土器(5・6・15・16)はSS4-1の溝の底面付近、SS4-2の溝の埋土下層及びSS7埋土中より検出された。口縁端部はいずれも肥厚しており、器形は逆円錐形を呈する。土師器の皿(9・13・14)はSS5・7の埋土下層及び埋土中より出土したもので、いずれも内外面に赤色塗彩が施されている。SS5出土の皿(9)は高台が付くものである。SS1では溝の肩付近から鉄製品(1)が出土した。須恵器の坏(3・17・18)はSS3の溝の埋土中及びSS9埋土上層で検出されている。SS3・9出土の坏(3・17)は8世紀後半に比定され、製塩土器の出土状況などからも、SS1~10出土遺物の時代相は全体的に奈良時代を示すといえる。A-1群中、最も低い地点に位置するのがSS11・12である。形態的には④タイプに分類できそうであるが、出土遺物の時代相はSS1~10とは異なる。標高30.5~31.5m付近に上下に隣接しあっているが、両者の切り合い関係は把握することができなかった。両テラス状遺構の平坦面は三角形状に残存している。SS12は、ほぼ直角に屈曲する深さ約50cm・底面幅約15cmの溝をめぐらせており、平坦面には2つのピット(P13・14)が見られる。なお遺構の隅は、木棺墓・SX4によって一部撹乱されている。

SS11の埋土中からは複合口縁の甕(19)が、また、SS12の溝埋土からは3条の沈線と連続刺突紋が施された弥生土器の甕片(21)、弥生土器の底部(22)、石錘(23)などが出土している。SS11・12においては弥生時代に比定される遺物以外は出土していない。以上のことから、SS11は弥生時代後期、SS12は弥生時代前期末葉~中期初頭に築造・使用されたものであることが推測でき、両者の前後関係はSS12の方がSS11よりも遡るものと考えられる。

2. A-2群(SI1~3、SS13)(第21~25図、写真図版4·21)

竪穴住居跡3基とテラス状遺構1基で構成される一群である。

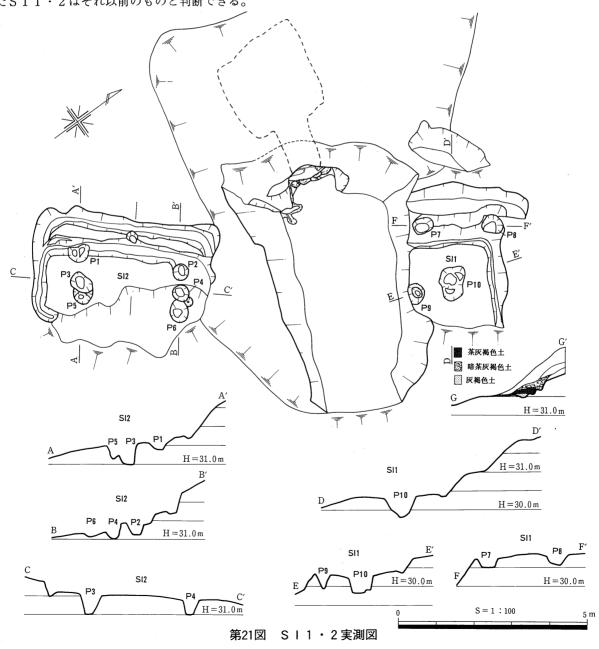
位置的には、福成早里横穴墓とほぼ同レベルの標高約30m付近に存在するSI1・2及びSS13、標高約38mの横穴墓後背周溝に隣接するSI3とに大別できる。SS13は斜面をほぼ直角に掘削し、長方形の平坦面を設け

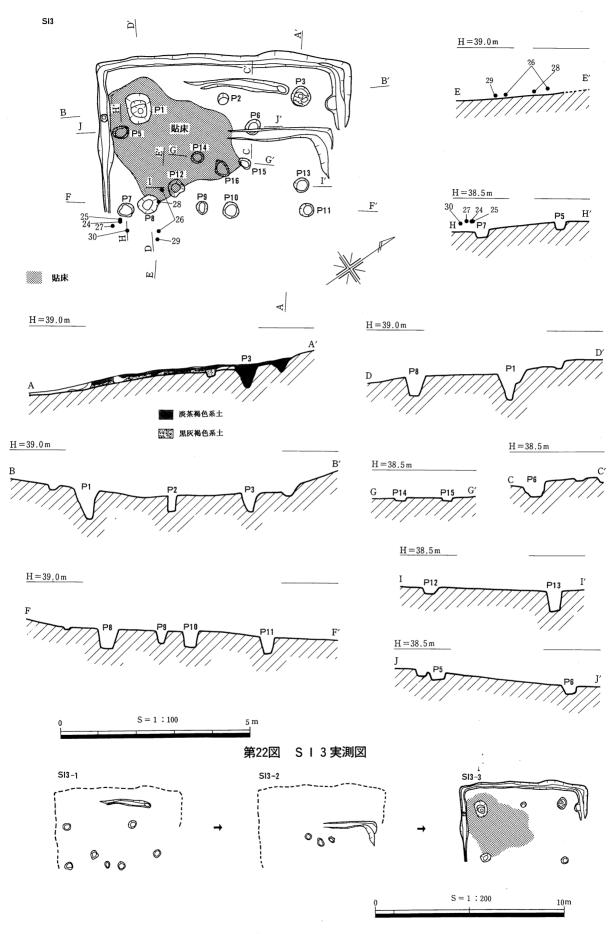


たテラス状遺構である。規模は南北の長さ6m、東西の幅1.2m。埋土は黒褐色土を主体とし、溝やピットは見られない。

SI1・2は福成早里横穴墓の前庭部によって一部撹乱を受けている。SI1においては、残存する住居の北東隅を検出した。平面プランは方形と思われる。壁裾には底面幅約10cm・深さ15cm程の溝がめぐる。床面中央のP10は2つのピットが重複したものであり、また溝の後背部分に並ぶP7・8の存在から、建て替えが行われた可能性が考えられるが、切り合い関係は把握できなかった。

SI2は北東側の一部が横穴墓の前庭部によって撹乱されている。平面形は長方形で、後背壁面裾には底面幅・深さとも約20cmの溝がめぐる。床面 4×2 m程度の比較的小規模な住居と考えられる。土層の断面から、2回の建て替えが行なわれたことが確認できた。2回に渡り、西側へ住居を移動させていったことが窺える(以下最下層のものをSI2-1、中間層のものをSI2-2、上層のものをSI2-3と呼称する)。P1・2はSI2-3、P3・4 はSI2-2、P5・6 はSI2-1に伴う柱穴と考えられる。SI1・2に伴う遺物は確認できなかったが、その構築・使用時期は福成早里横穴墓との切り合い関係から推察でき、横穴墓の造られた時期が6世紀末~7世紀初頭に位置付けられていることから(第4章第2節3参照)、横穴墓構築時に一部撹乱を受けたSI1・2 はそれ以前のものと判断できる。





第23図 SI3の変遷

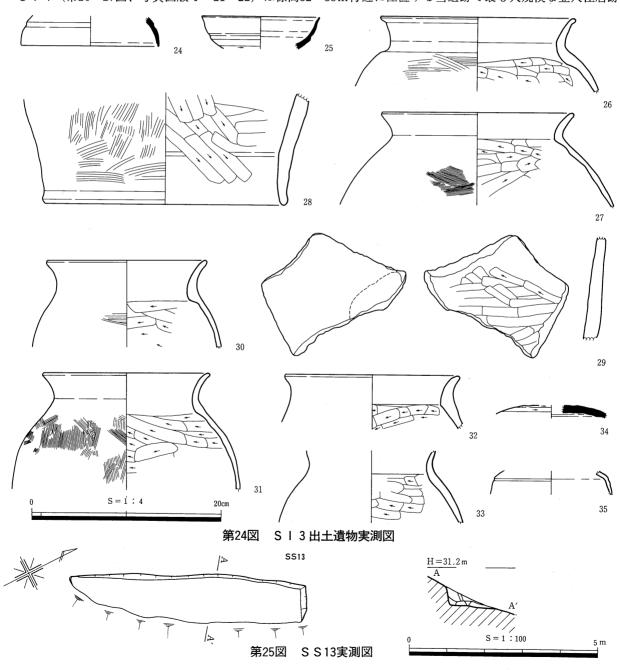
SI3は谷部に位置し、標高約37~38m付近の平坦面上に築かれている。土層の断面より、住居は2回の建て替えが行われたことが判明した(第23図参照)。以下最下層のものをSI3-1、中間層をSI3-2、上層をSI3-3と呼称する。ピット・溝の位置関係を含めて検討したSI3の変遷状況は、第23図に示すとおりである。最終段階のSI3-3は一辺約6.7mの方形プランをとり、壁面裾部には底面幅約20㎝・深さ約20~30㎝の溝が見られる。P1・3・8・11がこの住居の主柱穴と考えられ、住居の南西隅には貼床が部分的に残存している。遺物は住居の東南付近から比較的集中して出土した。SI3-1の床面ほぼ直上からは土師器の甕(26)・甑(28)、竃(29)が、また、SI3-3の床面付近に相当するレベルでは須恵器の坏蓋(24)・高坏(25)、土師器の甕(27・30)の出土を見た。24はTK217相当と思われ、SI3は7世紀前葉に比定される。

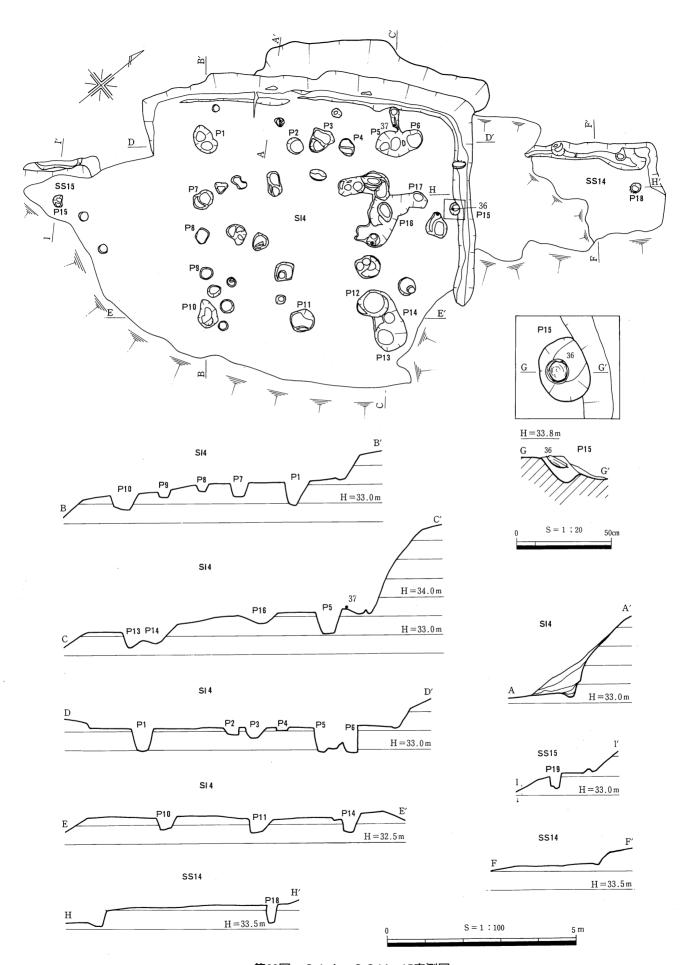
3. B-1群(SI4~11、SS14~22)

調査区のほぼ中央、標高27~35m付近を中心に展開する竪穴住居跡・テラス状遺構群である。

B-1群の竪穴住居跡においては、溝は遺構の後背側をL字状にめぐっており、その対面側に壁の存在を示す ものは見られない。本来的に、削り込んだ壁の対面には溝を設けない構造の住居跡と考えられる。

S I 4 (第26・27図、写真図版 4・21・22) は標高32~35m付近に位置する当遺跡で最も大規模な竪穴住居跡



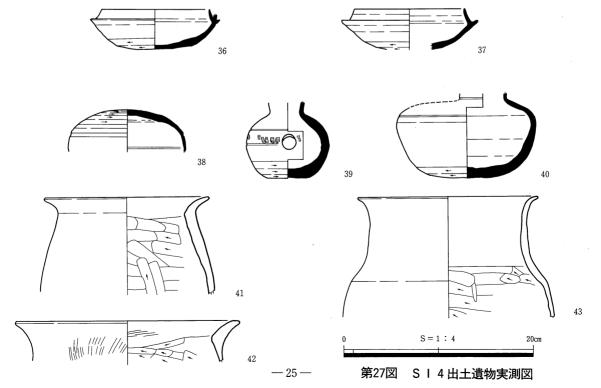


第26図 SI4・SS14・15実測図

である。調査前から比較的平坦な地形が確認でき、当初から遺構の存在が予測された地点である。平坦面は、約8.5×7.5mの長方形を呈し、後背壁面裾部には底面幅約20cm、深さ約15cmの溝がめぐる。後背崖面掘削の比高差は約2 mに達する。ピットの位置を検討した上で主柱穴となるものをP1・3・5・7・10・11・14・16と推測すると、桁行・梁行ともに2間、各柱穴間1.5~2 mの住居が想定できる。平坦面には他にも小規模なピットが点在するが、これらは補助的な柱であろうか。北東側の溝に接するP14の埋土上層からは、須恵器の坏身(36)が完形で出土している。また、床面からはやや浮いた状態であったが、後背壁面及び溝近辺に集中するかたちで須恵器の坏蓋(38)・坏身(37)・平瓶(40)・**횮**(39)、土師器の甕(41~43)なども出土している。36・37・38はT K 209相当で、6 世紀末~7 世紀初頭に比定されるものである。S I 4 の両隣に位置するS S 14・15は④タイプのテラス状遺構であるが、S I 4 との切り合い関係は把握できなかった。

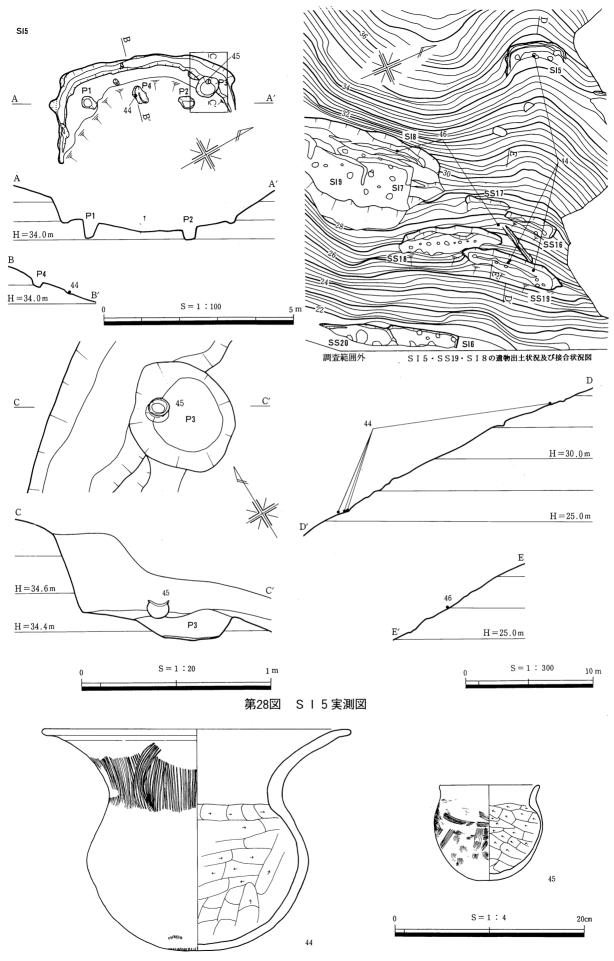
SI4の南側は急峻な谷地形となっている。標高34.5~35m付近の谷間に位置するのがSI5(第28・29図、写真図版5・22)である。住居の床にあたる部分はほとんど流失してしまった状態であるが、西側の壁とその裾に設けられた溝を「コ」の字状に検出した。残存部分より、一辺4.6mの方形住居であったものと考えられる。壁裾にめぐる溝は底面幅約20cm・深さ約10cmを測る。ピットは4基確認した。配列より、P1・2を主柱穴と推測する。P3の埋土上層からは完形状態の小型の土師器甕(45)が、また、いびつな平面形を呈するP4上層からは土師器の甕片(44)が出土した。P4より出土した甕片(44)は、SI5の下方、比高差約9mの地点に位置するSS19の床面近くで検出したものと接合し、ほぼ一個体に復元できた(第28・29図参照)。44の口縁部及び胴部の大半はSS19より検出されたものである。SS19北側の床面付近に口縁部が伏せた状態で置かれており、その近辺に胴部の破片も散乱していた。44の器形は、寸のつまった小ぶりな胴部の上に、口径の広い、大きく外反する口縁部が付くものである。

SI7~11(第30~32図、写真図版 6・22)は標高28~31m付近に位置する竪穴住居跡群である。南北に約30 m、東西約2 mにわたって広がる大規模な平坦面上において、5 基の竪穴住居跡を検出した。後背崖面掘削の比高差は約2 mを測る。SI7・9~11は長方形の平面プランで、規模は4.5×2 ないし3 m程度の住居と考えられる。後背壁面裾部には、底面幅約15cm・深さ10cm前後の溝が見られる。SI7はP11~14を主柱穴とした4本柱、SI9~11は2本柱の住居である。溝の切り合い関係から、SI7はSI9以前のものと判断できる。SI11では溝が2条見られ、建て替えが行われている。SS11のP1では南側壁面に焼土が見られ、埋土には多量の炭が含まれていた。SI8はSI7・9の上方に位置している。後背壁面裾には底面幅約10cm・深さ15cm、南北に約5 m伸びる溝が見られ、溝に平行するかたちでP15~17が並ぶ。SI8・9との前後関係は把握できなかっ

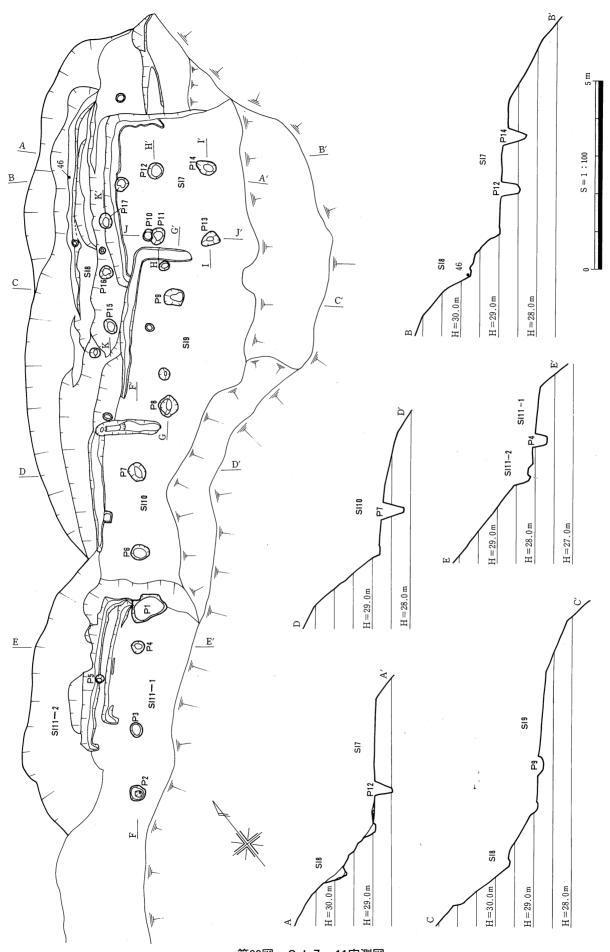


たが、SI8の床面はSI7・9よりも1mほど高い位置に存在している。SI7の埋土下層からは須恵器の坏蓋(47)が検出されている。SI8の溝底面付近より出土した須恵器の坏蓋(46)は、SI8の東、4mほど下方に位置するSS18・19付近で出土した須恵器片と接合した(第28図参照)。46はTK217、47は陰田7期に相当し、それぞれ7世紀前半、7世紀中葉に比定される。また、SI7~11上層の遺物としては須恵器の高坏(48)、土師器の甕(49)・甑(50)、支脚(51)、磨石(52)などが挙げられる。

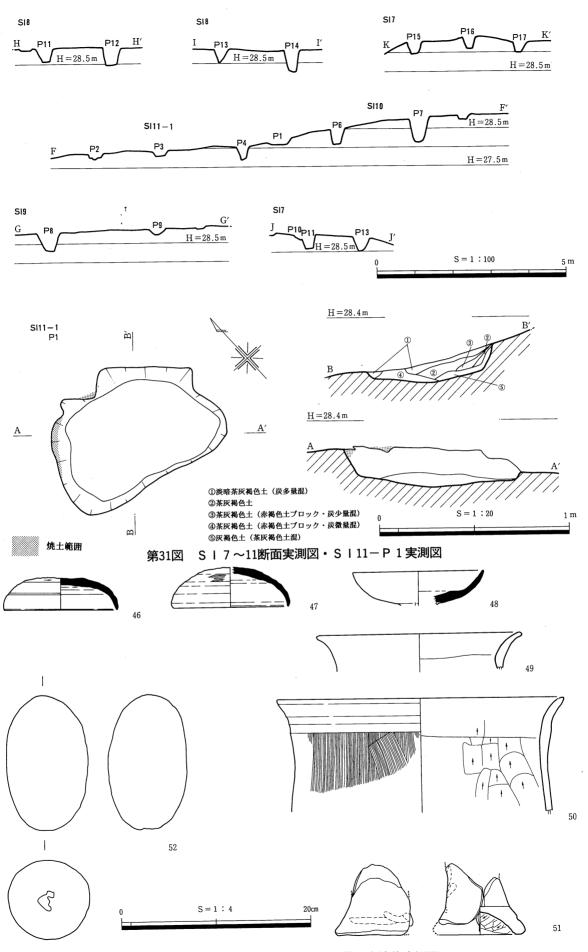
SS16~19 (第33~35図、写真図版5・22・23) はSI5の下方、標高25.5~29m付近に位置するテラス状遺 構群である。比高差3.5m、南北約13mの範囲内に、3つのタイプのテラスと1条の溝が見られる。SS17は④タ イプ、SS16は②タイプのテラス状遺構である。SS16では底面幅・深さとも約10cmの溝2条と2基のピットが 見られるが、平坦面は流失しており平面形態は不明である。SS16・17に伴う遺物は確認できなかった。SS18・ 19は①タイプに分類される。SS18・19においては、斜面に客土を施し平坦面を拡張した痕跡は認められなかっ た。SI5より転落してきた土師器の甕(44)がSS19の床面ほぼ直上より出土していることを考慮すると、S S19の上部構造は、一列に並ぶ柱で屋根を支える、壁のない建物と考えられる。SS18では、長さ約8m・幅約 1.5mの平坦面上に10基のピットが30~40cmの間隔をとりながら一列に並ぶ。ピットの中には方形の平面形をと るもの (P3・5・6・8) が見られ、方形のピットの間には径10~20cm前後の小規模なピット (2・4・7・ 9) が配置されている。深さは方形ピットが約40cm、小規模な円形ピットが30cm前後である。SS19は、長さ 7.5m・幅約1mの平坦面上に溝とピット9基を持つ。溝は、底面幅・深さとも約10cmで南北方向に5mほど伸 びるものと、テラス北西側の壁裾より東方に1mほど伸びるものの2条が存在する。南北方向の溝は、後背壁面 裾との間に30cmほど距離を置いて造られている。ピットは南北に伸びる溝と一部重複しながら一列に並ぶ。土層 断面からはSS19がSS18以前の所産であることが判明している。SD6はSS17・SS19間の斜面を東方に向 かってはしる溝である。底面幅約30cm・最大深20cmを測り、東西約3.8mにわたり伸びている。SS19の床面に 見られる長さ1mほどの溝は、溝の方向及び位置を検討するとSD6の延長である可能性もある。付近一体の地 山は非常にもろい風化した岩盤であるため、降雨時の谷間を流れる濁流によって削られたものという可能性もあ る。SS18の埋土中からは須恵器の高坏(63)・脚台(64)・甕(65)、土師器の高坏(66・67)・甑(68・69)、 竈(70)、土製品(71)、鉄製品(72)などが出土している。SS19からは埋土下層・床面付近より須恵器の坏蓋 (53·54)・坏身(55·56)、竃(57)が出土した。SS19の埋土中からは、須恵器の坏蓋(58)・坏身(59)・ **甕 (61)、甑あるいは竃 (62) などが出土している。53はTK209相当で、6世紀末から7世紀初頭に比定され、** SS19の年代を示していると考える。60はSS19の埋土より上層の出土で、陰田8期に相当し、7世紀後葉に比 定される。



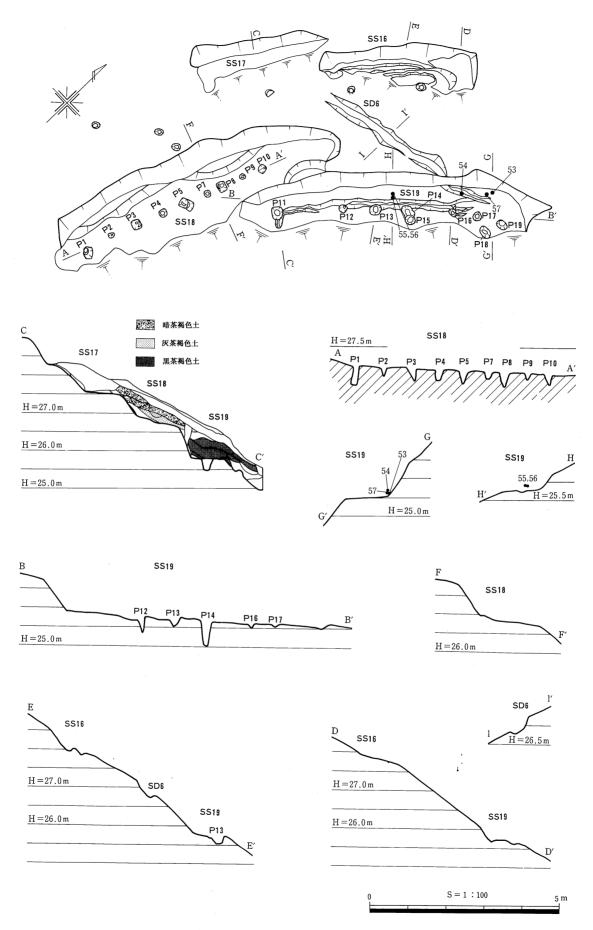
第29図 SI5出土遺物実測図



第30図 SI7~11実測図



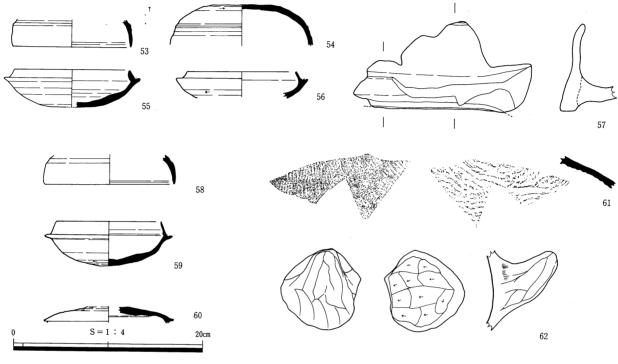
第32図 SI7・8・SI7~11上層出土遺物実測図



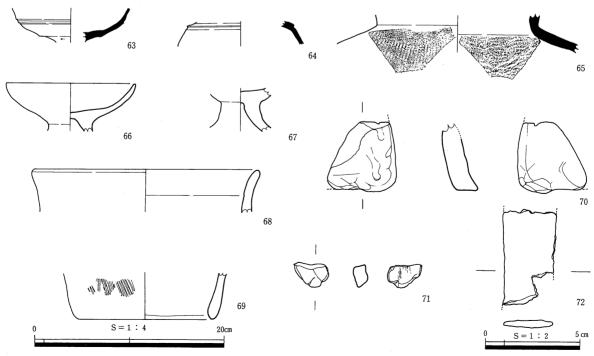
第33図 SS16~19・SD6実測図

~123) が出土している。104~106はTK209に相当し、6世紀末~7世紀初頭に比定される。

SS21・22(第40~42図、写真図版 6・23・24)はSI8~11の西南方向、標高31~33m付近に位置する。長方形のプランの狭長な平坦面を持つ①タイプのテラス状遺構である。主に赤茶灰褐色系の埋土が堆積しており、土層断面から、SS21よりSS22の方が古い構築であることが判明している。両テラス状遺構の西側は調査区外へと続いているため、遺構の全体像は不明である。SS22の平面プランは長方形を示し、後背壁面裾には底面幅約10cm・深さ15cmの溝がめぐる。溝と一部重複するかたちで平坦面の東隅と西側の隅に2基のピットが存在している。SS21は、長さ約9.5m・幅約1mの狭長な平坦面上に溝と7基のピットを持つものである。後背壁面裾にめぐる溝の規模は、底面幅約15cm・深さ10cm。P4からP2・P3の間にかけては、長さ2.5mほどの小規模



第34図 SS19出土遺物実測図



第35図 SS18出土遺物実測図

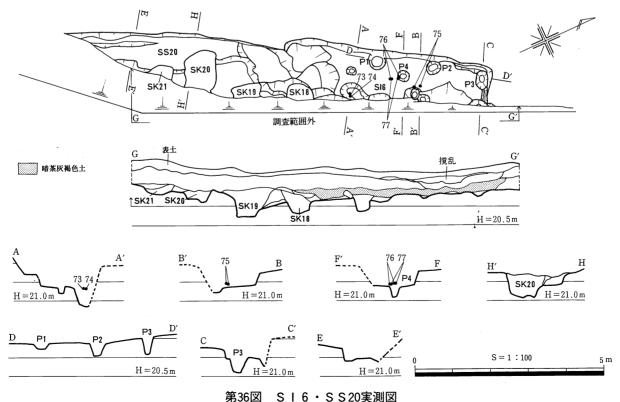
な溝が存在する。ピットは後背壁面裾の溝に平行し、約1.2mの間隔をとりながら並ぶ。径30cm前後・深さ約60 cmとピットの規模には規格性が窺え、方形の平面形態をとるのが特徴的である。SS21の溝の底面直上から出土した遺物に、須恵器の短頸壺(124)がある。その他、SS21の埋土より上層からは須恵器の坏蓋(125)・坏身(126)・高坏(127)・甕(134~136)、土師器の甕もしくは竃(128)土師器の甕(129・130)、竃(131~133)が一ヶ所にまとまったかたちで出土している。125はTK217に相当することから、 $SS21 \cdot 22$ はT世紀前葉を下限とする可能性があるといえる。

4. B-2群 (S I 12、S S 23~35)

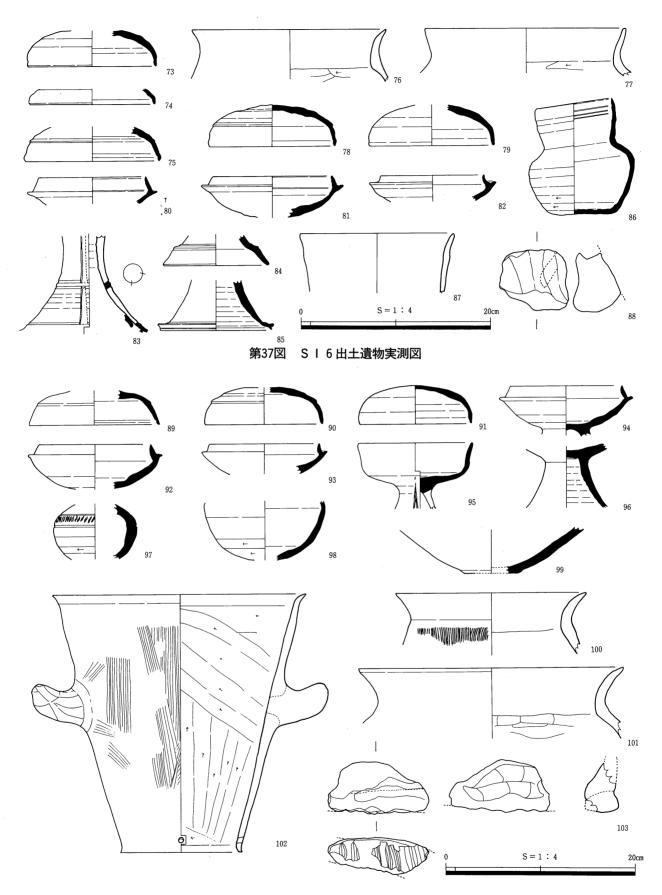
調査区の中央よりやや南、標高21.5~26.5m付近に位置する竪穴住居跡・テラス状遺構群である。東西約25m 比高差約5mの範囲に、大小13基のテラス状遺構と竪穴住居跡1基が存在する。①タイプとしてはSS29・30・ 32・35が、③タイプに23・25・31、④タイプにSS24・26・27・28・33・34が挙げられる。

SI12(第43・44・47図、写真図版7・8・24)は、標高21.5~22.5m、B-2群内において最も低位かつ平坦な丘陵裾に位置している。住居の東側は一部撹乱を受けており、また流失している様子だが、基本的に長方形あるいは方形プランの竪穴住居跡と考えられる。SI12は、住居の壁裾部をめぐる溝と、その内側の平坦面上をL字状に走る溝の計2条が存在し、住居の建て替えが行われたことを示している。(以下、外側のものをSI12-1、内側のものをSI12-2と呼称する)。両者の切り合い関係は把握することができなかった。SI12-1の平坦面の規模は7.2×3.5m。住居の後背壁面裾の溝は、底面幅約20cm・深さ約10cmを測る。ピットの配置を検討した結果、平坦面の中心付近に一直線上に並ぶP23・27・28を、SI12-1の主柱穴と考えた。その他平坦面上に多数見られる小規模なピットは補助的な柱穴であろうか。SI12-2は、SI12-1の後背壁裾より約1m内側に位置している。L字状に屈曲する溝は、底面幅約20cm・深さ約10cm、南北方向約3.5m・東西方向に約1.8 m走る。溝の内側には小規模なピットが点在しているが、主柱穴に相当するものは確認できなかった。

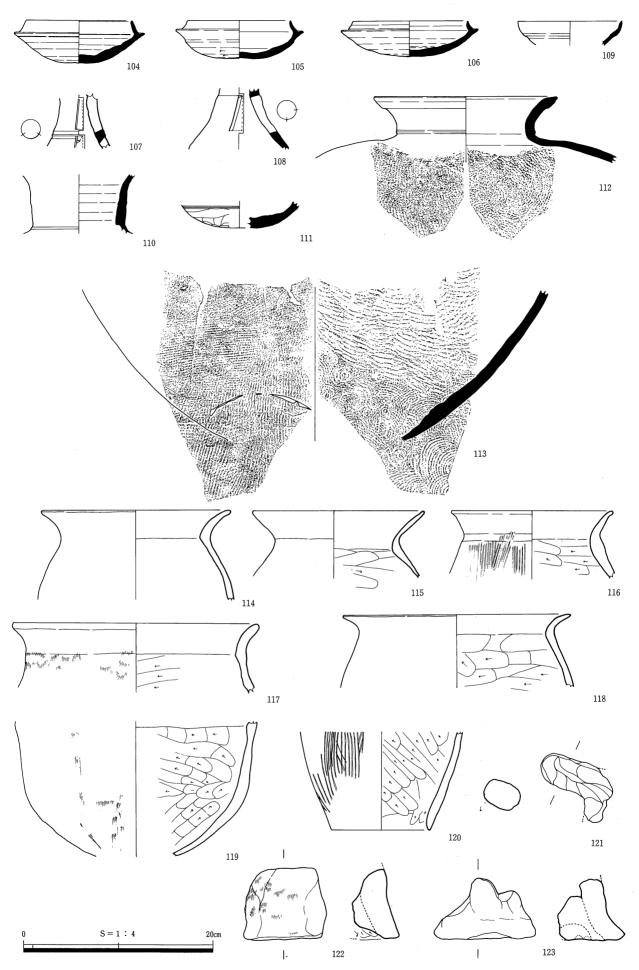
S I 12の遺物としては、須恵器の坏身(144・145)・高坏(146)・壺(147・148)などがS I 12-1 後背裾の溝付近埋土下層より出土しており、またS I 12-3 の溝に重複する P 26の埋土下層では竃片(149)を検出している。その他、住居の埋土中からは須恵器の坏蓋(150)・坏身(151・152)・壺または横瓶の口縁部(153)・高坏(154)、土師器の甕(155・156)・甑(157)、竃(158)が出土した。144・145は T K 209相当で6世紀末~7



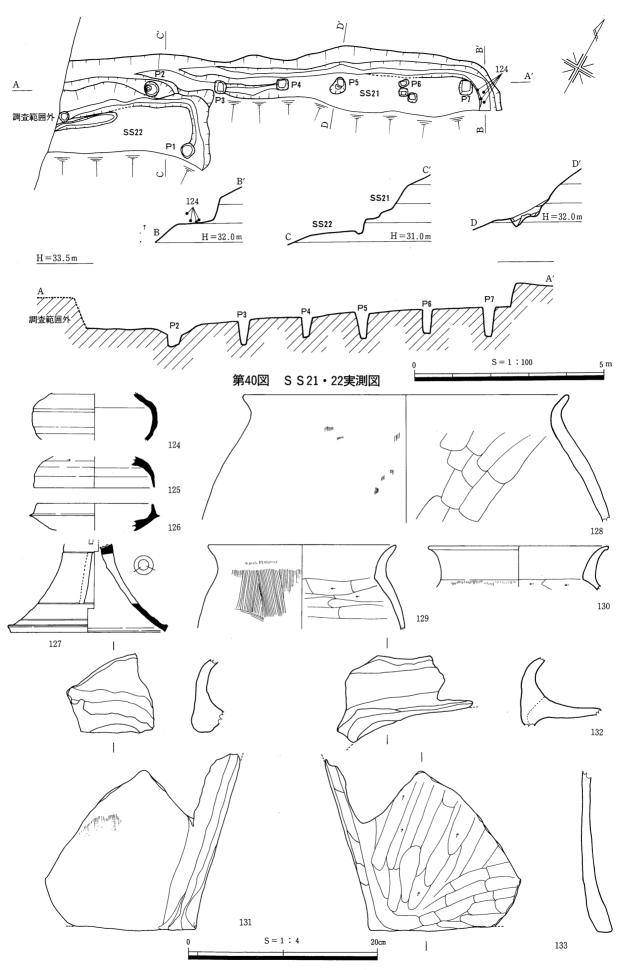
00E 010 0020



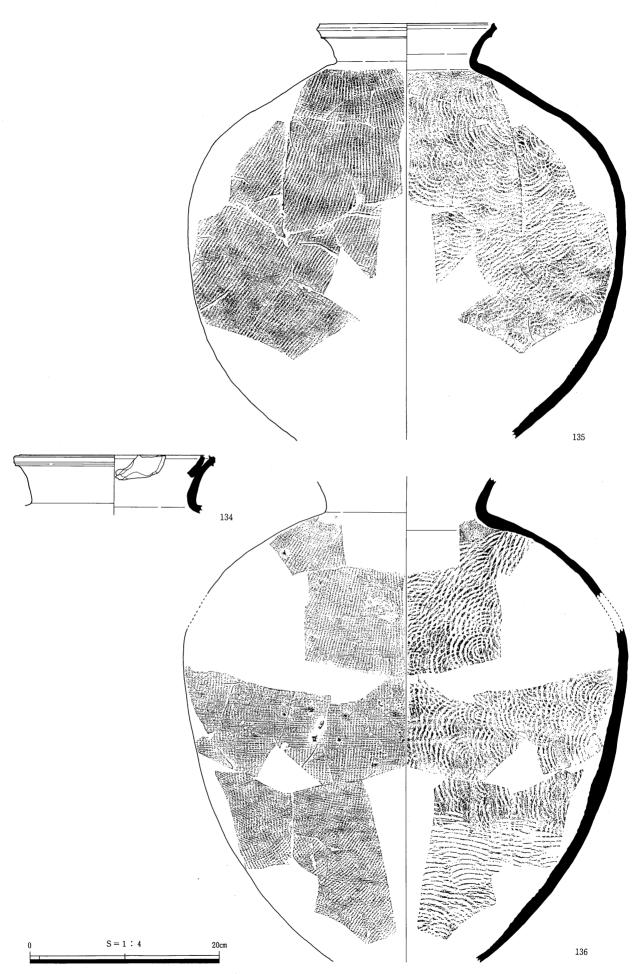
第38図 SI6上層出土遺物実測図



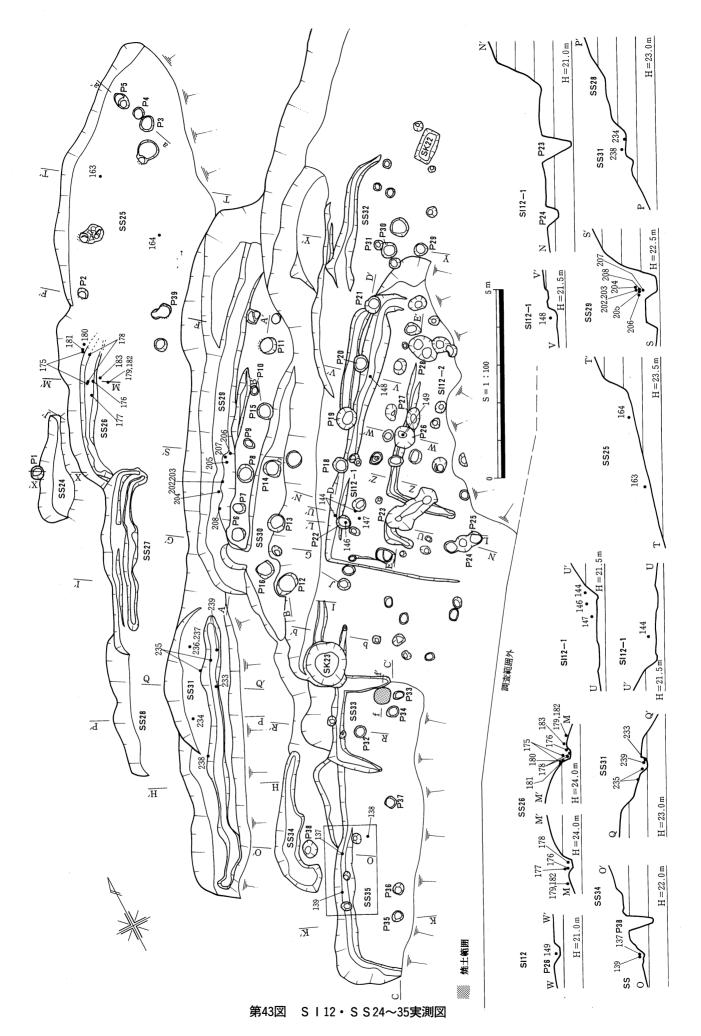
第39図 SS20出土遺物実測図



第41図 SS21・SS21上層出土遺物実測図



第42図 SS21上層出土遺物実測図



世紀初頭に比定され、この住居の時期を示すものと考える。

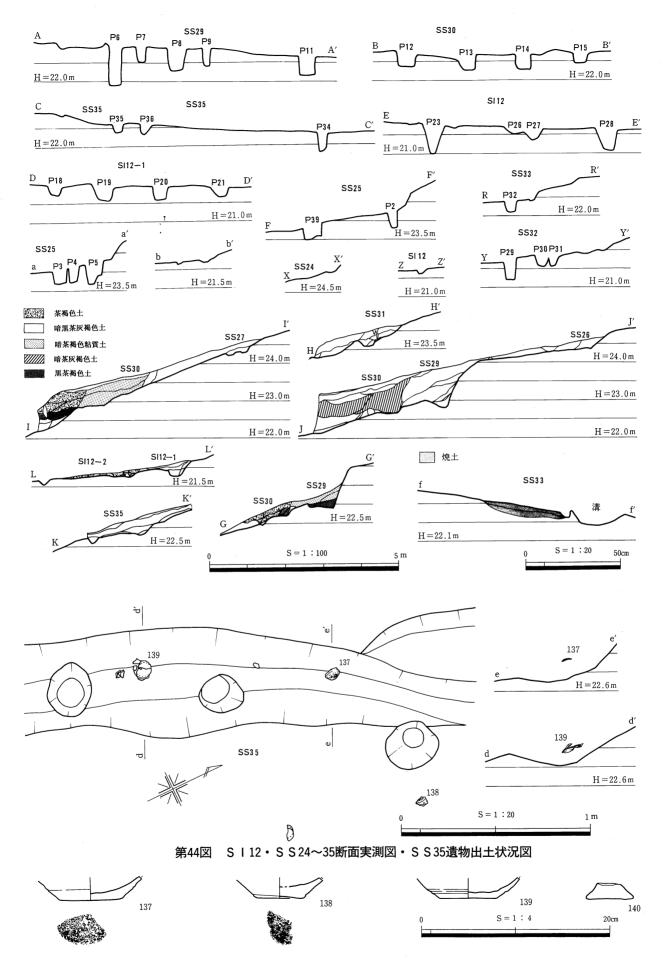
①タイプのテラスであるSS32(第43・44・46図、写真図版7・8)はSI12の北上方に位置する。後背壁面の北裾に1.5mほど伸びる溝、それを一部切るようなかたちで、北東側で緩やかなカーブを描きながら約4m走る溝、SI12-1の壁上を2.7mほどにわたり伸びる溝の3条が存在する。SI12-1の北東壁と一部重複しながら一直線上に並ぶP18~21・30は、SS32の主柱穴と考えられる。平坦面上にはその他にも小規模なピットが数基見られるが、これらは補助的な柱穴と思われる。SS32の埋土下層からは、須恵器の坏蓋(141・142)・高坏(143)が出土している。141はTK209、142はTK217に相当し、それぞれ6世紀末~7世紀初頭、7世紀前葉に比定される。

SS29・30 (第43・44・55図、写真図版7・8)は、SI12の上方、標高22.5~23m付近に位置する。両者は①タイプに分類される。両者の平坦面の比高差は約30cmであり、土層断面より、SS29の一部を切ってSS30が構築されたことが判明している。SS29は、後背壁面裾に底面幅約30cm・深さ約40cmの溝を備えている。溝はテラス南西側で緩やかにカーブを描き、1mほど東南に向かったのち途切れる。溝の中央付近からは、分岐するように2mほど、浅く小規模な溝が北東に向かって伸びる。残存する後背壁面の高さは約1mを測る。平坦面上にはピットが一列に並ぶ。径40cm前後のP6・8・15・11が主柱穴と考えられ、これらの間に見られる小規模なピットは補助的な柱穴と思われる。SS30の狭長な平坦面上には、ピットが2基(P14・16)存在している。その下方、SS30の平坦面より外れた斜面上には、P12・13が位置している。遺物は、須恵器の坏身(203)・坏蓋(202・204)・高坏(205・206)・甕(208)、土師器の椀(207)が溝の埋土下層、底面付近で検出された。その他SS29の埋土中より、須恵器の坏身(211~216)・坏蓋(209・210)・高坏(217~221)・壺(222)、土師器の甕(223~228)・鉢(229)・甑(231)、竈(230)、支脚(232)が出土した。202はTK209に相当するもので、6世紀末~7世紀初頭に比定される。

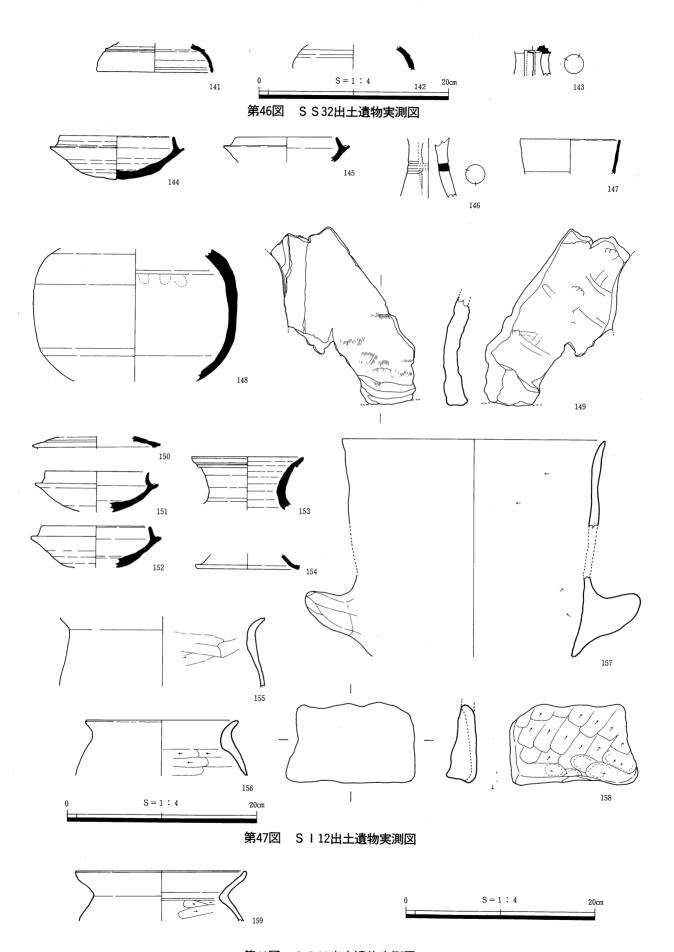
③タイプに相当するものとしては、SS31 (第43・44・56図、写真図版 7・8・26・27) が挙げられる。SS31は、SS29の南隣、標高23.5~24m付近に位置している。南北約8m・東西幅約1mの狭長な平坦面上には、底面幅・深さとも約20cmの溝が見られる。溝は後背壁面裾から東に約30cmの距離をとって切られているものである。SS31の溝の底面直上からは土師器の甕(233)・手捏ね土器(234)が、溝の埋土下層からは須恵器の坏身(235)・甕(236)、土師器甕(237)、支脚(238)、竈(239)が出土している。埋土中からは、須恵器の坏蓋(240~242)・坏身(243)・醸(244)・甕(245)、土師器甕(245~248)・甑(249~252)、竈(253)、支脚(254)、手捏ね土器(255)が出土している。時期決定資料として取り挙げる235は陰田7期(7世紀中葉)に相当し、埋土中遺物の240~242と時期的に齟齬をきたさない。

SS23 (第49・50図、写真図版 7・24)、SS25 (第43・44図、写真図版 7・8・24) も、③タイプのテラス 状遺構である。SS23はB-2群中最も高い標高地点に位置し、大規模な平坦面を持つテラス状遺構である。遺 構の西側は調査区外へ続いており、全体像は定かでない。長さ約11.4m・幅約3mの広い平坦面上の北側にはピットが3基(P1~3)見られる。遺物は遺構の西壁裾の埋土下層に集中しており、須恵器の壺 (160)・ 醸 (161)、土師器の甑 (162)が検出された。161の底部には、3本線を三角形状に組み合わせたへラ記号が刻まれている。遺物は7世紀代のものと考えられる。SS25は、標高23.5~24.5m付近、SS23の下方に位置している。規模は長さ約7m・幅約4mを測る。平坦面上にはピットが8基存在するが、その配列及び規模に規格性は見られない。遺物は埋土下層床面付近より土師器甑 (163)・ 椀 (164)が出土している。また埋土中からは須恵器の 坏蓋 (165)・ 坏身 (166・167)・ 壺あるいは鉢 (168~170)、土師器の甕 (171)・ 甑 (172) ・ 高坏 (173)・ 坏身 (174) などが出土している。165は陰田7期に相当し、7世紀中葉に比定される。

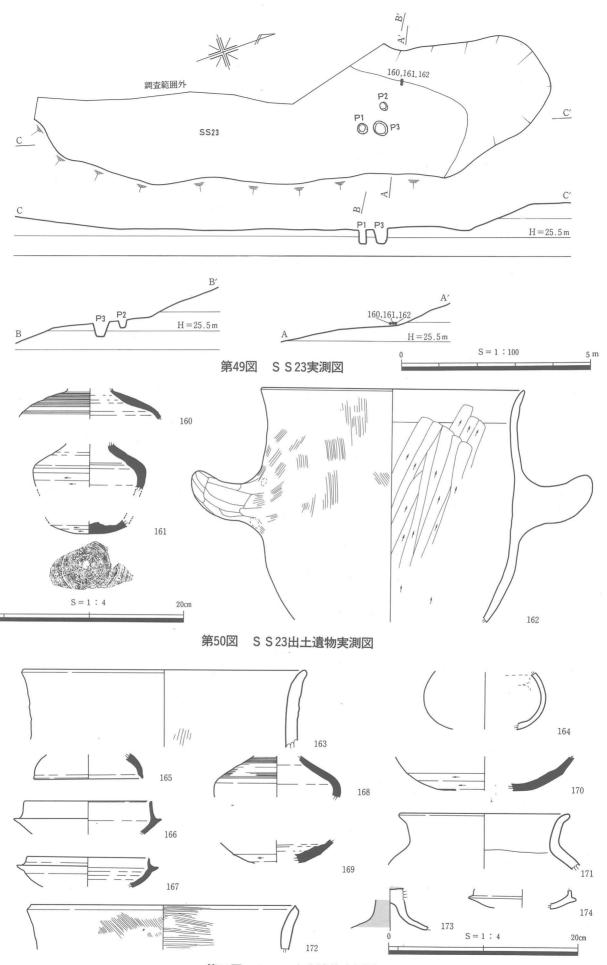
④タイプに相当するSS33は、標高22.5m付近、SS35の北側に位置している。「コ」の字状にめぐる溝と小規模なピットが存在する。また平坦面上においては、直径40cm・深さ5cmほどの範囲で床面が火を受けた痕跡を確認した。竃が置かれた位置を示すものである可能性を考える。同じく④タイプのSS26はSS24の下方、標高24.5m付近に位置する。両隣には、SS25、27が位置している。後背壁面裾の溝は底面幅約20cmを測り、約3.5m



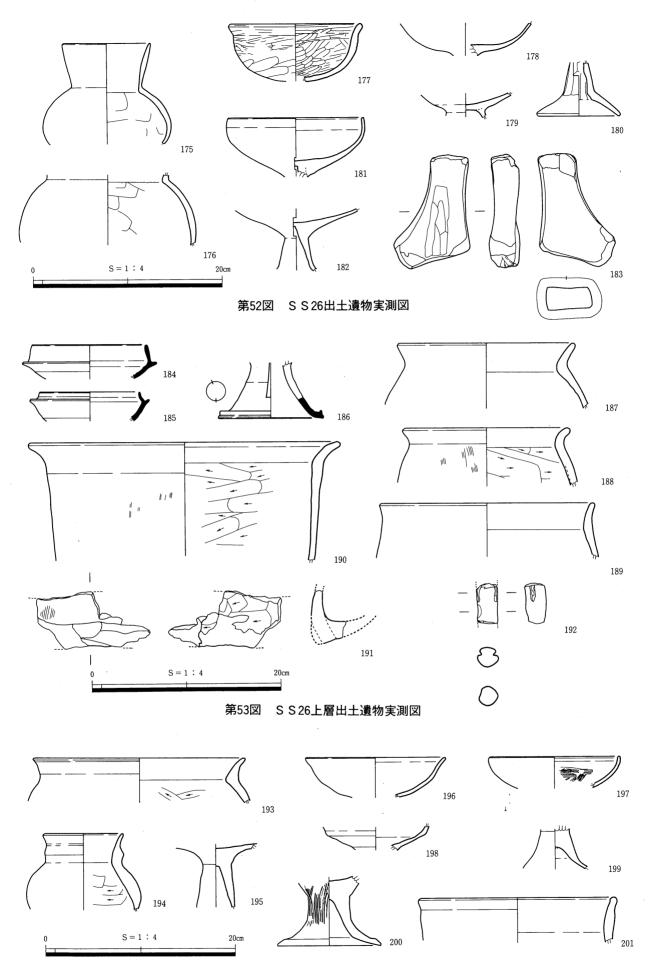
第45図 SS35出土遺物実測図



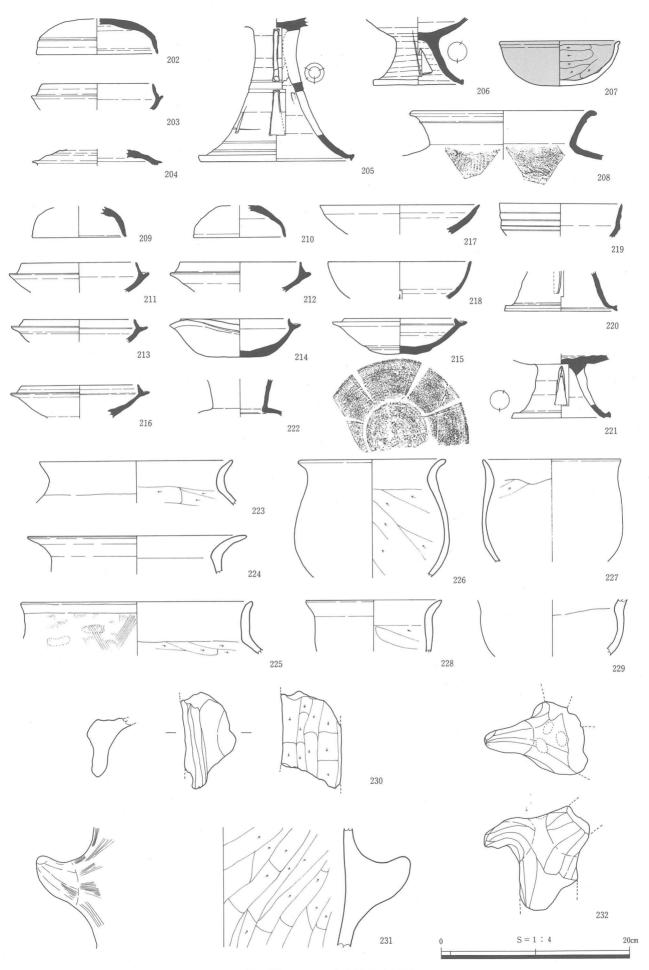
第48図 SS33出土遺物実測図



第51図 SS25出土遺物実測図



第54図 SS27・SS24出土遺物実測図



第55図 SS29出土遺物実測図



-44 -

ほど の長さで南北に緩やかなカーブを描いて伸びるが、南側はSS27の溝によって切られ、北端はトレンチによっ て不明瞭になってしまった。遺物は、溝の埋土中に集中して見られた。土師器の高坏(178)は溝の底面直上から 出土している。その他、土師器の小型丸底壺(175)・甕(176)・鉢(177)・高坏(178~182)、砥石(183)などが溝の埋土下層から出土している。遺構の上層からは須恵器の坏身(184・185)・高坏(186)、土師器の甕 (187~190)、竈(191)、棒状土製品(192)を検出した。溝底面付近で検出した遺物より、SS26は5世紀後半のものと考えられる。SS27も④タイプのテラス状遺構である。溝は後背壁面裾に2条が存在する。遺物は出土していないが、両隣に位置するSS26・28を切って造られており、SS26の時期から、SS27は5世紀後半以降の所産といえる。その他、④タイプに相当するテラス状遺構としては、SS24・28(第43・44・54図、写真図版7・8・25・26)」が挙げられる。SS24は標高25m付近、SS28は標高24.5m付近に位置する。SS24は長さ約2.3m・最大幅50cmを測り、甑と思われる遺物(201)がP1の埋土中より検出されている。

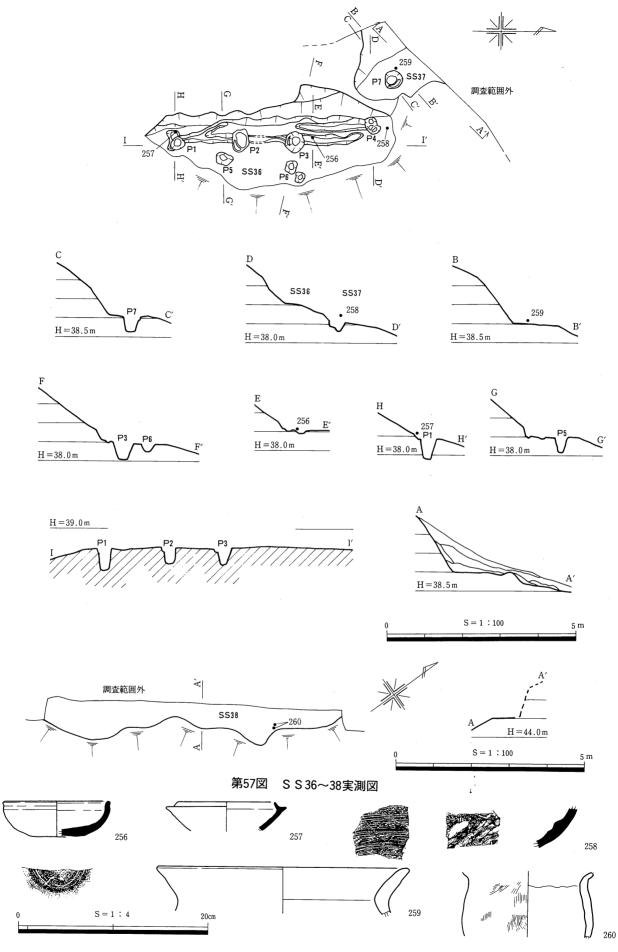
SS35(第43~45図、写真図版 $7 \cdot 8 \cdot 24$)はB-1 群の東南端、標高 $22 \cdot 22.5$ m付近に位置する。形態的には①タイプに分類できるが、遺物の出土相は他のテラス状遺構とは異なっている。約 7.5×2 mの長方形プランの平坦面を持ち、後背壁面裾には底面幅約15cmの溝がめぐる。溝に平行するかたちでピット 3 基($P35 \cdot 37$)が並ぶ。溝の北側は、SS33の「コ」の字状にめぐる溝によって一部切られている。ピットの配列から考えると、SS33の溝の正面に位置している P34はSS35に伴う柱穴の可能性もある。SS35の溝埋土下層からは、土師質土器の坏($137 \cdot 139$)・皿の柱状高台(140)が出土した。いずれも底部に糸切り痕が見られる。出土遺物よりSS35を13世紀のものと考える。

5. C群(SS36~38)(第58図·写真図版8)

調査区の南端、D区に存在するテラス状遺構群である。早里山から谷をひとつ隔てた南、荒神山の急斜面上、標高38.5~40.5m付近にSS36·37が、標高44~44.5m付近にSS38が位置している。

SS36は、①タイプに相当するテラス状遺構である。半月形を意識した平面プランと思われ、平坦面上にはピットと溝が存在する。溝は、後背壁面裾に2条が存在する。東側の溝は南北の長さ5m、底面幅・深さとも約10㎝。 P1より北へ50㎝ほどの地点で分岐し、北西に50㎝ほど伸びて後背壁面に接し、終結する。北東側の後背壁面裾を走る溝は、長さ約2m・底面幅約10㎝・深さ約5㎝を測る。ピットは東側の溝と重複するP1~3、壁面裾の溝と重複するP4がほぼ一直線状に並んでいる。ピットの規模は径約30㎝・深さ約50㎝と規格性が見られる。SS36の北西隣にはSS37が位置する。遺構の北東側は調査区外に続いていくため、全体像は不明である。平坦面上では、径約40㎝・深さ約50㎝のピット(P7)を1基確認した。SS36の埋土下層・床面付近からは須恵器の坏身(256・257)・甕(258)が、またSS37の床面ほぼ直上からは土師器の甕(259)が出土している。257は陰田7期に相当し、7世紀中葉に比定される。256は陰田8期に相当するもので、7世紀後葉のものと考えられる。

SS36・37の南西上方にはSS38が位置している。福成早里遺跡において最も標高の高い地点に位置するテラス状遺構である。遺構は調査区外との境界に存在するため、検出できたのは平坦面の一端である。調査区外、SS38の北西側には、さらに平坦面が続いている。SS38の検出規模は、長さ約7.8m・幅約1m。溝及びピットは確認できなかった。SS38では、埋土下層より土師器の甕(260)が出土した。



第58図 SS36~38出土遺物実測図

第2節 古墳・横穴墓・その他の墳墓

遺物の詳細については、章末の観察表を参照頂きたい。

1. 古墳

SD2の南西側、北東方向へ伸びる尾根上の平坦部において古墳3基(早里14・15・16号墳)を検出した。墳丘検出状態における標高は、14号墳の墳頂部が32.1m、15号墳の墳頂部で31mである。いずれも円墳と考えられ、埋葬主体は14号墳が横穴式石室、15号墳が土壙墓または木棺直葬、16号墳については周溝のみの検出のため不明である。

早里14号墳 (第59~64· 66·67図、写真図版 9·28·29)

16号墳の北北東側、15号墳の南南西側に位置する。横穴式石室を埋葬主体にもつ円墳である。調査前の状況は、マウンド状の高まりにより古墳と認識できたものの、墳頂部には陥没がみられ、後世の撹乱を受けていることが推察された(第59図)。

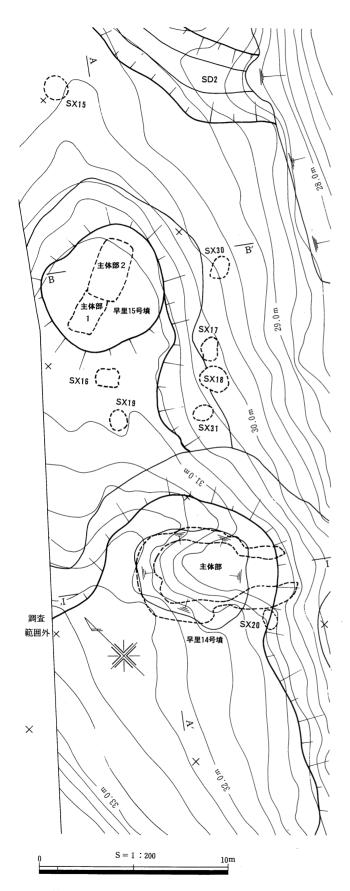
墳丘は南北の周溝底間が12.6mを測る。北側の周溝底から遺存する墳頂部までの高さは約1.2m、遺存する盛土の厚さは最も厚いところで約1.3mである。古墳は、本来の地形を利用しつつマウンド状に地山整形した後、墓壙を掘削し、さらに石室を構築した後に、地山土である黄褐色土と黒褐色系統・茶褐色系統の土を積み重ねて築成している(第60図)。周溝は墳丘の後背に馬蹄形にめぐるかたちで遺存している。南西側においては、周溝の幅が、周溝外側の上端と同じ高さにおいては約3m、深さが、周溝外側の上端と周溝底の間が約0.3mである。北北東から東側にかけての周溝は15号墳の周溝と切り合うが、土層断面の観察では両者の明瞭な前後関係を追うことはできなかった。また、周溝の西側の一部は調査区外のため検出していない。

埋葬主体部は南東側に開口する横穴式石室である(第61・63図、写真図版 9)。しかし、後世の撹乱のため、ほとんど原形をとどめていない。わずかに、羨道部南西側側壁の石2個体とその裏込め石、玄室の南西側側壁の裏込め石 6 個体のみが原位置を保持していた。羨道部の入口付近に、天井石と思われる自然石が、石室の主軸方向に直交するかたちで存在する。石材抜き取りの際に石室主軸方向に沿って引きずり出されたものと推定される。石材は溶結凝灰岩であり、周辺地域に産するものである。石材の抜き取り痕から想定すると、石室は全長約6.5 m、羨道部長約3.2m、幅約1 m、玄室長約3.3m、幅約1.7m前後の両袖式横穴式石室となる。主軸方向はほぼ N-44°-Wである。墓壙の底面には石材の抜き取り痕が検出された。側壁の裏込めには、20~50cm程度の角礫を用い、褐色系統・茶褐色系統の土を互層に充填している。北東側周溝底部において、土壙墓Sx1を検出した(第73・74図、写真図版 9)。いわゆる周溝内埋葬と考えられる。

出土遺物は、玄室内撹乱層から若干の須恵器の坏身・土師器が出ているほかは、ほとんどが周溝内からの出土である(第61・64図、写真図版28・29)。北東側の周溝内からも須恵器や土師器の小片が出ている(第67図)。南西~南側周溝内からは須恵器の坏蓋261~266・276、坏身267~272・275・277、提瓶279、**遠**278、壺280が出土した。このうち、南西~南側周溝内出土の須恵器は、周溝底部から10~40cm程度浮いた状態で出土しており、レベル的には上下15cmの範囲内にほぼ収まる。とくに276・277の蓋坏は、蓋と身が合わさった状態で出土した。276・277は、その他の須恵器の約20cm上層から出土した。その他の須恵器は若干の個体差はみられるものの、ほぼ同時期の所産と考えられる。しかし276・277については、276の口径10.8cm、277の口径12cmとかなり小ぶりで、天井部・底部外面の調整も全面がナデであるなど他の須恵器に比べて後出的であり、出土状況からセットと考えられる。

墓壙内撹乱土中からは、須恵器の坏身273・274、赤色塗彩が施された土師器281が出土した。

墳丘盛土中からは、須恵器の甕287・288、土師器の甕286が出土した(第66図)。287・288の甕は、調整が外面はタタキであるが、内面はこれを強くナデ消している。286は土師器の甕の口縁部である。内面ナデ消しの甕は、陶邑編年ではTK208以前に限られ(5世紀後葉)、土師器の甕は青木編年の青木区に比定されるなど、いずれも古墳時代中期のものである。これらの土器は、古墳の築造の際に盛土中に混入したものと考えられ、古墳の築造以前のものである。

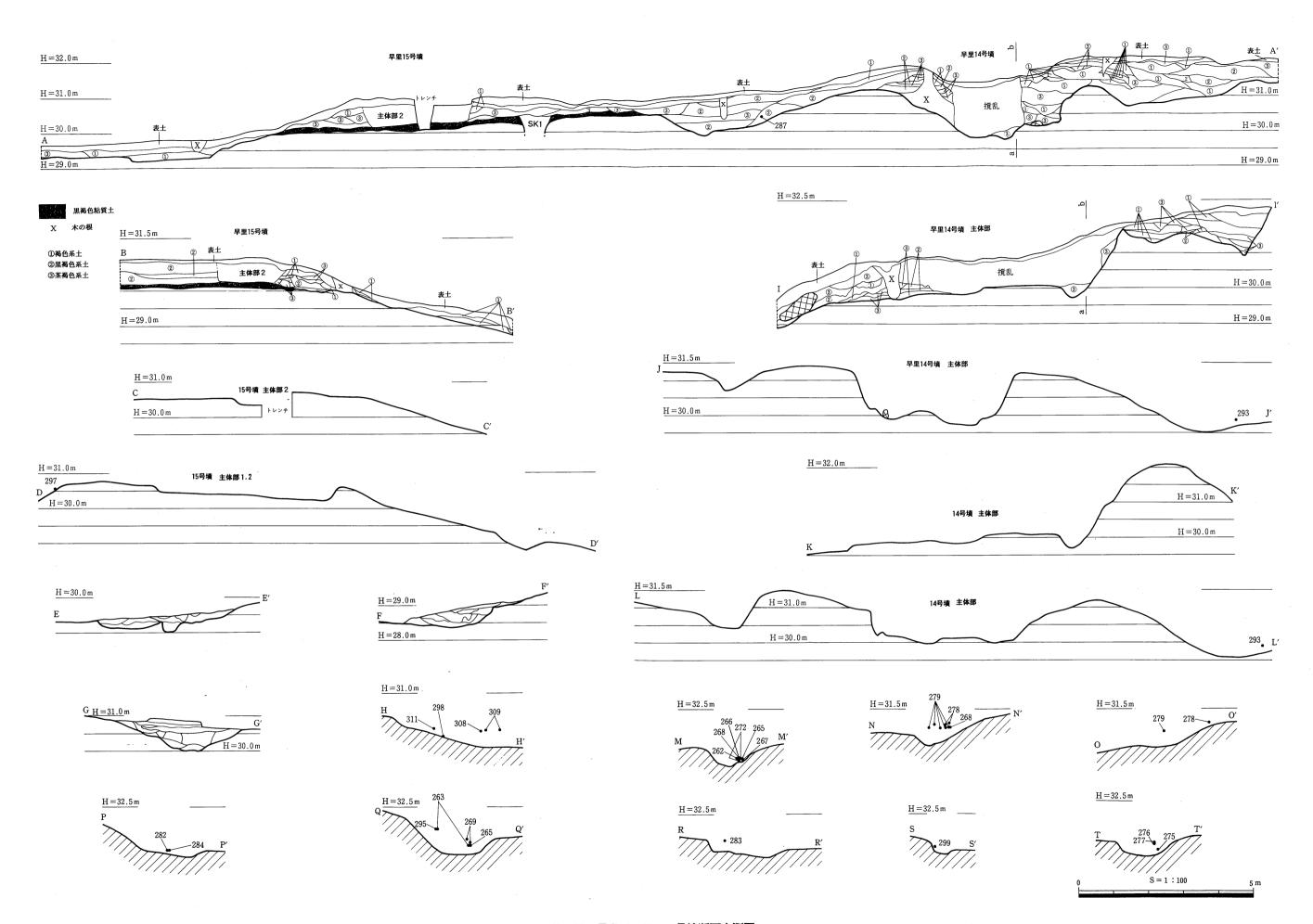


第59図 早里14・15・16号墳調査前墳丘地形実測図

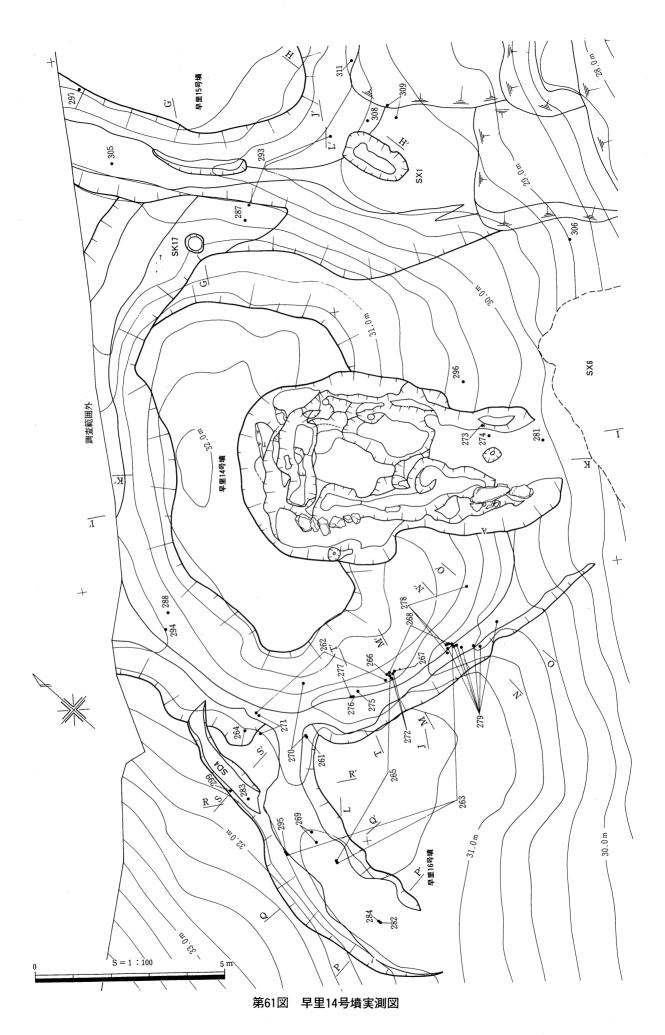
以上の所見から、14号墳の時期を推定する。まず須 恵器の時期は、先述の諸特徴より276・277以外の須恵 器が陶邑編年のTK209併行段階(6世紀末~7世紀 初頭)、276・277が陰田編年の陰田7の段階(7世紀 中葉)に比定される。これらTK209と陰田7の段階 との間には土器編年上において1型式の空白が存在す る。以下、周溝内出土のTK209の土器をA、陰田7 の段階の土器をBとよぶ。次に、これらの須恵器の性 格を検討する。Bの蓋坏は、蓋と身が合わさりかつ正 位の状態で出土したことから、ほぼ原位置を保持して いると考えられる。したがって、Bの性格として、① 14号墳の追葬に伴う祭祀によるもの、②埋葬を伴わな い祭祀のみによるもの、のいずれかが考え得る。Aの 性格としては、①初葬ないしは追葬に伴う祭祀による もの、②埋葬を伴わない祭祀のみによるもの、③追葬 に伴い石室内から掻き出されたもののいずれかの可能 性が考え得る。ただ、Aは、石室開口方向とは異なる 周溝内からの出土であり、③の可能性はきわめて少な い。また、Aはレベル的には下層から、Bは上層から 出土しており約20cmのレベル差がある。すなわち、1 型式の空白期間にこの堆積を生じたものと推察される。

以上まとめると、A・Bの須恵器はともに原位置を保つ可能性が高く、14号墳に伴う周溝内での祭祀によるものと推定できる。従って、Aについてはこれより古い遺物がないことから14号墳の築造時期の所産と推定され、Bについてはこの時期に追葬が行われた可能性が考えられる。

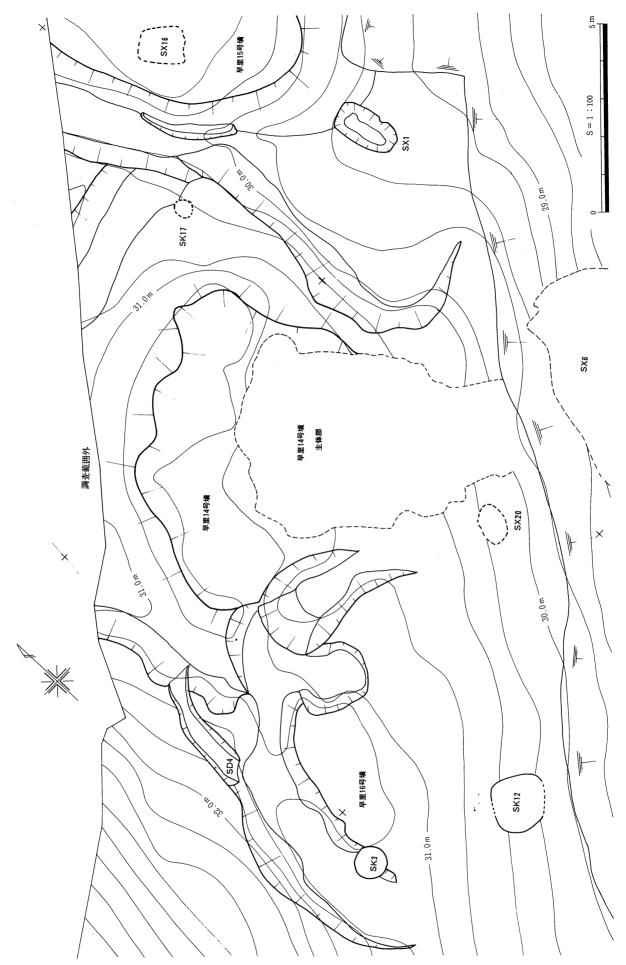
早里15号墳(第59·60·67·69~72図、写真図版 9·29) 14号墳の東北東に位置する。土壙墓ないしは木棺墓を主体部にもつ円墳である。調査前の状況は、墳頂部がやや平坦であり、墳丘の遺存状態は良好とはいえず、多少の削平を受けていることが推察された(第59図)。墳丘の北西側約1/3は調査区外のため検出していない。墳丘は南西-北東方向の周溝底間が約14.5m、南東-北西方向は調査区外に及ぶため推定の域を出ないが、約11~12mと推察され、南西-北東方向にやや長い円墳と推定される。北東側において周溝底から遺存する墳頂部までの高さは1.5m、現存する盛土の厚さは最大0.83mである。墳丘は断面観察から、黒褐色粘質土を整地し、盛土として暗茶褐色土や黒褐色土を水平に積み重ねて築成している。ただ、原地形をそのまま利用しているため、墳丘中央部から西側においては、黒



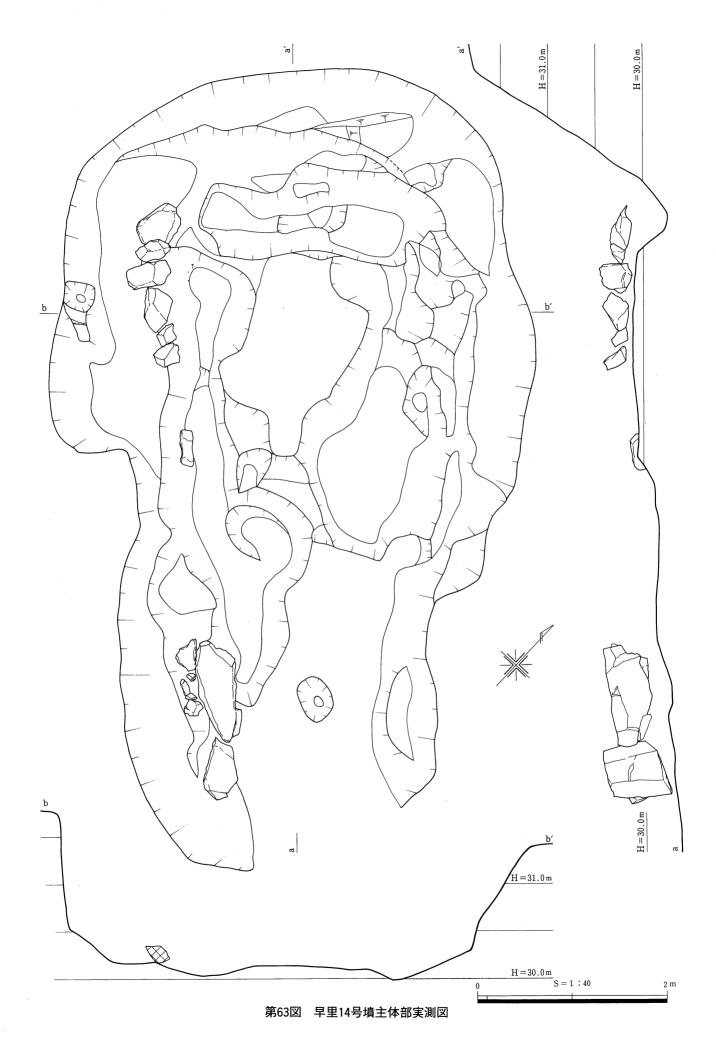
第60図 早里14・15・16号墳断面実測図



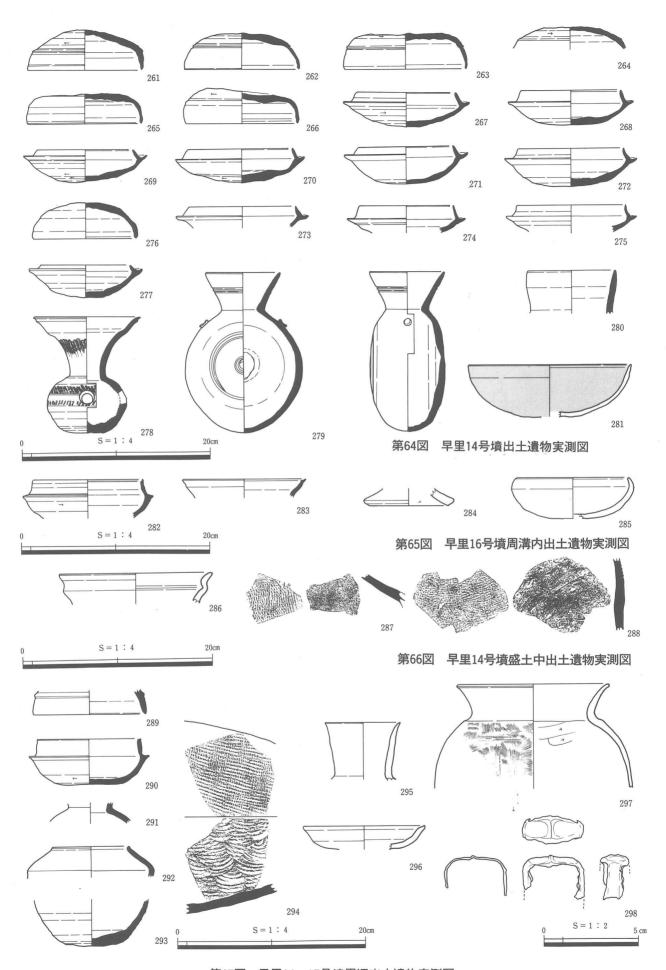
—51 —



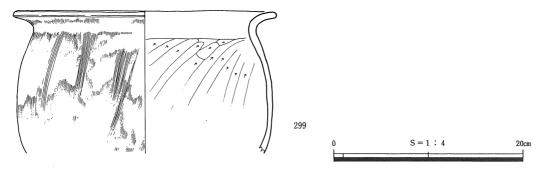
第62図 早里14号墳墳丘除去後地形実測図



— 53 —



第67図 早里14・15号墳周辺出土遺物実測図



第68図 SD4出土遺物実測図

褐色粘質土のさらに上層の黒褐色土の上に盛土がなされている。後世の削平により墳丘西側においては盛土はほとんど遺存していない(第60・69図)。周溝は、南~東側では検出できなかった。北東側では、周溝外側の上端と同じ高さで幅約2.7m、外側の上端から周溝底部までの深さは約0.5mを測る。

埋葬主体部は、合計 2 基の重複する墓壙が確認され、それぞれ主体部 1 、主体部 2 とした(第69・71図、写真図版 9)。切り合い関係は、主体部 2 が主体部 1 を切る。主体部 1 は主体部 2 の南側、墳丘中心部より西南西方向へ約1.5mずれた位置に墓壙の中心がある。主軸はN-72°-Eである。長さは推定で約1.5m、幅約0.65mである。墓壙底面は西から東に向かいわずかに傾斜している。埋土は暗灰褐色およびやや暗い褐色土であり、比較的明瞭に検出できた。主体部 2 は主体部 1 の北側を切る。墳丘中心部より東へ約0.8mずれた位置に墓壙の中心がある。主軸はN-65°-Eである。長さは推定約1.6m、幅約0.85mである。墓壙底面は主体部 1 同様西から東に向かいわずかに傾斜する。主体部 1 との切り合い部での墓壙底面でのレベル差はない。埋土は、暗褐色系統であり、周囲の堆積土との差が不明瞭である。また、墓壙底面は地山土である黒褐色粘質土の上面とほぼ一致する。両者ともに土層断面の観察からは木棺の痕跡を確認できなかった。また、墳丘北側周溝内において S X 2 を検出した(第75図、写真図版10)。いわゆる周溝内埋葬と考えられる。

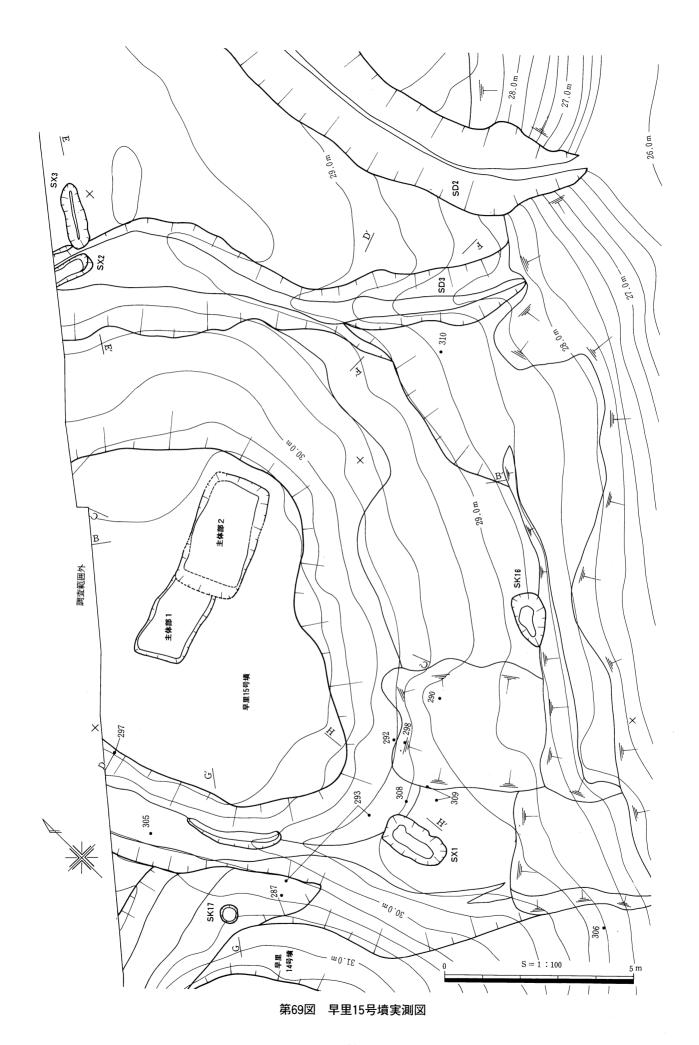
遺物は、周溝内から埴輪が出土した(第69・72図、写真図版29)。普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪がある。普通円筒埴輪は、周溝内の全域にわたって出土する。朝顔形円筒埴輪は南側の周溝内でのみ出土した。これらの埴輪の出土状態は、破片が周溝内に散乱した状態であり、その配列を推察できない。出土した埴輪の量から、墳丘上の埴輪は総計10個体前後であったと想定される。円筒・朝顔形ともに外面の調整はハケによる縦方向の1次調整のみで、突帯貼付け後の2次調整はみられない。内面はハケないしはナデによる調整である。底部の再調整は一部の個体でみられ、指によるつまみ出しによってなされている。ただ、焼成が良好である個体は少なく、内外面の調整・底部再調整などが不明なものが多い。以上の所見から、埴輪の時期は川西宏幸編年の山陰におけるV期に相当すると考えられる。

早里16号墳 (第59~61·65図、写真図版 9)

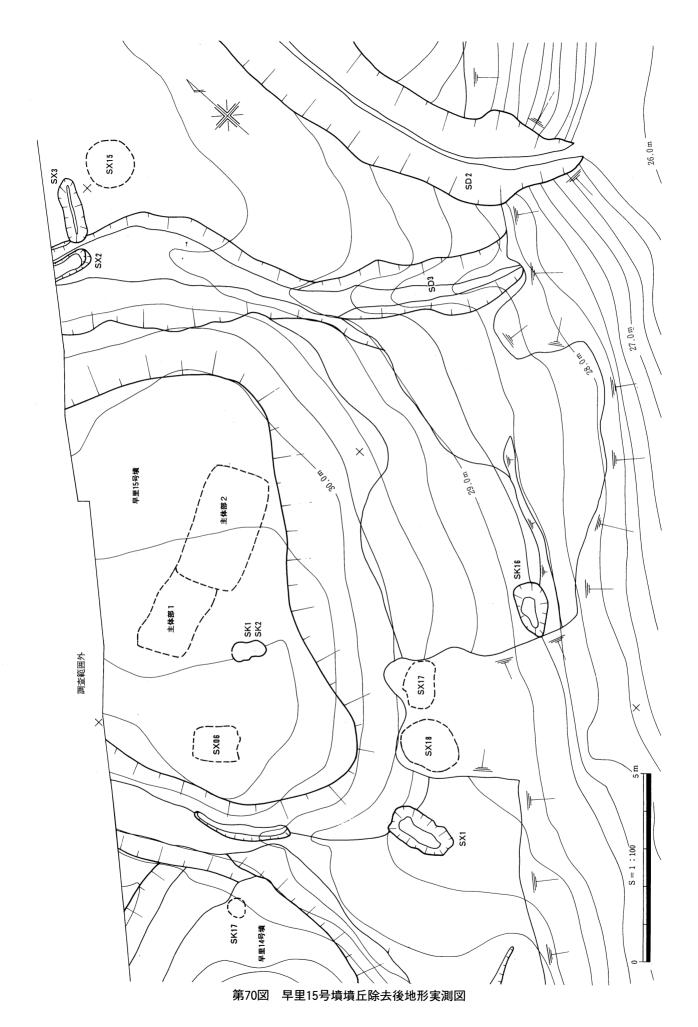
14号墳の南側に位置する円墳である。調査前はマウンド状の高まりは確認できなかった。墳丘や主体部は遺存せず、西南西〜北西側の周溝の一部のみ検出した。直径約12mの円墳と推察される。検出した周溝は全体の約1/4で、西側では周溝の上端間は幅約2.4m、外側の周溝上端から底部までは約0.8mを測る。層位的には14号墳墳丘の下層から検出した。斜面地に掘削した後背側の周溝のみが遺存する。いかなる要因によって周溝のみが遺存したのかは明らかではない。14号墳の築造に伴い破壊された可能性も否定しないが、北西側において突如周溝が途切れ、これより先の北側においては検出できなかったことを重視するなら、あるいは築造途中において放棄した結果であると考えることも可能であろう。

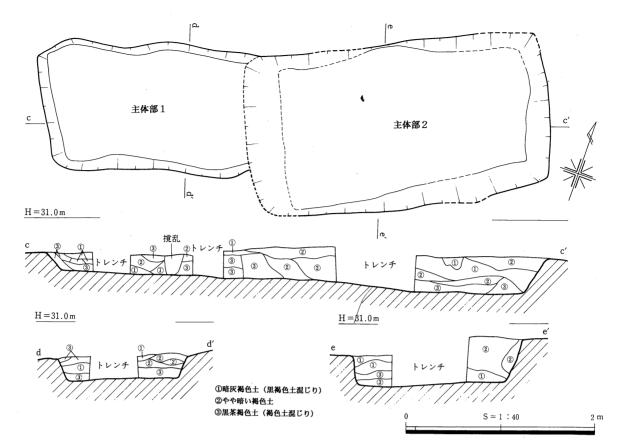
遺物は、周溝内から須恵器の坏身282、**逸**283、土師器の高坏284、椀285が出土した(第60・65図)。

以上の所見から16号墳の時期を推定する。埋葬施設などが遺存しないので、周溝内埋土下層の土器が時期決定のひとつの手がかりとなる。282の坏身は、周溝底部近くから出土したことから、16号墳に伴う蓋然性が高い。 その時期は陶邑編年のTK10併行段階(6世紀中葉)に比定できる。本墳は、14号墳の築造以前のものと考えら



— 56 —





第71図 早里15号墳主体部1・2実測図

れるが、その点からもこの時期比定は矛盾しない。

早里14・15号墳周辺出土の遺物 (第61・67・69図、写真図版29)

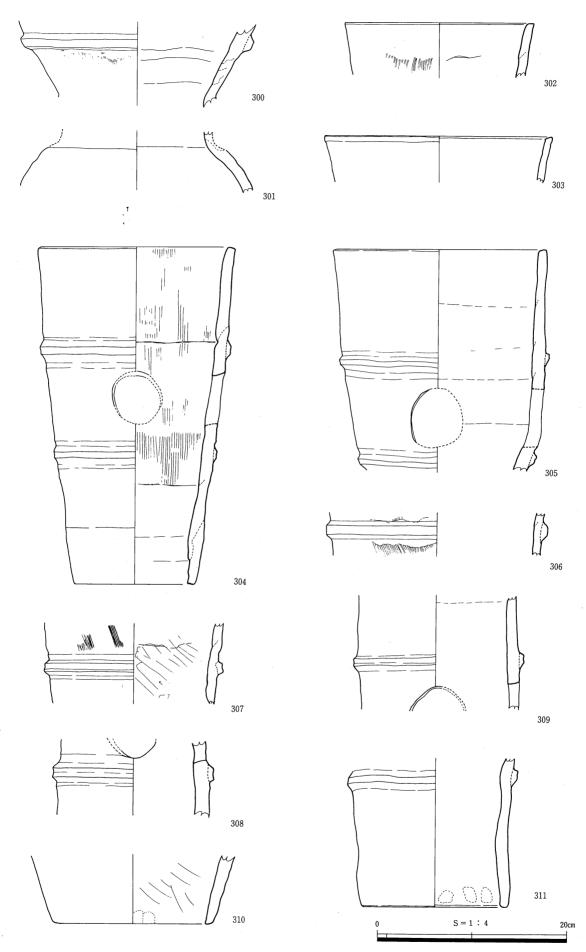
以下の遺物は、15号墳の墳丘、および14号墳周溝と切り合う南南西側周溝内から出土したものであり、14・15 号墳のどちらに帰属するものか判断できないものである。南南西側周溝内においては、須恵器・土師器が出土した。いずれも破片で散在的に分布することから、周溝内に転落した状態であると判断できる。

須恵器は、坏蓋289、坏身290、短頸壺292、壺291・293、横瓶294、土師器は壺295・甕297・皿もしくは高坏296である。墳丘南側からは銅製品が出土した。形態から刀の鞘尻金具と考えられる。

以上の所見から、これらの土器と両古墳との関連を検討してみる。埴輪は14号墳の南~西側周溝からは一切出土しないことから、15号墳に伴うものと考えられる。埴輪は特徴から、川西宏幸編年のV期に相当する。これは川西氏により山陰地方では、陶邑編年のTK10からTK217(6世紀中葉~7世紀前葉)段階に併行するとされている。ここで、墳丘周辺から出土した須恵器を検討すると、時期が判明するものとして東側墳丘撹乱土中から出土した290の坏身、および墳丘北東側から出土した289が抽出できる。これらの時期は前者がTK47併行段階(6世紀前葉)、後者がMT15~TK10併行段階(6世紀中葉)に比定できる。このうち、埴輪編年のV期の範疇に含まれる289については、15号墳に伴う可能性がある。

SD4 (第60·61·68図、写真図版9)

16号墳の北北西側、14号墳の南西側において溝状遺構SD4を検出した。溝の両端が16号墳と14号墳の周溝外縁をつなぐように、南から北東へ緩やかなカーブを描く。長さは約3.3mが遺存する。中央付近では、幅65cm、外側の上端から溝底までは30cmを測る。遺物は溝内から土師器の甕299が出土した(第60・61・68図)。カーブを描く形態は古墳の周溝とも類似するが、性格は不明である。時期は、溝埋土中から出土した土師器甕299より、古墳時代後期以降、奈良時代までの時期幅でとらえておく。



第72図 早里15号墳出土遺物実測図

2. その他の墳墓

S X 1 (第73・74図、写真図版 9・29) は、早里14号墳の北東側周溝溝底において検出した土壙墓である。上端における長軸は1.75m、短軸0.93m、下端の長軸は1.22m、短軸は最大0.41mの楕円形を呈する。深さは最大0.45mを測る。主軸方向はN−11°−Wである。土層断面からは木棺の痕跡は確認できない。埋土は暗茶褐色系である。墓壙北西壁際において、1対の瓢形素環鏡板をもつ轡312が底面から約9㎝浮いて出土した。銜は2連式であり、引手は遺存しない。骨は出土していない。早里14・15号墳のいずれかに関連する埋葬施設である可能性が高い。瓢形素環鏡鏡板は、花谷浩氏の編年では第2群(6世紀中頃~後半)に位置づけられている。馬具を伴う土壙墓の例として、鳥取市面影山古墳群の土壙1がある。付近の古墳とは時期が異なるが、埋葬施設とされる土壙2に隣接する。土壙の西側壁際から轡・鐙靼などが出土している。轡は、長方形立閉鏡板をもつ素環鏡板付轡である。花谷氏の編年では、第3群(6世紀末~7世紀中頃)に比定される。規模もS X 1 と類似する。須恵器の年代から、土壙2とともにⅡ型式5段階(6世紀末~7世紀前葉)とされている。よって、時期的にはS X 1 よりやや後出する。こうした馬具を伴う副次的な土壙墓の例は希有である。馬の墓とされている羽合町長瀬高浜遺跡7号墳の周溝内埋葬3基などは、S X 1 および面影山古墳群例の性格を考える上で示唆的かもしれない。

SX2(第75図、写真図版10)は、早里15号墳の北側周溝溝底において検出した土壙墓もしくは木棺墓である。 西側の一部は調査区外である。主軸はN-68°-Wである。上端における長軸は1.1m以上、短軸0.43mの隅丸 方形を呈する。南南西側において15号墳周溝溝底から墓壙の下端までは約25cmである。墓壙は周溝溝底から掘り 込まれている。埋土は茶褐色系統であり、墓壙上層の③層には少量の炭を含む。⑥、⑦層が南南西側の墓壙上端 から底部にかけてL字状に堆積するなど、木棺墓の可能性がある。

SX3 (第75図、写真図版10) は、S X2 の東北東側、早里15号墳の北側周溝外側において検出した土壙である。南西端は周溝によって切られる。主軸は $N-35^\circ$ — E である。上端における長軸は1.77m、短軸0.54m、下端の長軸は1.32m、短軸は約5cm、北西側中央付近での深さは0.23mを測る。埋土は茶褐色系であり、棺の痕跡は確認できない。遺物は出土しなかった。15号墳より古い時期の所産である。

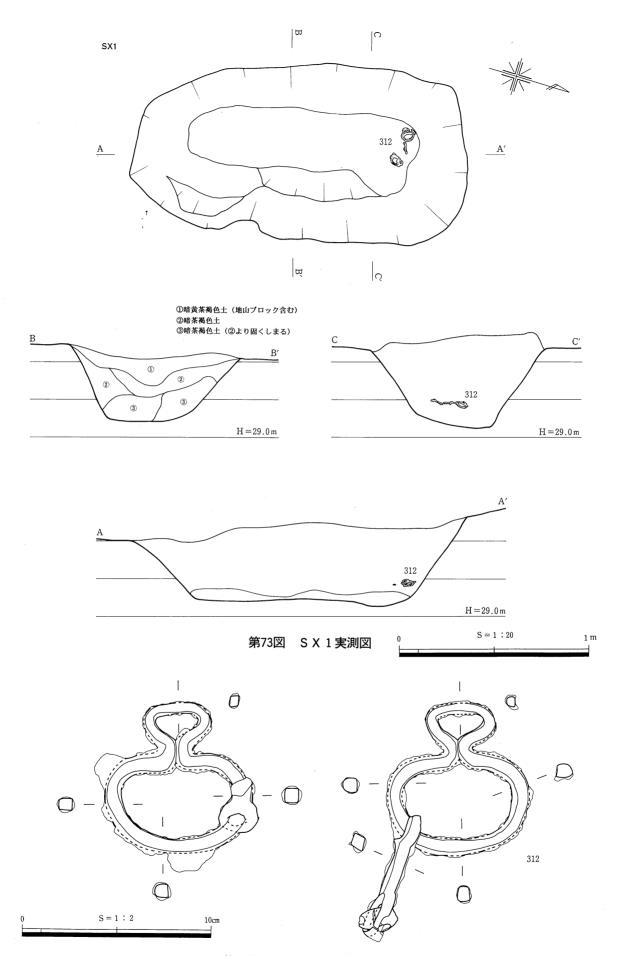
SX4 (第76・77図、写真図版10) は、SS12北西隅の溝付近において検出した木棺墓である。主軸はN-11°-Eである。墓壙底面に、木棺の左右両側板・小口板部分を溝状に検出した。長軸1.45m、短軸0.5mの墓壙に、長軸約1.05m、短軸約0.4mの木棺をおさめ、小口板の両端を長さ20~30cm程度の方形の角礫で押さえる。埋土は暗茶褐色土である。遺物は、木棺内南端の両隅において土師器の高坏313が割られて左右に置かれた状態で出土した。土器枕と考えられる。時期は土師器の高坏313から青木編年の青木区期(古墳時代中期)と考えられる。なお、SX4の周辺調査区内においては当該期の遺構は確認されておらず、わずかに早里14号墳墳丘盛土中から青木区期の土師器甕とTK208以前の須恵器甕の破片が出土するのみである。

SX5 (第78図、写真図版10) は、調査区の北東寄り、SD1の東側で検出した石蓋土壙墓である。主軸はN -25° - Eである。墓壙は、長軸1.99m、短軸0.45 \sim 0.9m、深さ約0.25mの不整な形態を呈する。墓壙の上に、幅が40 \sim 60cm程度の横長で扁平な割石を架して隙間なく並べて蓋としている。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

SX6 (第79図、写真図版10) は、早里14号墳の南東側で検出したテラス状の遺構である。長さ6.16m、幅3.08mである。北東側側壁に沿って長方形の落ち込みを確認した。長軸約2.5m、短軸約1mである。底部には、30~40㎝程度の扁平な角礫を2個体ずつ等間隔に合計8個体並べる。また、この西側後背壁裾部には、大小の角礫を幅1.4m、高さ30~40㎝にわたり2段程度石垣状に荒積みしている。埋土は暗茶褐色土・黒褐色土であり、石垣状の石積みが存在する付近では順層をなさず、人為的に埋められた可能性がある。遺物は主体的な時期を示す資料がなく、いずれも混入と考えられる。遺構の性格は明らかではないが、北東側側壁付近の配石が棺台であるならば、何らかの埋葬施設であったと考えられる。

3. 横穴墓

東南東側斜面部において、後背周溝を伴う横穴墓1基を検出した。本報告においては、横穴墓の各部分の名称



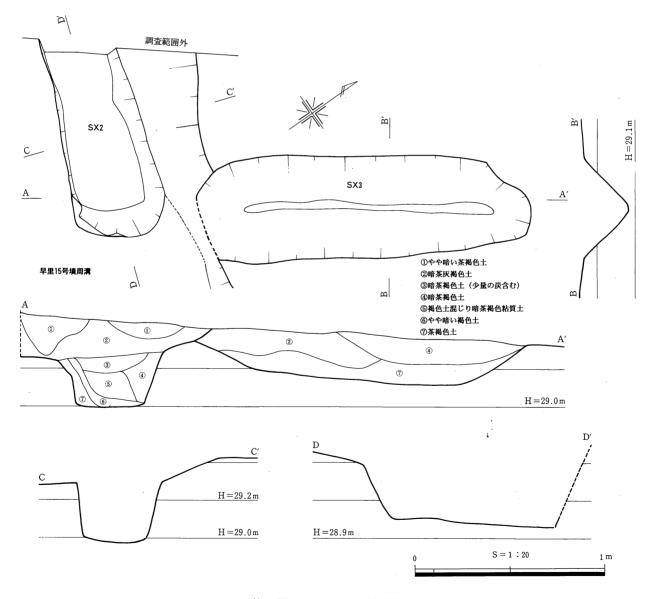
第74図 SX1出土遺物実測図

について以下のように規定する。横穴墓前面の平坦地を前庭部、前庭部の奥壁部分より一段狭く奥まる部分を羨門、遺体をおさめる墓室(玄室)へつながる部分を羨道、墓室を玄室、玄室と羨道の境を玄門とする。

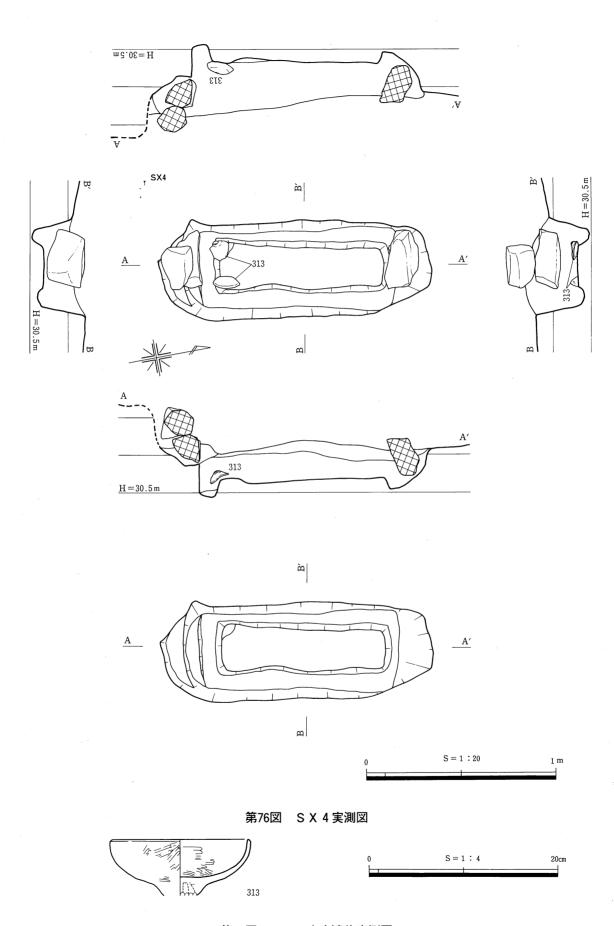
福成早里横穴墓(第81~93図、写真図版11~13·30~37)

標高は、前庭部床面中央部においては約29.8m、玄室床面中央部では約30.2m、後背周溝溝底では37.6mである。前庭部の西側斜面上方には後背周溝とみられる溝とテラス状の平坦地が存在する(第81~83図、写真図版11)。前庭部中央部床面と後背周溝溝底との比高差は7.8mである。テラスは、北東から南西方向にかけて約16mにわたってのびるが、テラスの後背壁裾部の周溝は、前庭部奥壁の斜面直上付近にのみ存在する。長さは約6.5m遺存する。前庭部主軸の延長線上における溝の下端での幅は37cm、深さ約8cmである。

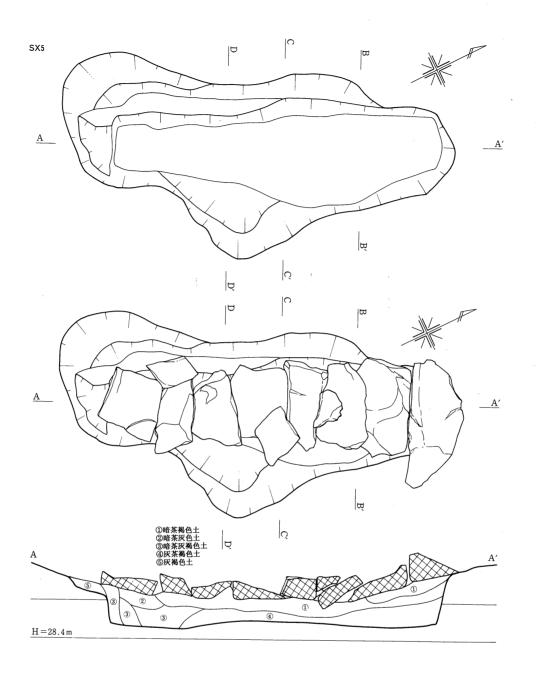
前庭部は、西から東に向かい下る斜面を大きく掘り込み、既存のSI1・SI2を切って築造している(第81 図、写真図版11)。主軸は $N-65^\circ$ -Wである。底面はほぼ長方形を呈し、主軸での長さ5.8m、幅2.4mを測る。断面は逆台形を呈する。左右の側壁は前庭部奥壁に向かい高くなる。前庭部奥壁左隅の床面には、奥壁から左側壁にかけて短くのびる溝状の落ち込みがある。幅は奥壁に接する部分の上端では $15\sim23$ cm、深さ $3\sim4$ cmを測る。前庭部の埋土は、① \sim 9層に分かれる。羨門部上方から前庭部にかけて傾斜しつつ堆積している。順層に近い状況で、堆積後に改めて閉塞石付近を掘り込んだ痕跡は認められない。埋土は灰褐色系や茶褐色系の土であり、炭化物を含む層はみられない(第86図、写真図版11)。

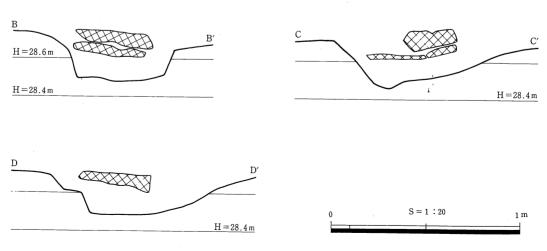


第75図 SX2・3 実測図

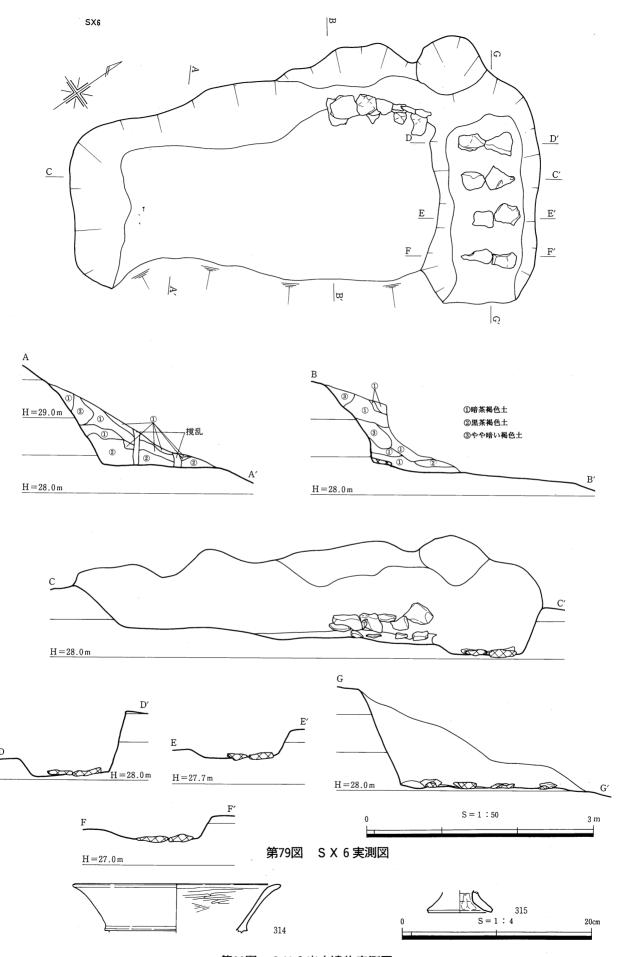


第77図 SX4出土遺物実測図





第78図 SX5実測図



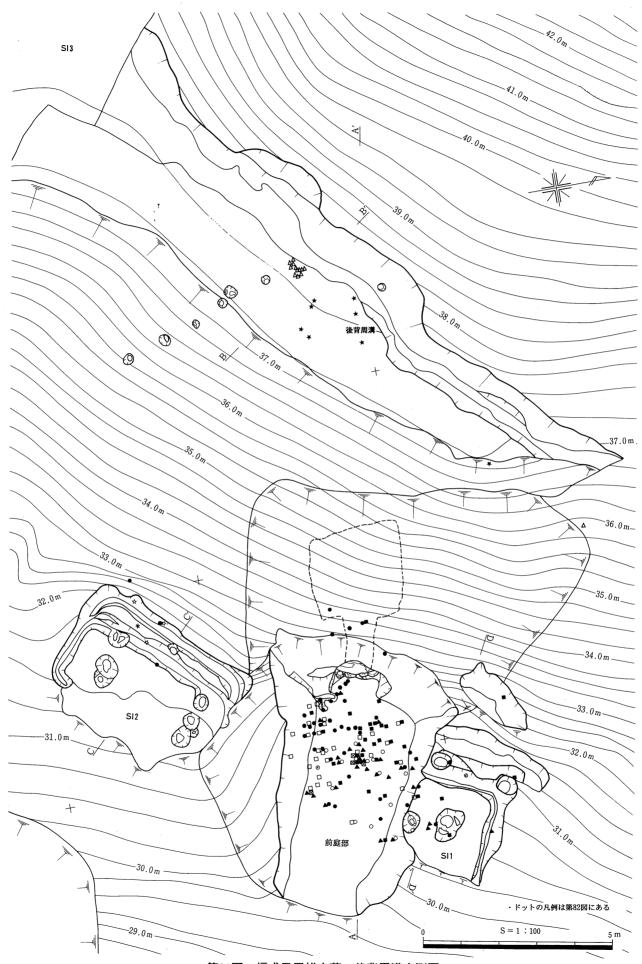
第80図 SX6出土遺物実測図

美門の中心は、前庭部の奥壁中央より左側壁方向にややずれた位置にあり、主軸は前庭部と同じである。主軸における長さは約0.9m、幅約1.2mである。閉塞施設は閉塞石であり、美門には閉塞石をはめ込むための刳り込みがある。美道床面と美門床面とは約8cmの段差があり、ここに閉塞石をはめ込む。さらに、石の根元に角礫を4個体並べる(第84図、写真図版11)。閉塞石は、最大幅1.15m、最大の高さ1.24m、厚さは最大45cmを測る。自然石を幅広の釣鐘形に加工している。石材は角礫混じり凝灰岩であり、周辺地域に産するものである。閉塞石は玄室の主軸に対して直交する。

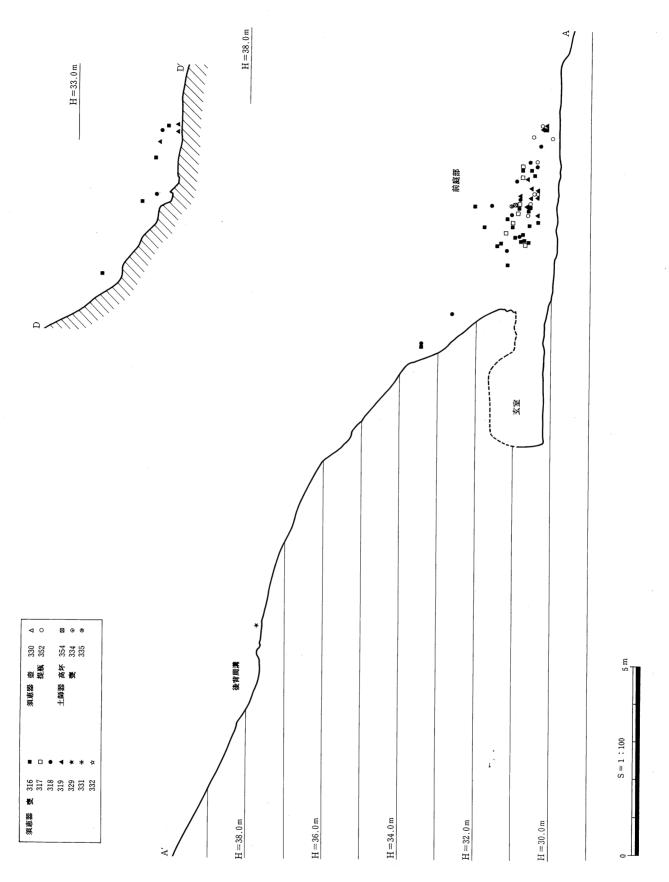
羨道は天井が崩落していた。羨道から玄室にかけての主軸は、前庭部主軸とは異なるN-77°-Wであり、西へ12°振る。床面の平面形は、玄室に向かってわずかに逆ハの字形に広がる。羨道の長さ約1.2m、羨門近くにおいては幅0.9m、玄門においては幅0.74mを測る。羨道床面中央での天井までの高さは推定で0.78mを測る。左右両側壁の裾部には溝を検出した。溝は、上端における幅5~20cm、下端における幅2~15cmである。床面レベルは、羨門から玄室方向へ約60cmの地点まで緩やかに高くなり、そこから先は玄室奥壁に至るまでほぼ水平である。玄室も天井が崩落しており、完全に崩落土に埋没していた。主軸はN-77°-Wである。平面プランはいびつな正方形を呈し、床面における一辺の長さは左側壁2.1m、右側壁2.4m、奥壁2.3m、左右袖間2.04mを測る(第87図、写真図版13)。遺存する高さは、最も状態の良い右側壁中央部においては床面から80cm程度である。奥壁から東西壁さらに両袖部、羨道へと続く溝がはしるが、奥壁中央部付近の長さ約25cmの区間には存在しない。溝は、左壁中央部では幅14cm、深さ4cm、右側壁中央部では幅12cm、深さ3cmであるが、奥壁右寄りにおいては最大の幅34cm、深さ7cmとかなり広くなる。天井部の形態は推測の域を出ないが、左右側壁の立ち上がりが奥壁および袖部の立ち上がりに比して急傾斜をなしていることからみて、いわゆるテント形妻入の形態と推測される。壁面の一部には工具痕が遺存していた。工具の幅は約12cmである。右袖部床面に3個体、床面中央部付近に1個体、奥壁中央部に1個体、奥壁右側に1個体の合計6個体の角礫を検出した。石材は閉塞石と同じ角礫混じり疑灰岩である。これらは屍床の台の可能性がある。

遺物は、後背周溝のテラス平坦面においては、須恵器の甕329、壺330が出土した(第90図、写真図版30)。甕は底部を上に胴部を下にして出土した。ほぼ床面直上である。壺は破片が散乱した状態で出土した。

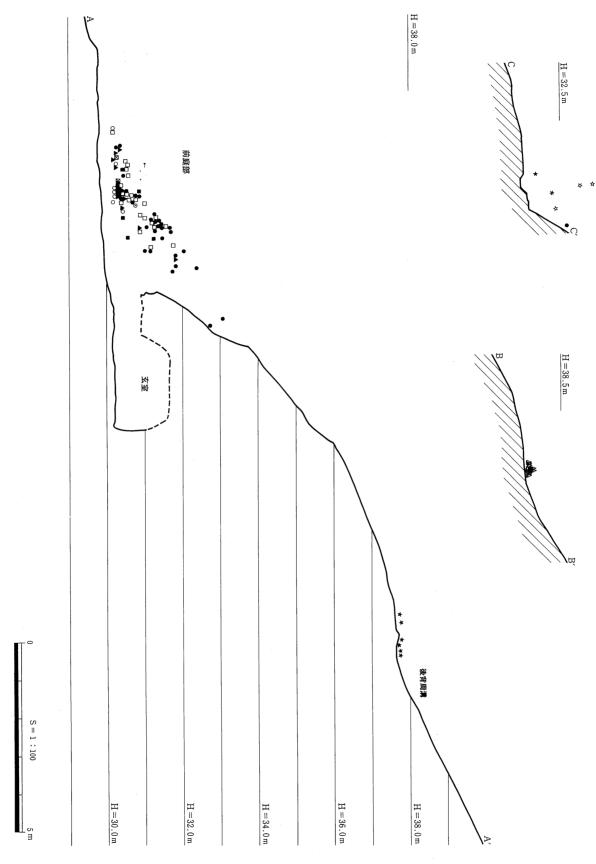
前庭部においては、須恵器の蓋坏337~348、高坏349~351、甕316~319、提瓶352、横瓶355、土師器の甕333~ 336、鉄鉢形土器353、高坏354、馬具320~327、鉄製品328が出土した(第88~91図、写真図版30~35)。前庭部 の奥壁右隅より約20cm東南東側において、須恵器の坏蓋337~343、坏身344~348、高坏349~351、土師器の鉄鉢 形土器352が、寄せ集められた状態で出土した。蓋坏が5枚重なり、この蓋坏に向かって倒れた状態の高坏の口 縁内部に蓋坏の一部が入り込むかたちで出土した。当初は高坏の上に蓋坏が重ねられていたものが倒れた結果で あろうか。高坏350の下、および前庭部埋土中から出土した高坏351の坏部内面には葉脈の押圧がみられ、この葉 脈はアカメガシワの葉と鑑定された。これについては、第5章の考察においてふれる。これらの手前には蓋坏3 枚が重ねられ、これに立て掛けるように坏身が置かれていた。さらに手前には、高坏が口縁を手前に向けて倒れ ており、この口縁内部に坏蓋が、ややずれて坏身がある。これら2点の蓋坏も当初は高坏にのせられていたもの が転倒した可能性がある。これらの蓋坏・高坏に半ば囲まれるような位置に、鉄鉢形土器が正位の状態で置かれ ていた。いずれも床面から約30cm浮く。主軸線より20cm右側、前庭部奥壁から80cmの地点に坏蓋357が、奥壁か ら約70cmの左壁付近では鉄製品328が出土した。これらも前庭部床面から約30~40cm浮く。328は、鉄製の穂摘み 具と推定した。前庭部奥壁より東南東方向へ約2.5~3.3mの右側壁側において馬具320~327が出土した。320~ 322は飾金具、323は雲珠の飾鋲と花形座、324・325は雲珠の脚と推定される。326は責金具であろうか。320~ 322は鉄地金銅張、323・324は鉄製、325・326が鉄地金張である。これらは床面から約40~60cm浮く。主軸付近 では横瓶が口縁部を下に向け、床面から約4cm浮いた状態であり、その左側壁付近では坏蓋の破片が床面から10cm 浮いて出土した。この蓋坏は閉塞石裏側の右上から出土した破片と接合した。前庭部埋土中からは須恵器の甕 316~318、土師器の甕333~336、高坏354が出土した。須恵器の甕は4個体とも大型のものである。これら須恵器 の甕は、前庭部の中央付近を中心に散布している。おもに埋土の上層から出土し、下層の①~④層にはみられない。



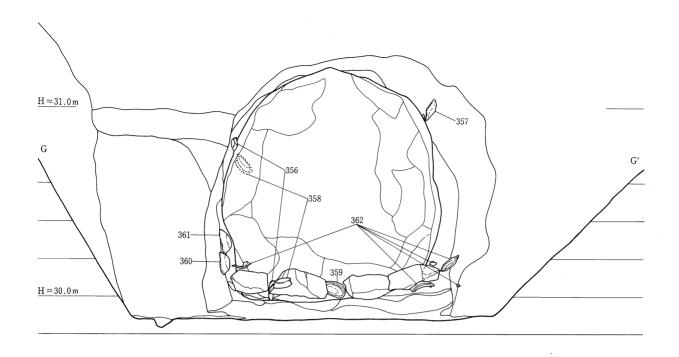
第81図 福成早里横穴墓・後背周溝実測図

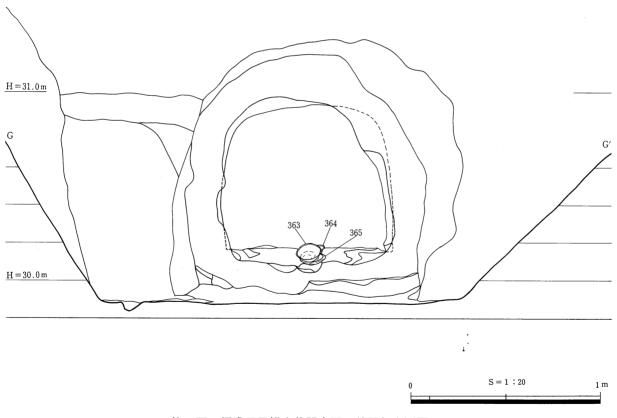


第82図 福成早里横穴墓・後背周溝断面実測図1

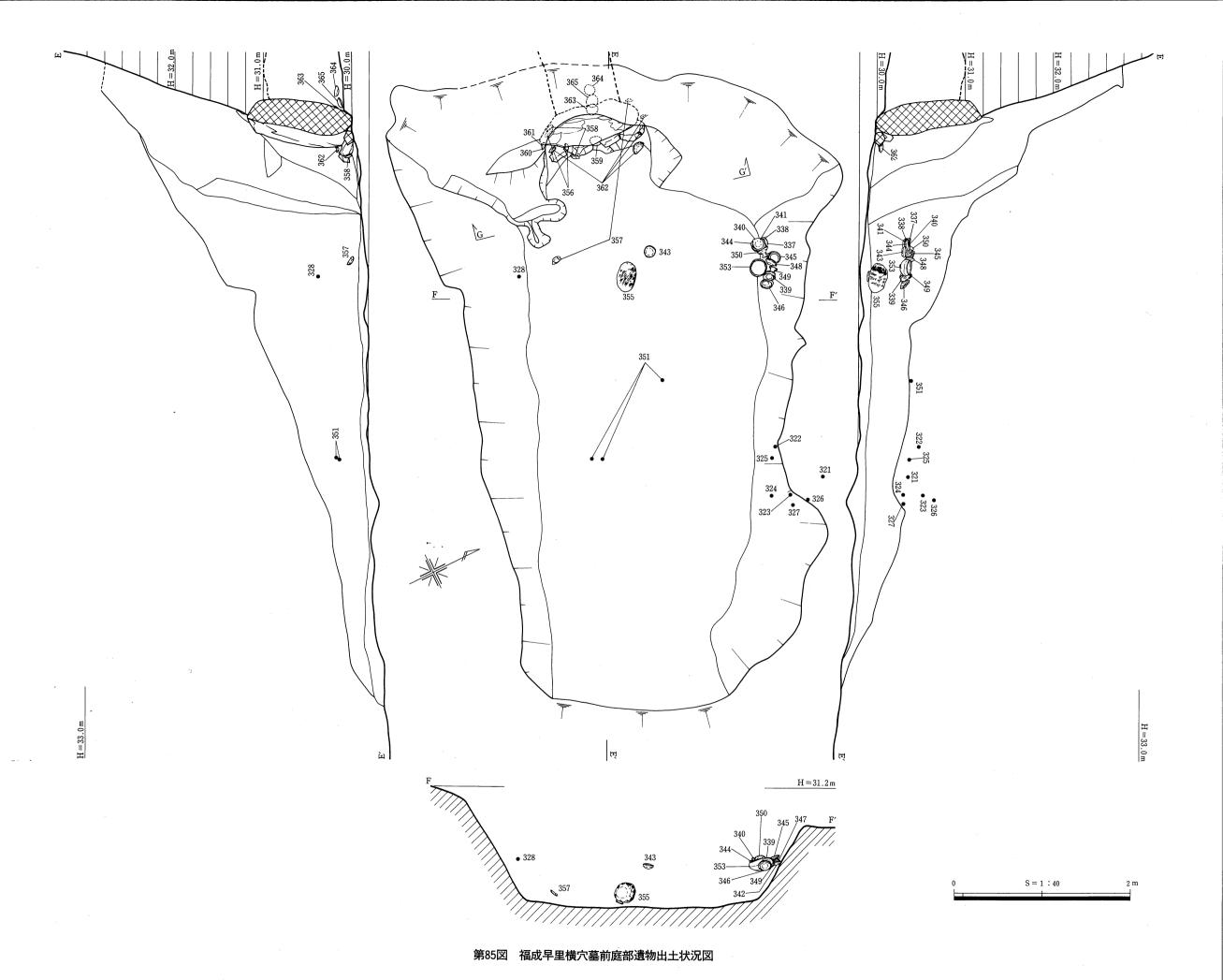


第83図 福成早里横穴墓・後背周溝断面実測図2





第84図 福成早里横穴墓閉塞石・羨門部実測図



318には意図的に破砕されたことが窺える破片があること (写真図版30)、前庭部奥壁の上方斜面部にもみられることから、故意に破砕した後に後背周溝付近から前庭部へ向けてまかれたものと推測できる。赤色塗彩を施す高 坏354は前庭部中央付近の⑥層上面付近で破片の状態で出土した。前庭部周辺から土師器の甕334・335が出土した。混入の可能性があり、横穴墓に直接関係しないものかもしれない。

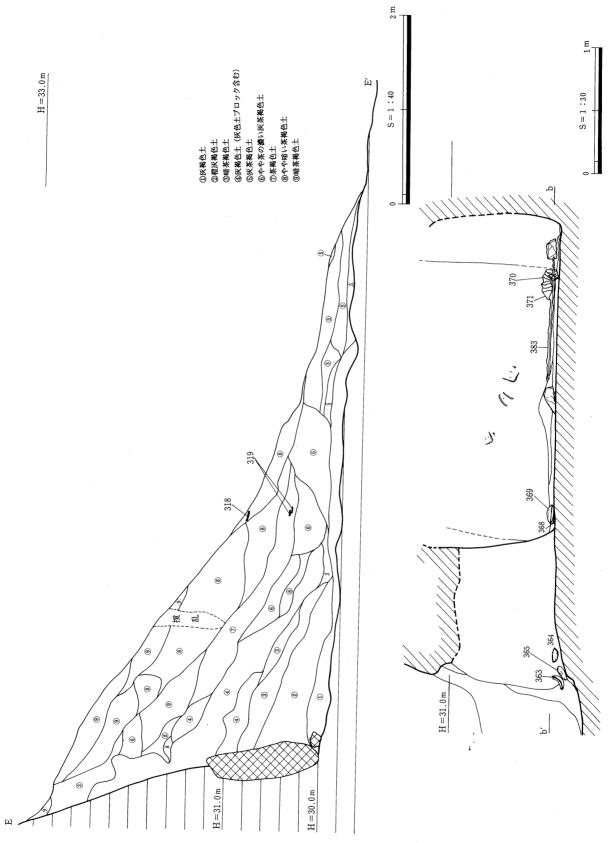
義門の閉塞石およびその付近から坏蓋356~358、坏身359~362を検出した(第85・91図、写真図版34)。356~361は義門側壁面及び床面と閉塞石との隙間に入れ込まれていた。閉塞石の左下には、完形の坏蓋360・361が口縁を義門左側壁に向けて縦に配されている。閉塞石中央部根元の角礫の間に、完形の坏身358を検出した。これらを除くと、以下の坏蓋3個体と坏身1個体は破片である。坏蓋356は、閉塞石左上と根元の左寄りで出土した両者が接合、坏蓋357は閉塞石右上と前庭部奥壁付近の個体が接合、坏蓋358は閉塞石裏側の左上と表側根元左寄りの個体が接合、坏身362は閉塞石下方左側と右側の個体が接合し、それぞれ完形に復元できた。隙間に押し込まれている状態であること、閉塞石の裏側に押し込まれた個体と表側の個体など離れた位置から出土する個体が接合すること、さらにこれらが完全に復元できること、以上の状況から判断して、これらは閉塞に伴う意図的な行為であると推察できる。これについては、第5章の考察で検討する。

閉塞石の裏側、羨道の床面において坏蓋363・364、坏身365を検出した(第85・86・87・92図、写真図版34・35)。ともに完形で、閉塞石側から363・364・365の順に主軸に沿い3個体並んで出土した。363は口縁を上にして、364の上に半分程度重なる。364は口縁を下に、365は上に向けていた。これも閉塞石と羨門部側壁の隙間に押し込まている蓋坏同様、閉塞に伴う意図的な行為と考えられる。

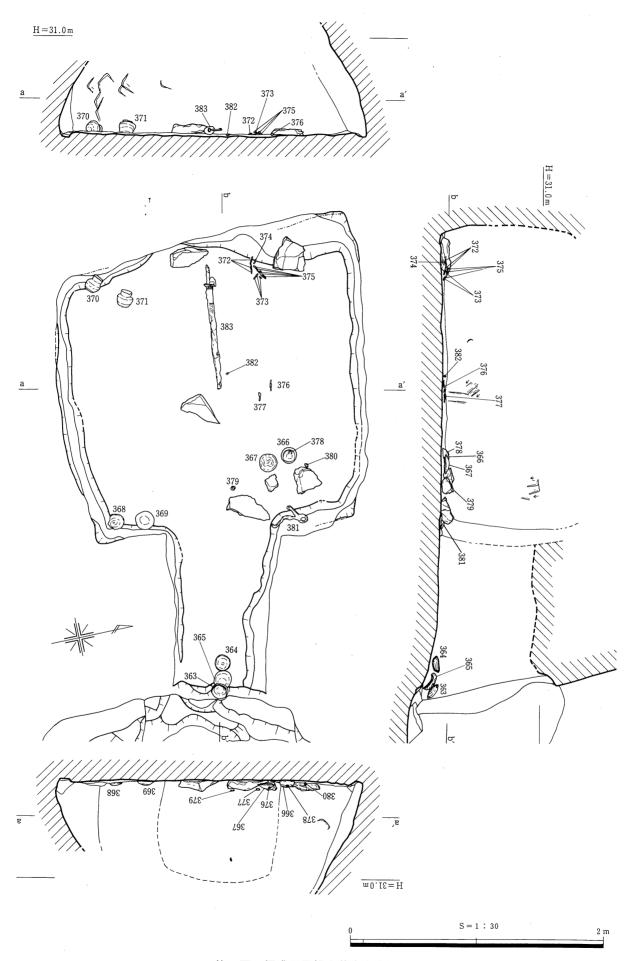
玄室内からは、人骨、須恵器366~371、大刀383、刀子376・377、耳環378~380、鉄鏃372~375、ガラス小玉382、馬具381が出土した(第86・87・92・93図、写真図版35~37)。人骨は遺存していたものの風化により粉状を呈しており、その埋葬形態を想定できない。ただ、玄室主軸から左側において比較的多くの骨片が認められた。須恵器の蓋坏は、366・367は右袖寄りで、368・369は左袖寄りに置かれていた。いずれも口縁部を下にしており、前者はほぼ床面直上、後者は床面から1㎝浮く。これらはそれぞれ隣接する位置に検出され、特徴も類似することからセットをなし、遺体の枕であったと推察できる。ただ、坏蓋368と坏身369は、天井部および底部外面調整が全面がナデであるなど366・367に比して後出的である。直口壺は、奥壁左寄りに並んで置かれていた。いずれも口縁を北西方向に向けている。玄室中心よりやや奥壁寄りにおいてほぼ主軸に沿う形で大刀を検出した。柄を奥壁方向に、切先を羨道方向に向ける。全長は95㎝、倒卵形の鍔がつく。鞘尻の金具が遺存していた。大刀の鍔より右壁方向へ約40㎝の地点で鉄鏃を検出した。いずれも長頸鑿箭式であり、関部は棘状をなす。大刀の鞘尻より右壁方向へ約40㎝の地点で鉄鏃を検出した。いずれも長頸鑿箭式であり、関部は棘状をなす。大刀の鞘尻より右壁方向へ約20㎝において刀子を検出した。大刀の鞘尻付近において濃青色のガラス小玉が出土した。玄門から右袖部付近において耳環を検出した。380は床面直上である。378は坏蓋366の天井部に密着する。379は玄門近くで床面から約10㎝浮いて出土した。このレベルで出土した遺物は他に見られない。右袖部の壁寄りにおいて馬具の轡が出土した。鏡板が溝の底面に落ち込む。形態は長方形立聞素環鏡板付轡であり、銜は2連式である。

以上の所見に従うと、玄室内の埋葬状況は、左右両側壁寄りにおいて主軸に平行に1体づつ安置されており、 少なくとも1回の追葬が行われたことがわかる。大刀は、右側の埋葬に伴う可能性が高いが、大刀の左側壁側で 骨片が大刀と同じレベルで出土していることから、左右の埋葬の間にもう1体埋葬されていた可能性もある。し かし左側壁寄りの追葬の際に骨片がかたづけられただけかもしれない。

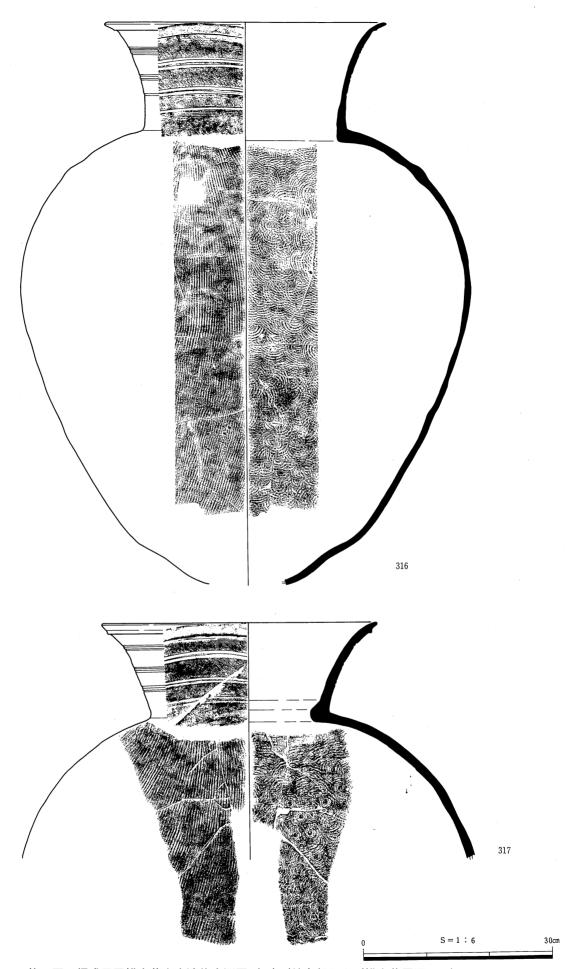
以上の所見から横穴墓の時期を推定する。玄室内は、右袖部の蓋坏366・367は陶邑編年のT K 209(6世紀末~7世紀初頭)に、左袖部の蓋坏368・369は陰田編年の陰田7段階(7世紀中葉)にそれぞれ比定される。羨道部の蓋坏、羨門部閉塞石付近の蓋坏、前庭部右側壁付近の蓋坏・高坏は、いずれもT K 209段階である。ただ、前庭部右側壁付近の土器類と同時に置かれたと考えられる土師器の鉄鉢形土器は、畿内でいう飛鳥 II 式(7世紀中葉)より古い段階には見られないことから、陰田7段階の追葬の際の所産と考え得る。前庭部右側壁の土器群は、当初玄室内に置かれていたものが追葬の際に前庭部に出され、鉄鉢形土器を加えてまとめ置かれたものと推定できる。したがって、本横穴墓はT K 209併行段階に築造され、陰田7段階に追葬が行われたと考えられる。



第86図 福成早里横穴墓前庭部土層断面実測図・玄室実測図



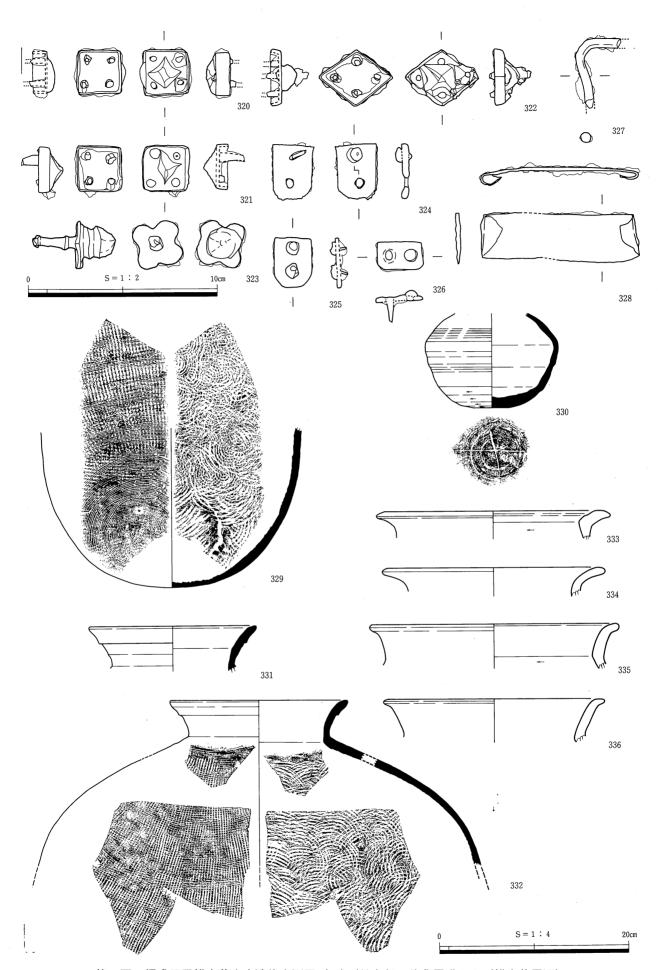
第87図 福成早里横穴墓玄室実測図



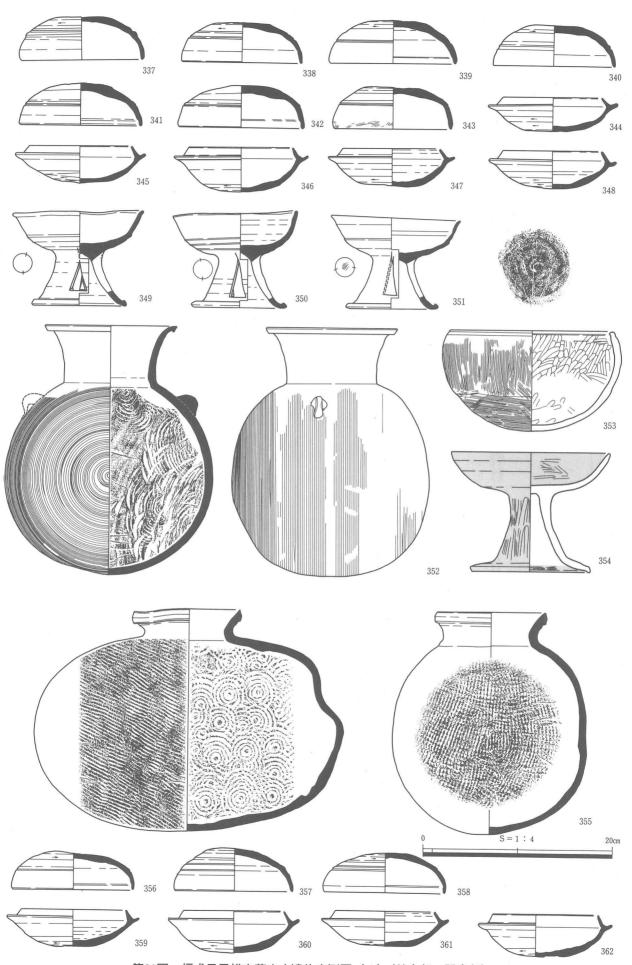
第88図 福成早里横穴墓出土遺物実測図(1)(前庭部および横穴墓周辺・1)



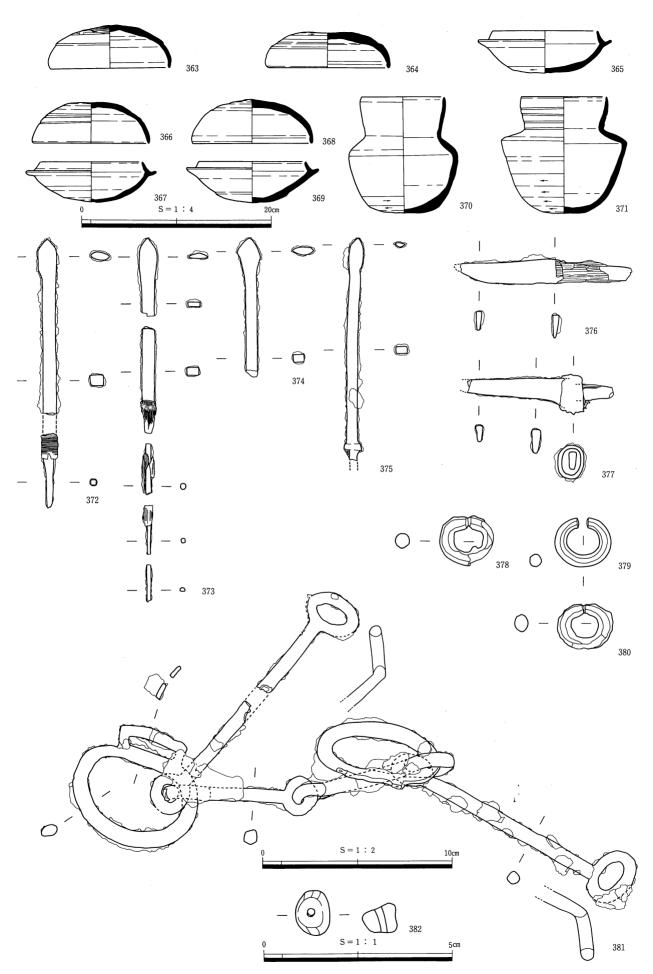
第89図 福成早里横穴墓出土遺物実測図(2)(前庭部および横穴墓周辺・2)



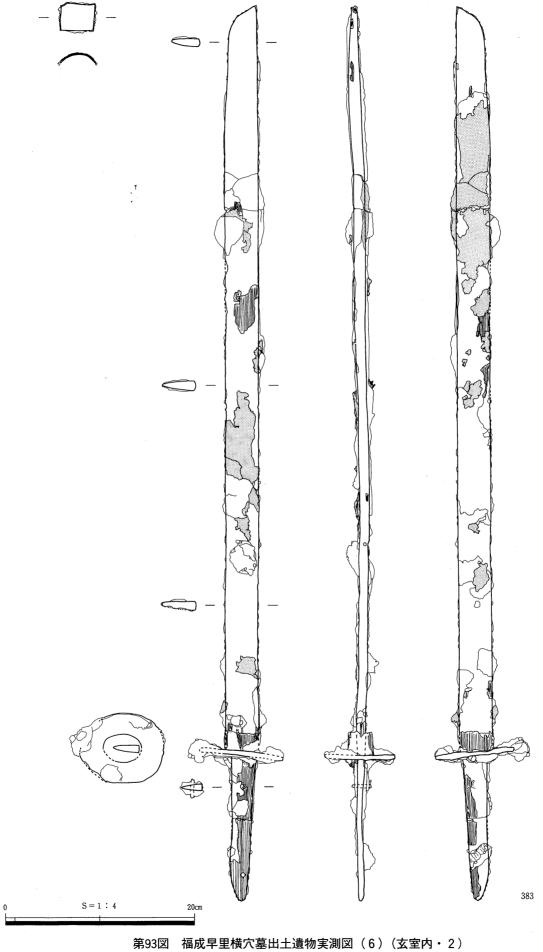
第90図 福成早里横穴墓出土遺物実測図(3)(前庭部・後背周溝および横穴墓周辺)



第91図 福成早里横穴墓出土遺物実測図 (4) (前庭部・閉塞部)



第92図 福成早里横穴墓出土遺物実測図(5)(羨道部・玄室内・1)



第3節 土葬墓・火葬墓

今回の調査では、中世以降の所作と思われる墓が、27基検出された。その内訳は、土葬墓14基(S X 7~20)、火葬墓13基(S X 21~33)である。すべてA区から検出され、S X 32、33の火葬墓以外は早里14号墳より北東方面にかけて分布している(第141図)。大きく2群に分けられ、S D 2 以東に17基と、早里14、15号墳付近に8基が検出された。前者をA群(S X 7~14、21~29)、後者をB群(S X 15~20、30、31)と呼称する。A群とB群を隔てる S D 2(第127、128図・写真図版19)は、溝底から五輪塔が出土しており、墓群との関連が窺われる。また S D 1(第128図・写真図版19)は墓群と同一面から掘り込まれており、墓の配置から推しても墓群と関連するものと判断される。

火葬墓は、火葬骨の出土をもって火葬墓と判断したが、掘り込みや遺物を伴わず、火葬骨のみが集中的に出土する範囲についても墓と認識し、この範疇に含めた。一方土葬墓は、火葬されていない人骨が出土すれば明確に判断できるのであるが、人骨の出土しないものが大半を占め、あくまで間接的な判断を下さざるを得なかった。すなわち人骨を伴う他の土葬墓と墓の構造が共通し、火葬骨を出土しないものについては、土葬墓の範疇に加えた。したがって、当遺跡で土葬墓とされたもののうち、確実に人骨から判断できたものは3基であった。なお、当節においては、出土遺物の詳細については、章末の観察表を参照されたい。

1. 土葬墓(SX7~20)

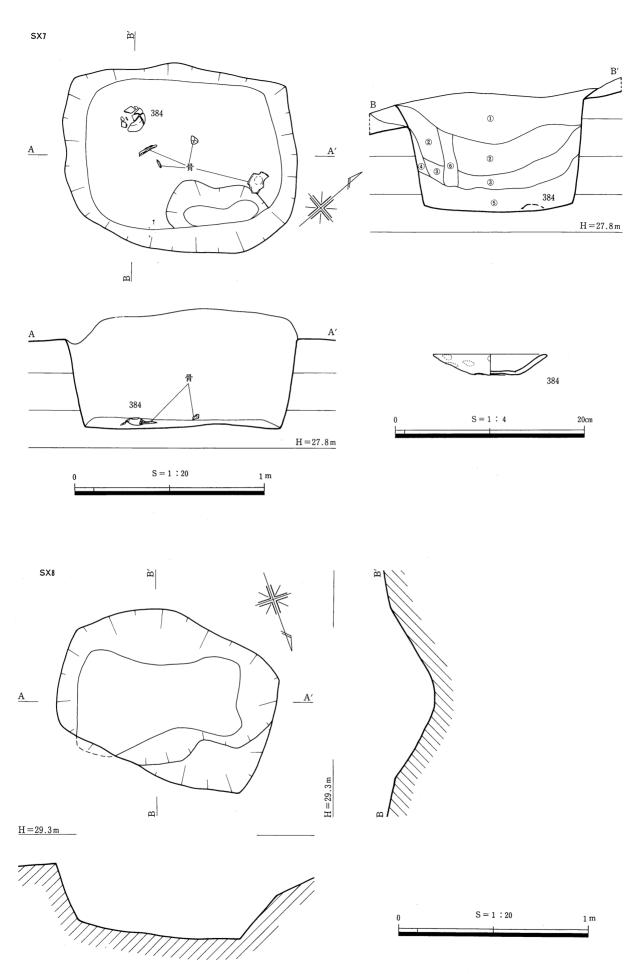
土葬墓は、計14基を検出した。その分布は、A群に 8基(S X $7\sim14$)とB群に 6基(S X $15\sim20$)である。A群中のS X $15\sim20$ は、S D 1 に沿ってほぼ南北に一列に並ぶ。B群中のS X 15については、他の墓とやや距離を置き、S D 2 に近い位置にある。またS X 20 もやや離隔があり、南方に寄っている。なお、各土葬墓の時期や内部主体(木製棺など)の構造については、第5章の考察で触れることとする。以下遺構ごとに概述する。

SX7(第94図・写真図版14、38)は、A区の最北東端に位置し、A群に属する。墓壙の上面プランは隅丸長方形で、長辺122cm、短辺100cmを測り、底面プランは隅丸長方形で、長辺101cm、短辺76cmを測る。深さは60cmで、墓壙の主軸方向は $N-40^\circ$ — Eである。周壁はわずかに外傾し、壙底は平坦であるが、南東辺に若干のくぼみがある。埋土は、①層~③層、⑤層が茶灰褐色系の土で、④層が茶褐色土、⑥層は木根である。②層は地山土のブロックが混じり、④層は非常に土質が脆い。⑤層にはやや粘性がある。遺物は、土師質土器の皿(384)が1点、天地逆の状態で西隅で出土したが、土圧のためか破砕していた。口縁端部と壙底とのレベル差は、1~2cmである。人骨は、東隅とほぼ中央付近から出土しており、残存状態は不良である。壙底とのレベル差は、3~6cmである。土器、人骨の出土は、すべて⑤層からである。

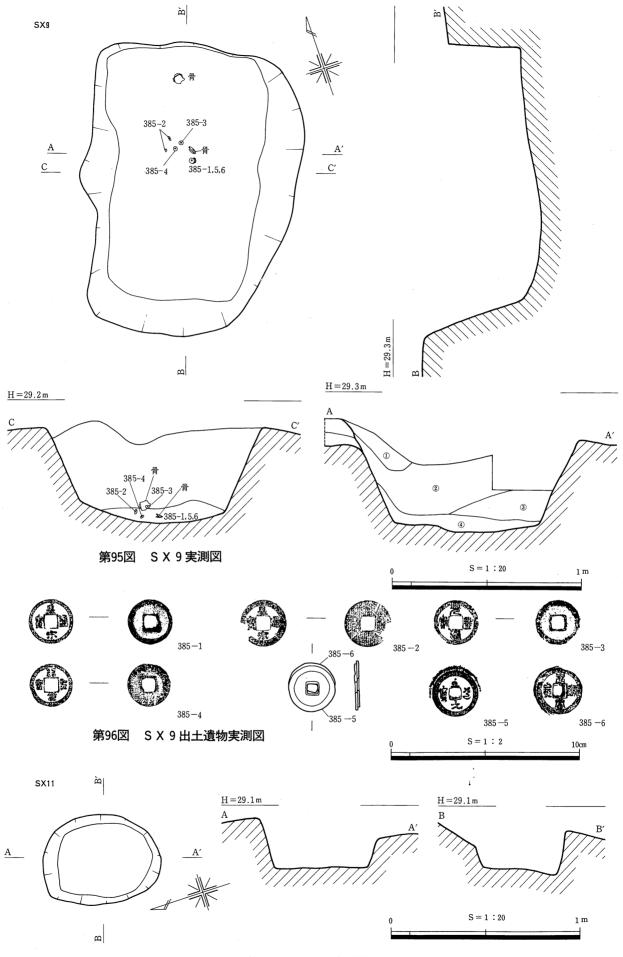
SX8 (第94図) は、A群に属し、S X 7 から南に 9 mの地点に位置する。墓壙の上面プランは隅丸長方形で、長辺115㎝、短辺83㎝を測り、底面プランは撥形で、長辺82㎝、短辺は最大で55㎝を測る。深さは40㎝で、墓壙の主軸方向は $N-54^\circ-W$ である。周壁は概ね外傾するが、東隅で内傾する立ち上がりを示し、壙底は平坦である。遺物は、出土していない。

S X 9 (第95、96図・写真図版14) は、A群に属し、S X 8 から南に 2 mの地点に位置する。墓壙の上面プランは隅丸長方形で、長辺155cm、短辺112cmを測り、底面プランは隅丸長方形で、長辺132cm、短辺84cmを測る。深さは51cmで、墓壙の主軸方向は N -28° - E である。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦であるが、南側がやや低まる。埋土は、①層が地山土を多量に含む茶褐色土、②~④層が暗茶灰褐色系の土で、②層に地山土が少量混じり、④層に黒茶灰褐色土が混じる。遺物は、銅銭が 6 枚(385-1~6)、墓壙の中央部北東寄りの位置で出土したが、半径 9 cmの範囲に集中していた。壙底とのレベル差は、0~4 cmである。385-5と6は錆着していた。385-1、2、6は皇宋通寶、385-3は元豊通寶、385-4は紹聖元寶、385-5は至道元寶で、いずれも北宋銭である。人骨は、銅銭の出土地点付近と北東側短辺近くの 2 地点で出土しており、残存状態は不良である。壙底とのレベル差は、0~1 cmである。土器、人骨の出土は、すべて④層からである。

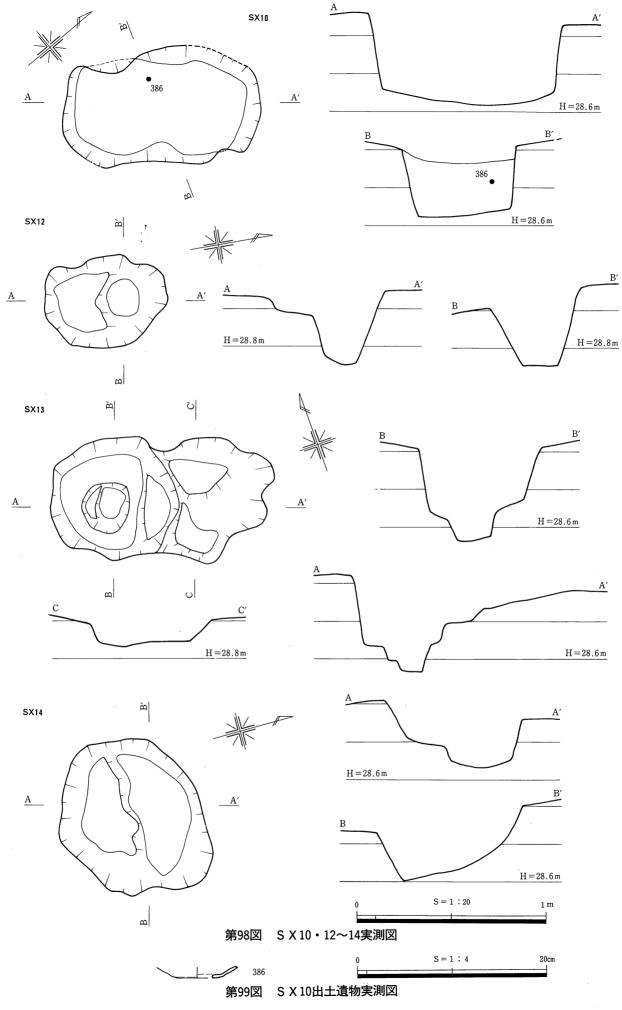
SX10 (第98、99図・写真図版14) は、A群に属し、SX9から南に2mの地点に位置する。墓壙の上面プラ

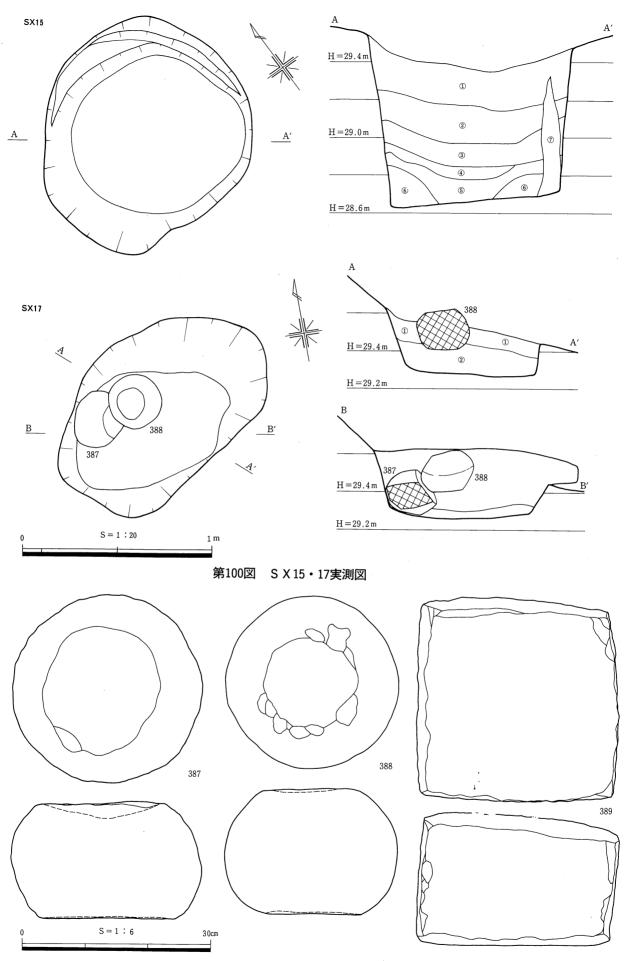


第94図 SX7・8実測図



第97図 S X 11実測図





第101図 S X 17出土遺物実測図

ンは隅丸長方形で、長辺104cm、短辺59cmを測り、底面プランは不整な隅丸長方形で、長辺88cm、短辺は最大で50cmを測る。深さは36cmで、墓壙の主軸方向はN-36°ーEである。周壁は概ね外傾するが、東隅と西隅で内傾する立ち上がりを示す。壙底はほぼ平坦であるが、南西から北東に向けてやや傾斜する。遺物は、埋土中から土師質土器の皿(386) 1 点が出土しており、壙底とのレベル差は15cmである。

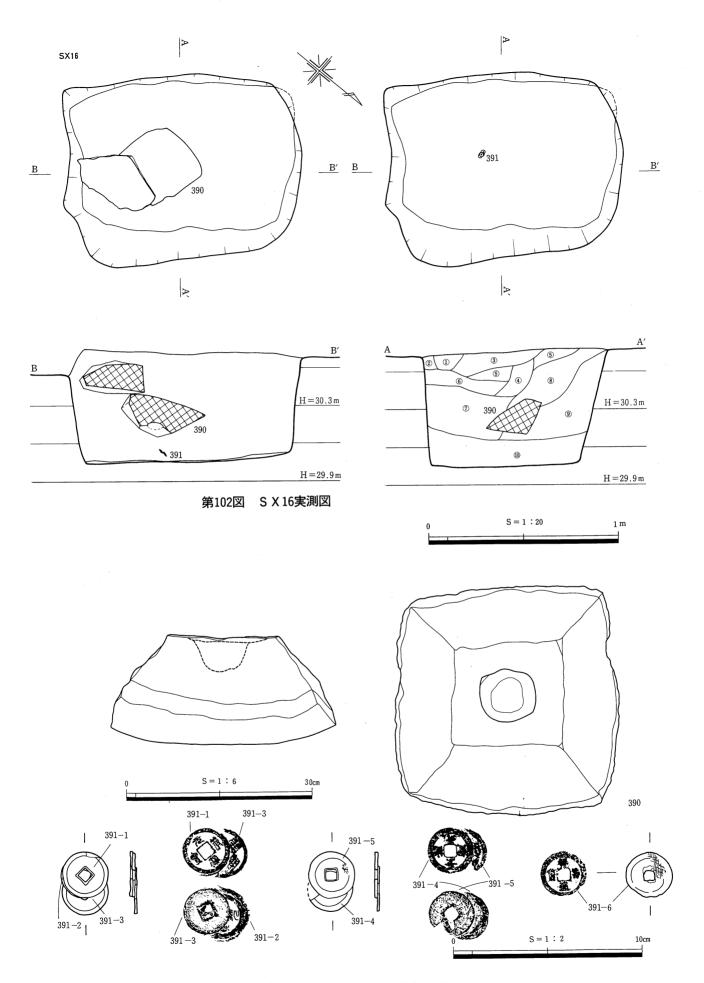
SX11 (第97図) は、A群に属し、SX10から南に1.8mの地点に位置する。墓壙の上面プランは楕円形で、長径63cm、短径48cmを測り、底面プランは楕円形で、長径48cm、短径は36cmを測る。深さは41cmで、墓壙の主軸方向はN-17°-Eである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦であるが、東側でやや低まる。遺物は出土していない。SX12 (第98図) は、A群に属し、SX11から南西に2.3mの地点に位置する。墓壙の上面プランは楕円形で、長径65cm、短径48cmを測る。2段掘りになっており、南側に不整な半月形の平坦面が11cmの深さで掘り込まれ、東西30cm、南北20cmの範囲を示す。さらに27cmの深さで掘り込まれ、底面プラン不整円形で、長径18cm、短径は16cmを測る。遺構としての最深度は41cmで、墓壙の主軸方向はN-9°-Eである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦である。遺物は、出土していない。

S X 13(第98図・写真図版14)は、A群に属し、S X 12から南に 5 mの地点に位置する。墓壙の上面プランは不整形で、長辺114cm、短辺65cmを測る。墓壙の東側が45~50cmの範囲で不整に掘り込まれており、西側の66cmの範囲が S X 12と同様の掘り込み方を示す。 2 段掘りになっており、壙底中央で不整円形にさらに掘り込まれている。 1 段目の壙底は不整半月形のプランで、長径50cm、短径40cm、深さ38cmを測る。 2 段めの壙底は途中に小さな段を有し、不整隅丸長方形のプランを示す。長辺16cm、短辺11cm、1 段目からの深さ13mを測る。墓壙の主軸方向はN-70°-Eである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦である。遺物は、出土していない。

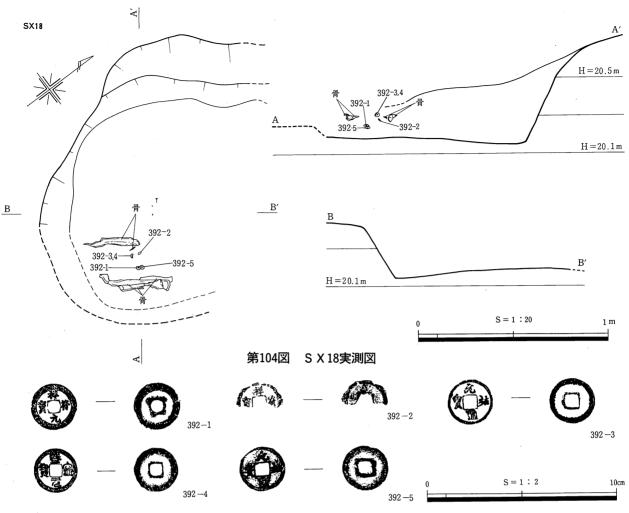
S X 14(第98図)は、A 群に属し、S X 13から南西に3.5 mの地点に位置する。墓壙の上面プランは不整な円形で、長径92cm、短径73cmを測る。 2 段掘りになっており、南側に不整な半月形の平坦面が22cmの深さで掘り込まれ、東西53cm、南北28cmの範囲を示す。さらに11cmの深さで掘り込まれ、底面プラン半月形で、東西68cm、南北は30cmを測る。遺構としての最深度は40cmで、墓壙の主軸方向は $N-70^\circ$ -Eである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦だが、東側に向かって傾斜する。遺物は、出土していない。

S X 15 (第100図) は、B群に属し、S D 2 から西に 4 mの地点に位置する。B群中において他の墓との離隔がある。墓壙の上面プランは円形で、長径118cm、短径109cmを測り、底面プランは円形で、長径90cm、短辺88cmを測る。深さは90cmである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦であるが、北東に向かってやや傾斜する。埋土は、①~③層が黄茶褐色系の土、④、⑤層が黄茶灰色系の土、⑥層が黄灰褐色砂質土、⑦層が木根である。①~④層は非常に脆く、②~③層は 3 cm大の炭化物片を少量含む。⑤層はやや粘性が有る。遺物は、出土していない。

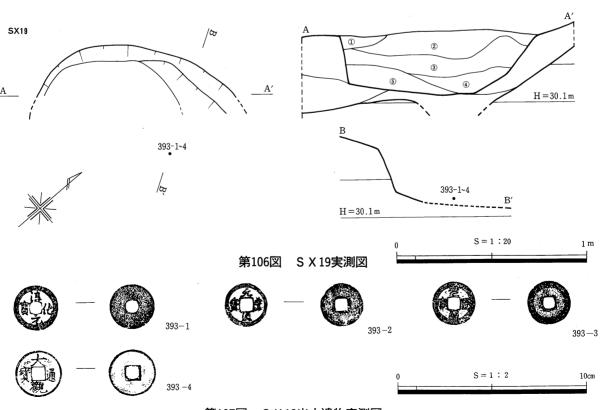
S X 16 (第102、103図・写真図版14) は、B群に属し、S X 15から南西に15.6mの地点に位置する。墓壙の上面プランは長方形で、長辺122cm、短辺97cmを測り、底面プランは長方形で、長辺110cm、短辺76cmを測る。深さは63cmで、墓壙の主軸方向はN-40°-Wである。周壁は概ね外傾するが、西隅で内傾する。壙底は平坦である。埋土は、①、⑥層が黄橙茶褐色系の土、②層が黒茶褐色土、③~⑤、⑦~⑨層が茶灰褐色系の土、⑩層が黄橙茶褐色粘質土である。③、⑤層に①層土の小ブロックが僅かに混じり、⑥層に④層土が混じる。⑦層に⑥層が微量に混じり、⑧層にはやや粘性がある。土層断面南西側に埋土が落ち込んでいる様子が窺われる。墓壙の南東側の墓壙埋土中から、24~40cm大の角礫1と五輪塔の火輪1(390)が出土した。壙底とのレベル差は、角礫が38cm、火輪が15cmである。火輪は天地逆の状態であり、その上位に一部重なるかたちで、角礫が検出された。390は重量22㎏で、角閃石安山岩製である。墓壙のほぼ中央、火輪の下位から銅銭が6枚(391-1~6)出土したが、6枚が重なった状態で一部錆着している。壙底とのレベル差は、2~6cmである。391-1は元豊通寶、2は□□元寶、3は開□通□、4は景徳元寶、5は銭銘不明、6は祥符通寶である。1、4、6は北宋銭である。391-5と6の裏面には繊維が付着しており、銭の穴に通した紐か、銭を入れた袋の痕跡である可能性がある。人骨は、出土していない。直葬と考えられるが、火輪と銅銭の位置関係から推して、墓壙内で遺体の上に火輪を置いたものと思われる。



第103図 S X 16出土遺物実測図



第105図 S X 18出土遺物実測図



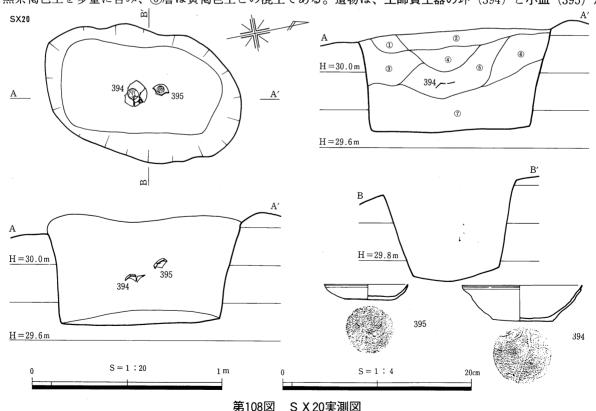
第107図 S X 19出土遺物実測図

プランは楕円形で、長径127cm、短径78cmを測り、底面プランは楕円形で、長径88cm、短径64cmを測る。深さは36cmで、墓壙の主軸方向はN-65°-Eである。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦である。埋土は、①、②層ともに黄褐色系の土で、②層がやや暗い色調である。墓壙の北西側から、五輪塔の水輪2点(387、388)が出土した。壙底とのレベル差は、387が0cm、388が12cmである。387は壙底に接しており、388は387と一部接してその上位から出土した。実は図示し得なかったが、これらの上位からも地輪が1点(389)、正位の状態で出土している。重量は、387が18.5kg、388が19kg、389が39.5kgで、石材はいずれも角閃石安山岩製である。地輪が墓壙の上位から出土したことから、供養施設の下部構造である可能性も否定し得ないが、まずは土葬墓としておく。

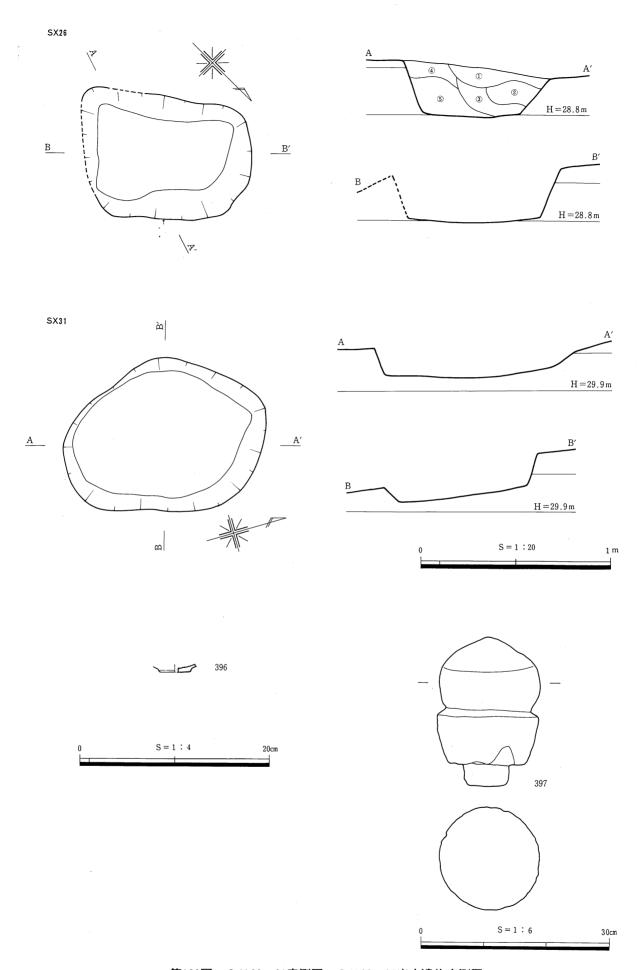
S X 18(第104、105図・写真図版15)は、B 群に属し、S X 17から南西に 2 mの地点に位置する。検出に失敗したため、墓壙の上面プラン、底面プラン、規模は不明である。深さは50cmを測る。周壁は外傾し、壙底はほぼ平坦である。墓壙の南東側に集中して、人骨と銅銭 5 枚(392-1~5)の出土をみた。壙底とのレベル差は、人骨が 7~10cm、銅銭が 3~10cmである。銅銭は人骨に囲まれるような位置から出土しており、半径 8 cmの範囲に集中している。392-1は祥符元寶、2は祥符□寶、3、5は元祐通寶、4は熈寧元寶である。いずれも北宋銭である。遺物の出土状況からは、木製棺の使用は窺われなかった。

SX19 (第106、107図) は、B群に属し、SX16から南西に1.4mの地点に位置する。早里14号墳と15号墳の間の周溝埋土上面から掘り込まれている。平面では把握できず、断面で確認して検出した。よって、墓壙の上面プラン、底面プラン、規模は不明である。深さは33cmを測る。周壁は外傾し、壙底は傾斜する。埋土は、①、③、⑤層が暗茶灰褐色系の土、②、④層が茶褐色系の土である。②層は①層土を少量含み、⑤層は黒茶褐色土を少量含む。墓壙の北東側で銅銭4枚(393-1~4)の出土をみた。壙底とのレベル差は2cmで、1箇所から集中して出土した。392-1は淳化元寶、2、3は元豊通寶、4は大観通寶で、いずれも北宋銭である。

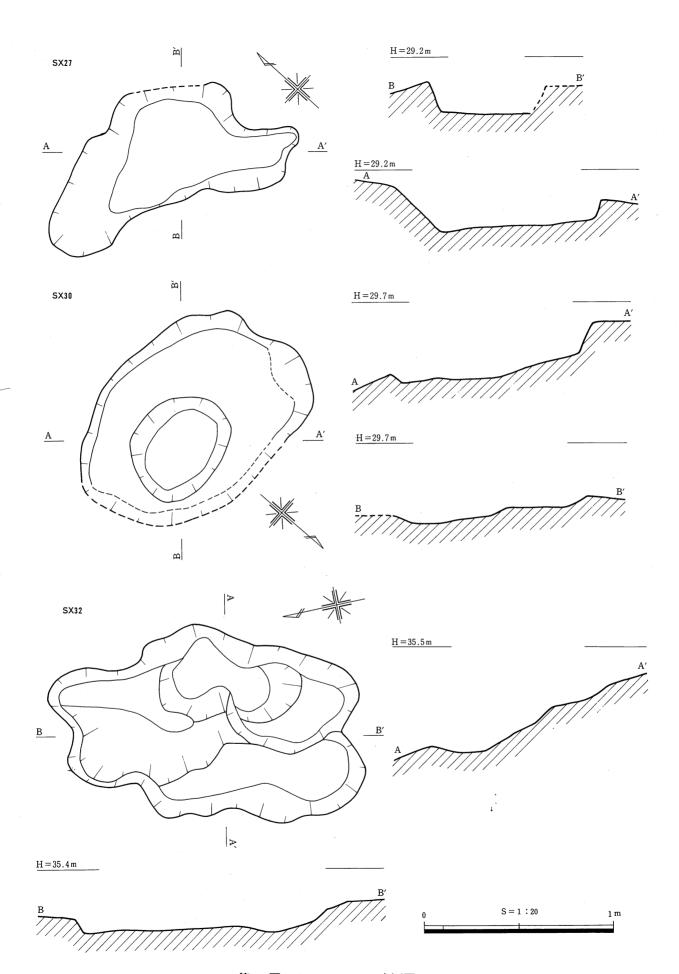
S X 20 (第108図・写真図版15、38) は、B 群に属し、S X 19から南に13.5mの地点に位置する。墓壙の上面プランは隅丸長方形で、長辺105cm、短辺67cmを測り、底面プランは隅丸長方形で、長辺82cm、短辺45cmを測る。深さは55cmで、墓壙の主軸方向はN-21°-Eである。周壁はわずかに外傾し、壙底は平坦である。埋土は、①~⑦層まで暗茶灰褐色系の土で、①層は黄褐色土を微量含み、②層は黒茶褐色土を少量含む。③、⑦層は黄褐色土と黒茶褐色土を多量に含み、⑥層は黄褐色土との混土である。遺物は、土師質土器の坏(394)と小皿(395)が



--- 90 ----



第109図 S X 26·31実測図、S X 26·33出土遺物実測図



第110図 S X 27・30・32実測図

1点出土し、それぞれ天地逆の状態で、墓壙中央から出土した。壙底とのレベル差は、394が24cm、395が29cmである。いずれも⑤層からの出土である。木製棺の使用を裏付けることはできなかったが、土器の出土状況は、遺体ないし木製棺の上に置かれたものと考えられる。

2. 火葬墓(S X21~33)

火葬墓は、計13基を検出した。その分布は、A群に9基(S X21~29)とB群に2基(S X30、31)、B群から南西方向に20~50mの離隔をもって2基(S X32、33)である。A群中ではさらに南北の2 群に区分でき、北側をA-a群(S X21~24)、南側をA-b群(S X25~29)と呼称する。両者の離隔は約9 mである。火葬墓は火葬骨の集中範囲を墓と認識したもので、墓壙をもつものと、もたないものの2 タイプに分けられる。なお、各火葬墓の時期や埋葬方法については、第5章の考察で触れることとする。以下遺構ごとに概述する。

SX21 (第128図・写真図版15) は、A-a 群に属し、土葬墓SX7から南に5mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみであった。その範囲は $80cm \times 50cm$ である。

SX22(第128図)は、A-a群に属し、SX21から東に2.6mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は60cm×55cmである。

SX23(第128図)は、A-a群に属し、SX22から南に 2 mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は60cm $\times 30$ cmである。

SX24(第128図)は、A-a群に属し、SX23から北東に4.6mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は径45cmである。

SX25は、A-b群に属し、SX24から南に11mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は $150cm \times 30cm$ である。

S X 26 (第109図・写真図版15) は、A-b群に属し、S X 25から南西に2.6mの地点に位置する。掘り込みを伴うもので、墓壙の上面プランは長方形、長辺88cm、短辺65cmを測り、底面プランは不整な長方形で、長辺68cm、短辺最大で48cmを測る。深さは27cmで、墓壙の主軸方向はN-44°-Wである。周壁は外傾し、壙底は平坦である。埋土は、①層が暗茶褐色土、②層が赤茶灰褐色土、③層が暗茶灰褐色土、④、⑤層が①層土と赤茶灰褐色土との混土である。火葬骨は①層と④層のみから出土した。埋土中から土師質土器の小皿が出土した。

S X 27 (第110図) は、A - b 群に属し、S X 26の南西に隣接する。掘り込みを伴うもので、墓壙の上面プランは不整形で、長軸140cm、短軸62cmを測り、底面プランは不整形で、長軸104cm、短軸で47cmを測る。深さは27 cmで、周壁は外傾し、壙底は平坦である。火葬骨は埋土の上層のみから出土した。

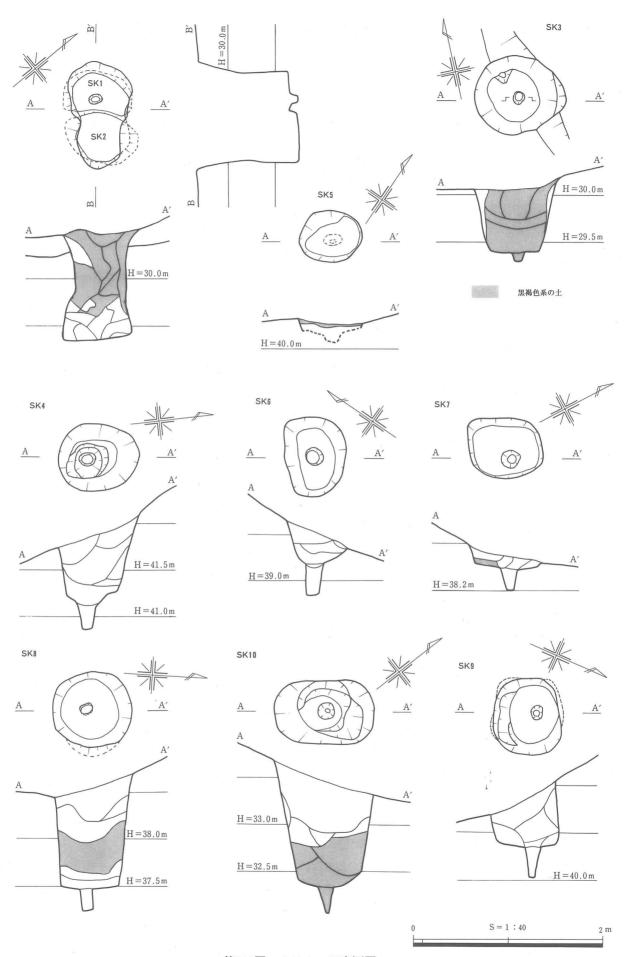
SX28(第128図)は、A-b群に属し、SX27から南西に1.5mの地点に位置する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は80cm $\times 30$ cmである。

S X 29 (第128図) は、A-b 群に属し、S X 28から南西に 2 mの地点に位置する。S D 2 の東側上端上に立地する。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は60cm×60cmである。

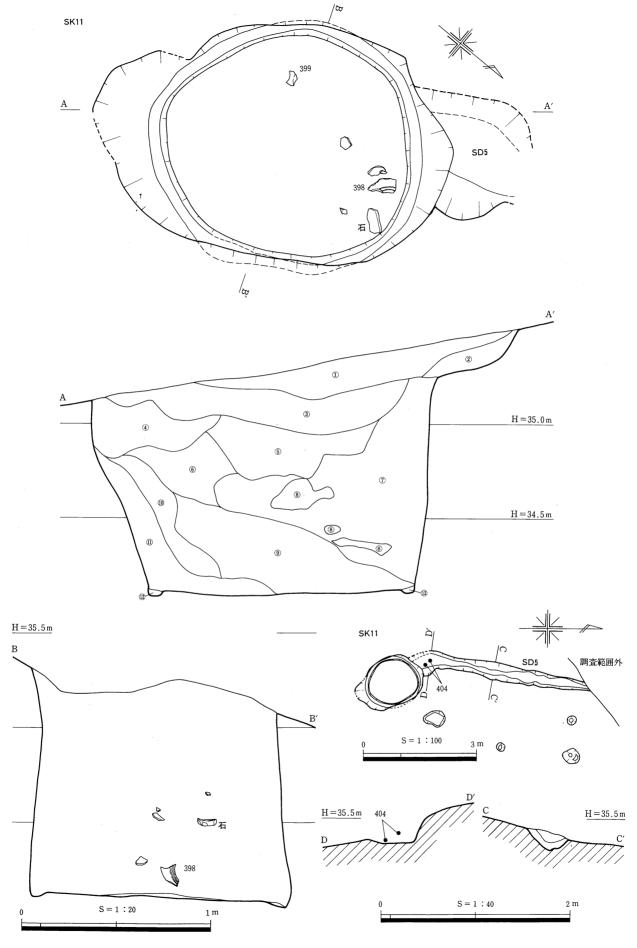
S X 30 (第110図・写真図版15) は、B群に属し、土葬墓S X 17から北東に4.1mの地点に位置する。掘り込みを伴うもので、墓壙の上面プランは楕円形で、長径132cm、短径91cmを測り、底面プランは楕円形で、長径116cm、短径で80cmを測る。深さは16cmで、周壁は外傾し、壙底はいびつである。壙底中央からやや北東寄りに楕円形の浅いくぼみがある。火葬骨は埋土中から出土したが、レベルによる偏りはみられなかった。なお、火葬骨に混じって炭化した多量の種実が検出された。同定の結果、シイノキ属と判明した(写真図版15)。食用となる種実であり、副葬の可能性もあるが、出土状況からは断定できない。

S X 31 (第109図) は、B 群に属し、S X 30から南西に7.5mの地点に位置する。掘り込みを伴うもので、墓壙の上面プランは楕円形で、長径109cm、短径82cmを測り、底面プランは楕円形で、長径94cm、短径で66cmを測る。深さは20cmで、周壁は外傾し、壙底は平坦である。火葬骨は埋土中から出土したが、レベルによる偏りはみられなかった。

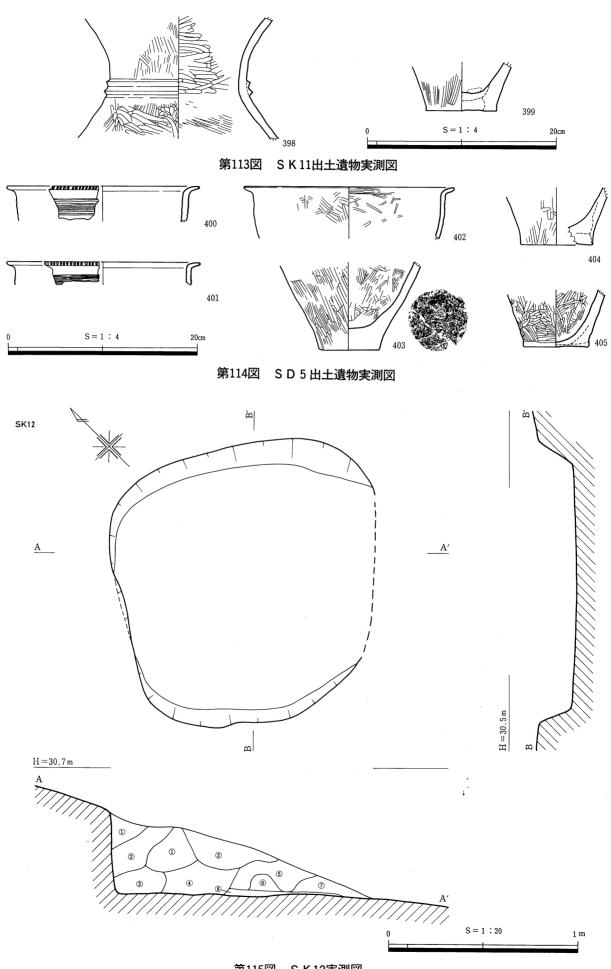
SX32(第110図・写真図版15)は、B群の土葬墓SX20から南西に28mの地点に位置し、群を構成しない。



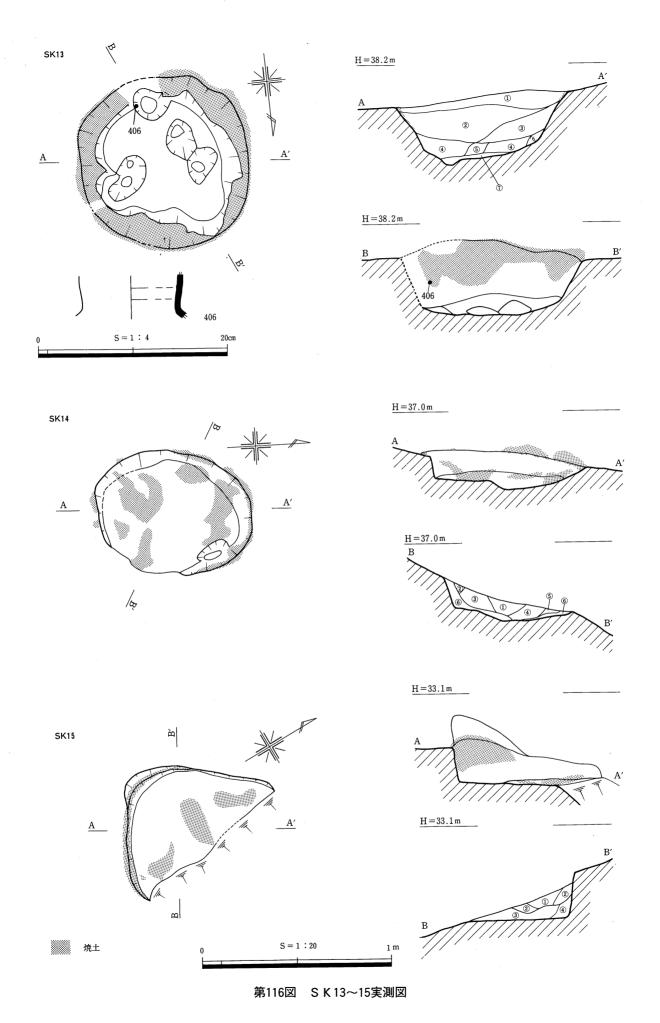
第111図 SK1~10実測図



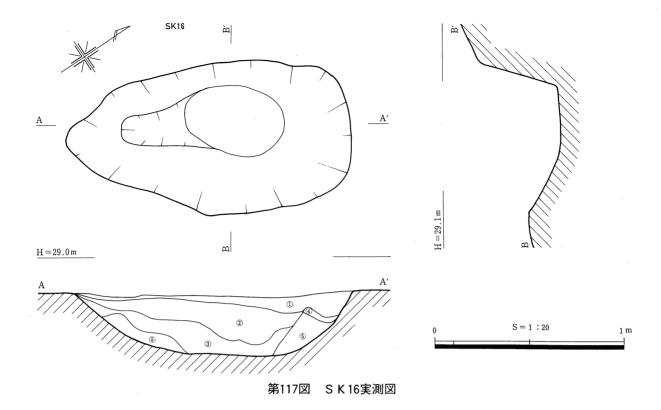
第112図 SK11・SD5実測図



第115図 SK12実測図



--- 97 ---



掘り込みを伴うもので、墓壙の上面プランは不整形で、長軸172cm、短軸89cmを測り、底面プランは不整径で、 長軸156cm、短軸で80cmを測る。深さは15cmで、周壁は外傾し、壙底はいびつである。火葬骨は東側中央付近の 埋土中から集中的に出土したが、レベルによる偏りはみられなかった。

S X 33 (第109図) は、S X 32から南に26mの地点に位置し、群を構成しない。火葬骨が集中出土するのみで、その範囲は76cm×72cmである。火葬骨の上位から五輪塔の空風輪(397)が出土し、重量は5.3kgを測る。凝灰岩製で、当遺跡出土の他の五輪塔と石材を唯一異にする。

第4節 土坑

1. 落とし穴状土坑 (SK1~10) (第111図・写真図版16)

落とし穴状土坑を10基検出した。従来落とし穴状土坑は、年代論、機能論ともに充分な検証がないままに、縄 文時代の狩猟用遺構として扱われてきた。本節ではその前提を採らないが、混乱を避けるため、落とし穴状土坑 の名称を用いることとする。落とし穴状土坑は、A区の早里14、15号墳周辺の比較的なだらかな丘陵尾根上に3 基 (SK1~3) と、B区の北西端部、SI5、SS21、22に囲まれた谷地形部周辺に7基 (SK4~10) を検 出している。前者をA群、後者をB群とする。A群の3基については、SK1とSK2は切り合っているが、S K3とは25mの離隔があってまとまりを示さず、極めて散在的であるといえる。一方B群は、傾斜のきつい谷地 形に沿うように分布しており、半径12mの範囲に7基が集中している。SK10を除けば、6基が1本の曲線上に 配列するかのようにみえる。形態は、基本的に共通する。検出面での平面プランが円形(SK1~5、8)もし くは隅丸方形(SK6、7、9、10)で、底面形も検出面形に準ずる。周壁は外傾するが、断面形が袋状を呈す るものもある (SK1、2)。本来袋状を呈するのであるが、崩落のために外傾する周壁として検出された可能 性もある。そのことは、SK3の土層断面から窺える。第111図に示す土層断面には、黒褐色系の土に網掛けし ている。地山土は黄褐色系の土であるから、これは確実に流入土といえる。従って、SK3の土層断面の両側の、 白抜きで示された土層が、壁の崩落土である可能性が高い。SK2以外には、底面のほぼ中央にピットが穿たれ ている。平面形は一律に円形だが、縦断面形は多様である。逆台形を呈するもの(SK1、3~7、9)、長方 形を呈するもの (SK4)、逆三角形を呈するもの (SK10) がみられる。また深さも10~34cmとまちまちであ る。ピットの埋積状況は、坑底より上に伸びる形での分層を示すもの(SK7、9)と、坑底最下層土によって 覆われてしまう形での分層を示すものに分けられる。これは、ピットの断面切り線の位置によって、観察できる 埋積状況が変わるのであって、本来いずれのピットも、坑底より上に伸びる形での分層を示す可能性がある。つ まりこのピットに杭状のものが差し込まれ、土坑内に立てられていたことを示唆するものである。なお、土坑の 平面、断面の規模については、遺構上部が削平されているものが多く、比較検討の対象にならなかった。遺存値 については、巻末の遺構一覧表を参照いただきたい。

2. 貯蔵穴(SK11、12)

断面形が袋状を呈し、周壁直下の坑底に全周する溝をもつ土坑を貯蔵穴と認識した。SK11である。また、形態的な類似からSK12も範疇に加えた。いずれもA区のほぼ中央部に位置し、両者の離隔は17mである。

SK11 (第112、113図・写真図版17、38) は、平面、底面プランともに円形で、検出面の長径は185cm、短径は130cmを測る。底面の長径は130cm、短径は115cmで、その外周に上端幅10cm、下端幅6cm、深さ2~3cmの溝がめぐる。土坑の深さは、117cmを測る。周壁は東側と西側で内傾し、南側と北側が外傾するが、南北周壁の外傾は崩落によるものであろう。坑底はほぼ平坦で、溝の断面形は逆台形を呈する。埋土は、①、③、⑤層が黒色系の土、②、④、⑨層が黒褐色系の土、⑥、⑦、⑩、⑫層が黒茶褐色系の土、⑧層が暗茶褐色土である。①、②層は貯蔵穴埋没後の堆積であり、⑦、⑪層は周壁の崩落土層と思われる。遺物は、埋土中より、弥生土器が5片、坑底より浮いた状態で出土した。うち図化できたのは2点である(398、399)。他の時代の夾雑物がなく、貯蔵穴の年代は、弥生時代前期末葉~中期初頭に比定されると考える。

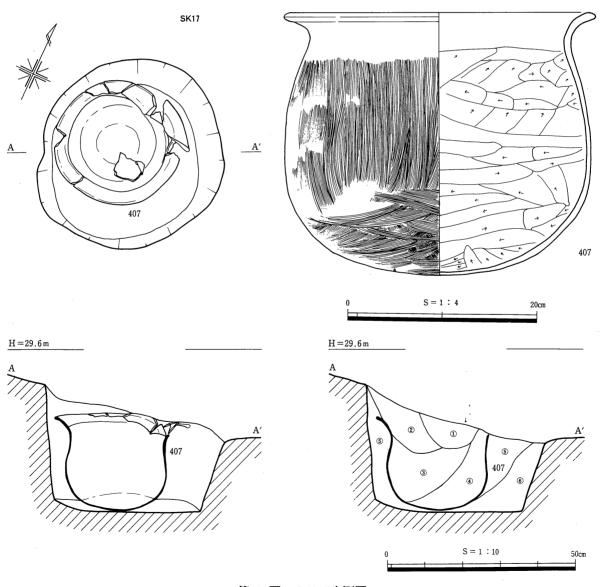
さて、S K11の北西側の上端から北東に伸びる溝 S D 5 がある(第112、114図・写真図版17)。南北 3 m、上端幅50cm、下端幅10~30cm、深さ20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土中より、弥生土器が出土し(400~405)、他の時期の夾雑物を含まない。これらの土器は、概ね弥生時代前期末葉~中期初頭に比定され、S K11の遺物の時期に一致する。よってこの溝は、S K11に伴う施設と思われ、道としての機能を推定する。

SK12(第115図・写真図版17)は、南東部を欠くが、平面、底面プランともに円形と思われる。検出面の遺存長径は137㎝、短径は133㎝、土坑の深さは43㎝を測る。周壁は概ね外傾するが、北西部で一部内傾する。周壁は概ね崩落しているものと思われる。坑底はほぼ平坦である。埋土は、①、②層が黒灰褐色系の土、③~⑦層が

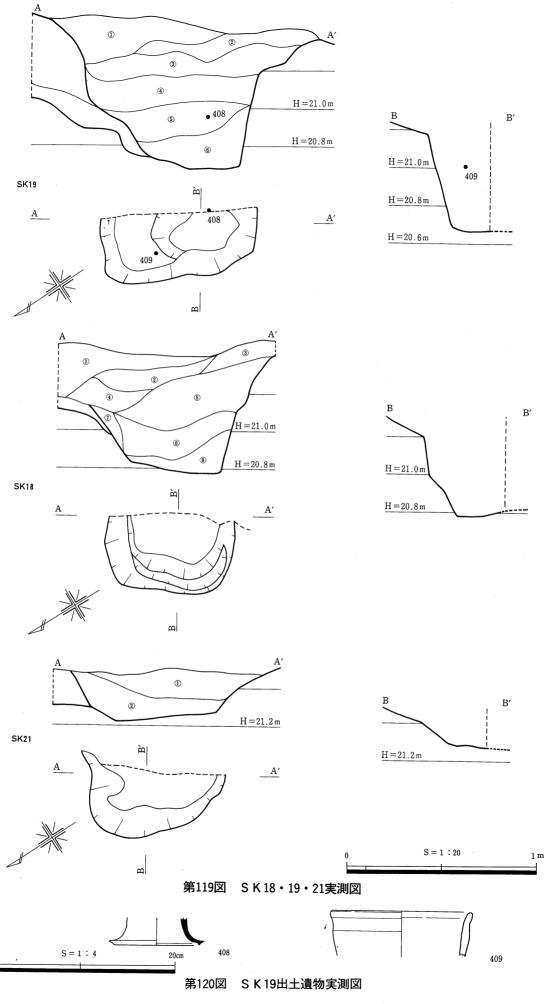
暗茶灰褐色系の土、⑧層が黄橙褐色粘質土である。遺物は、出土していない。

3. 土坑 (S K13~24)

SK13~15(第116図・写真図版17、18)は、底面から周壁、さらに上端付近へ広がる焼土範囲をもつものである。従来、焼土坑、屋外炉等と呼称されてきた土坑であるが、その機能を推察する所見が得られず、当節では単に土坑と呼ぶにとどめる。SK13は、A区のSI3から南に2mの地点に位置する。平面プランは円形で、坑底には凹凸があり、周壁は外傾する。長径90cm、短径82cm、深さ32cmを測る。焼土面は周壁の約2分の1上位から上端の外側まで広がり、本来全周していたものと思われる。埋土は、①~⑥層が茶灰褐色系の土、⑦層が灰茶褐色粘質土である。①~⑥層土には炭化物を含み、特に下層の④、⑤層土に多かった。③、⑦層土には、焼土が含まれていた。埋土中から混入とみられる須恵器の直口壺(406)が出土した。SK14は、B区のSI5から北西5mの地点に位置する。南東側が一部欠損する。平面プランは楕円形で、坑底は北側が低まり、周壁は外傾する。長径86cm、短径63cm、深さ17cmを測る。焼土面は坑底から周壁、上端にかけて不整形な島状に散在する。埋土は、①~⑥層が茶褐色系の土で、①、②、⑤層土には炭化物を含み、特に①層土に多かった。遺物は出土していない。SK15は、B区のSI5から南東4mの地点に位置する。東側が流失している。平面プランは本来隅丸方形と思われる。坑底は平坦で、周壁は直立気味に外傾する。復元長辺70cm、短辺70cm、深さは25cmを測る。焼土面は、西隅周壁と坑底に不整形な島状に散在する。埋土は、①層が暗茶灰褐色土、②、④層土が暗黒茶灰褐色土、



第118図 SK17実測図

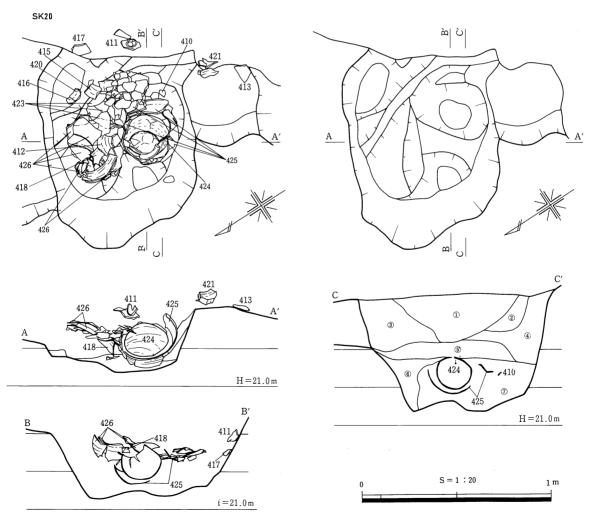


③層が黒灰褐色土で、全ての層に炭化物を含み、特に①~③層土に多かった。遺物は出土していない。

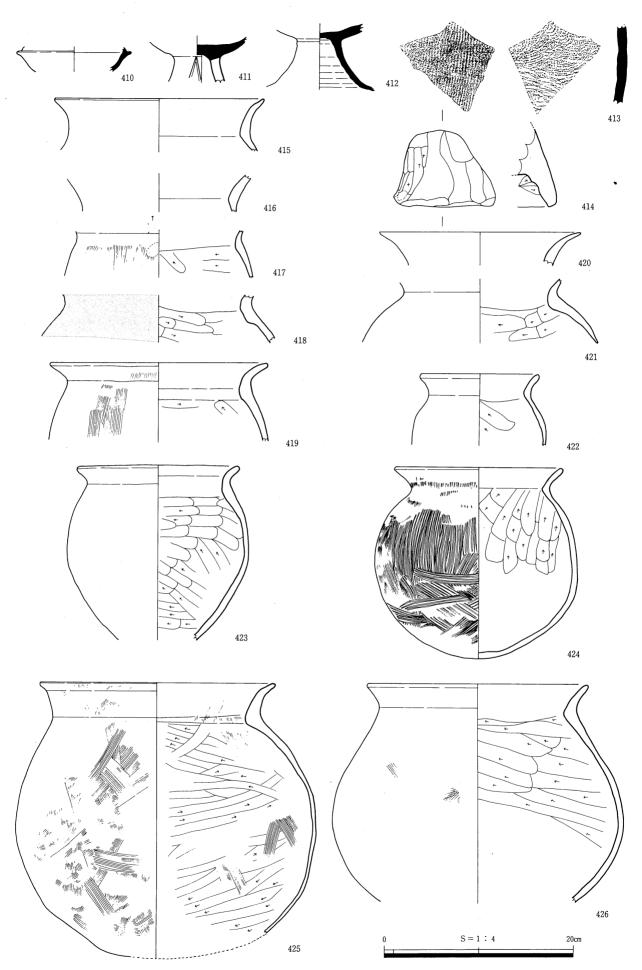
SK16(第117図)は、早里15号墳から南東5mに位置する。平面プランは楕円形で、坑底は平坦、周壁は外傾する。長径151cm、短径80cm、深さは34cmを測る。埋土は、①、②、④層が灰褐色系の土、③層が暗灰茶褐色土、⑤層が褐色土である。遺物は出土していない。

SK17 (第118図・写真図版18、38) は、早里14号墳の墳丘上から掘り込まれている。平面プランは円形で、 坑底は平坦、周壁は外傾する。長径50㎝、短径47㎝、深さは34㎝を測る。坑内に器高27.7㎝、口径32.8㎝の完形 の土師器の甕(407)が正位で収まる。土器中の埋土を精査したが、内容物は確認されなかった。埋土は、①、 ③層が黒茶灰色粘質土、②層が暗茶灰色粘質土、④、⑤層が茶褐色系の粘質土、⑥層が橙茶褐色粘質土である。 蔵骨あるいは胞衣埋納に関わる遺構の可能性もあるが、推測の域を出ない。7~8世紀代の所作であろう。

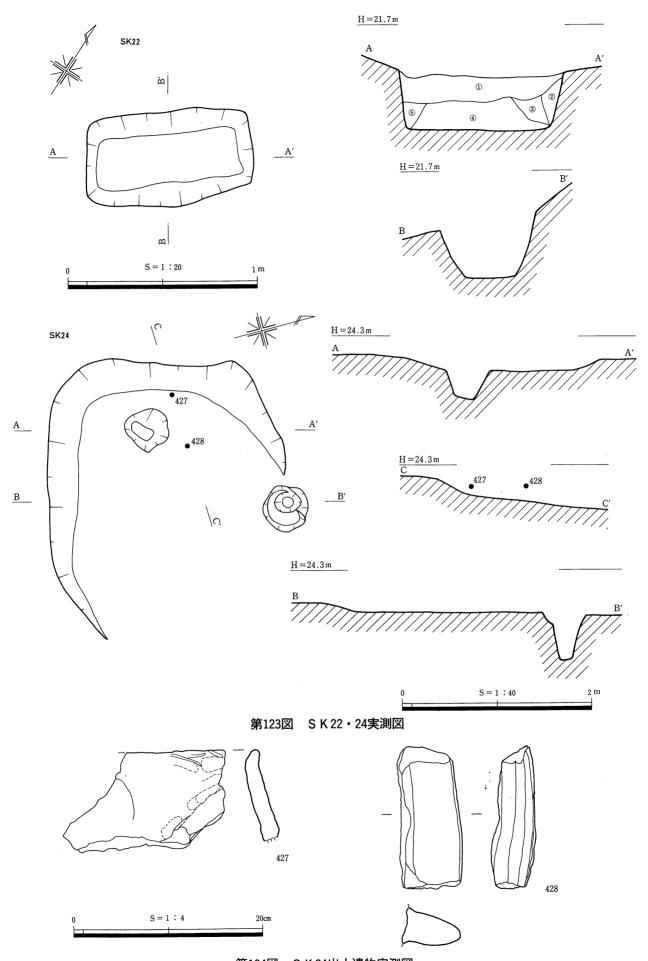
SK18~21は、SI6とSS20の調査界側に検出された土坑である(第36図)。過半が調査範囲外にあるため、それぞれ全体像を掴み難い。第36図によれば、SK18~20は同一面から掘り込まれており、SK21はSK20の上層にあたる。SK18は(第119図・写真図版18)、最も北側に位置する。平面プランは不明だが、隅丸を呈する。坑底は平坦で、周壁は外傾する。幅68cm、深さ43cmを測る。埋土は、①、③、⑥層が暗茶灰褐色土、②、④、⑤層が暗黄茶灰褐色土、⑦層が灰黄褐色粘質土、⑧層が黄褐色粘質土である。④層土に炭化物が少量含まれる。遺物は出土していない。SK19(第119、120・写真図版18)は、平面プランは不明だが、方形系を呈し、2段の掘り込みになっている。坑底は平坦で、周壁は外傾する。幅83cm、深さ50cmを測る。埋土は、①、②層が淡灰黄褐色土、③~⑥層が暗茶灰褐色土である。遺物は、埋土中から須恵器の高坏?(408)と土師器の鉢?(409)が出土しているが、混入と考える。SK21(第119図)は、最も南側に位置する。平面プランは不明だが、楕円形系か。



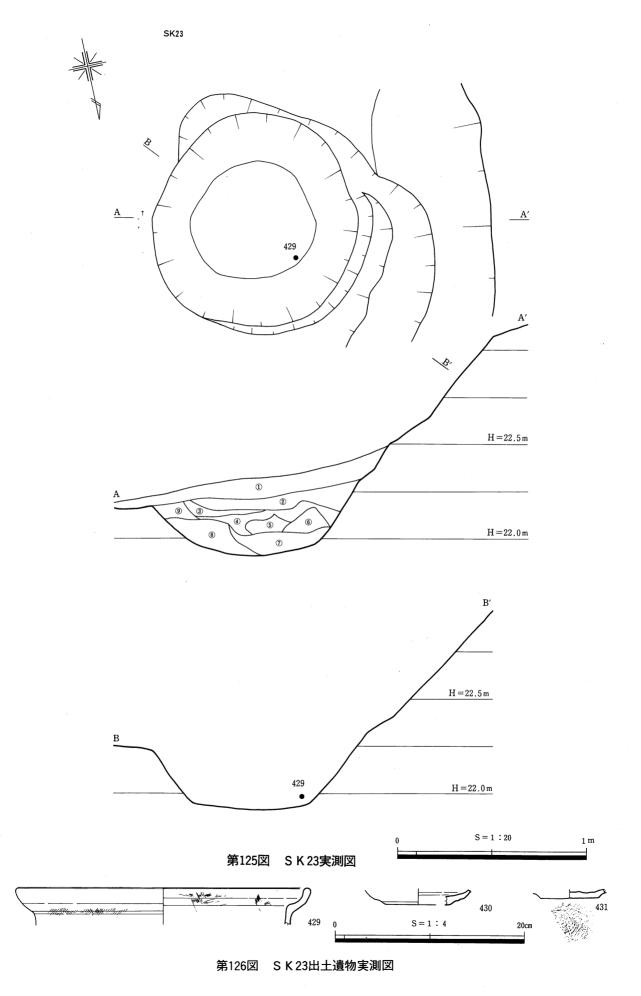
第121図 SK20実測図



第122図 SK20出土遺物実測図



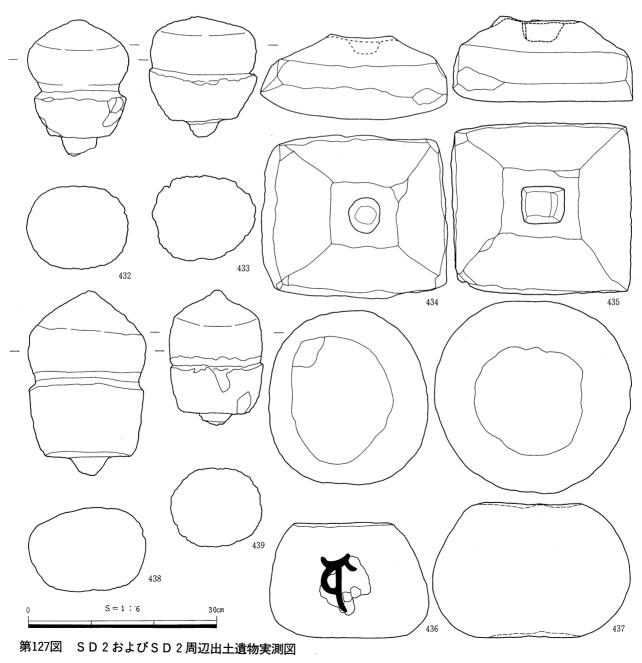
第124図 SK24出土遺物実測図

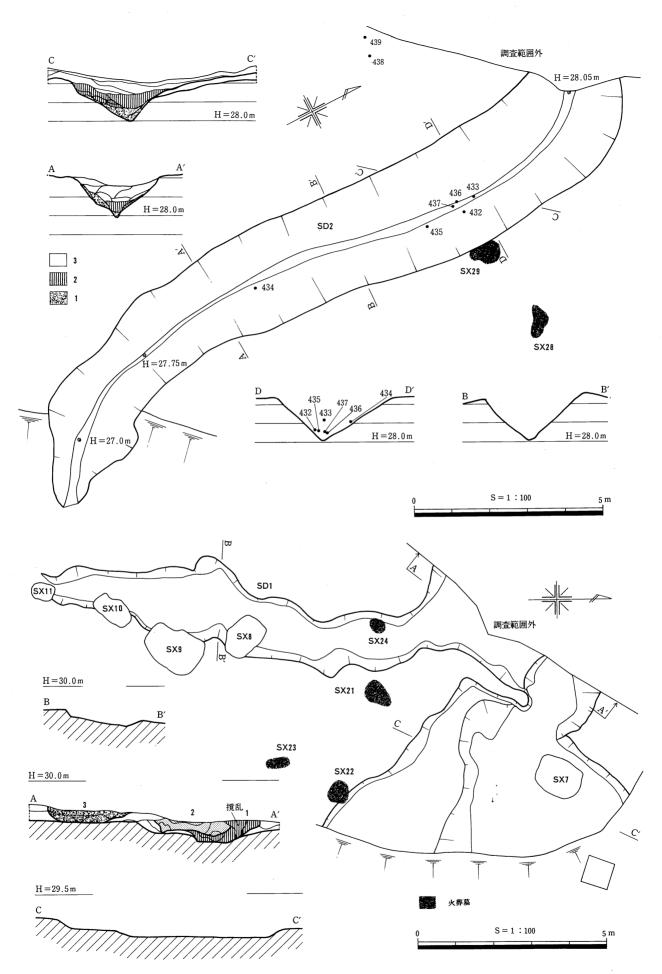


坑底は傾斜し、周壁は大きく外傾する。幅71cm、深さ13cmを測る。埋土は、①、②層ともに暗黄茶灰褐色土であ る。遺物は出土していない。SK20(第121、122図・写真図版18、38)は、平面プランは楕円形と思われ、坑底 には凹凸があり、周壁は外傾する。長径102cm以上、短径78cm、深さ62cmを測る。埋土は、①~⑧層が茶灰褐色 系の土で、④、⑤層土に炭化物が含まれる。土器がまとまって出土しており、その出土状況は、坑内に一括投棄 された観がある。須恵器には、坏身(410)、高坏(411、412)、甕(413)、土師器には甕(415~426)、そして支 脚(414)がみられる。413と421は土坑の周辺からの出土であり、これらを除く一群の土器には、高い一括性が 窺われる。410の須恵器の坏身は破片であるが、復元径からTK209より後出的であると思われる。よってこれら 一群の土師器の甕は、7世紀前葉~中葉に比定されよう。なお、418の土師器の甕の外面は赤色塗彩されていた。 SK22(第123図・写真図版19)は、B区のSI12の北東3.5mに位置する。平面プランは長方形で、坑底は平 坦、周壁は外傾する。長辺88cm、短辺50cm、深さは31cmを測る。埋土は、①、②、⑤層が黒茶褐色系の土、③、 ④層が暗茶褐色系の土である。遺物は出土していない。土層断面からは、小型の木棺墓である可能性もある。S K23 (第125、126図・写真図版19) は、B区のSS35の北2.5mに位置する。平面プランは円形で、坑底は僅か に湾曲し、周壁は外傾する。長径113cm、短径107cm、深さは40cmを測る。埋土は、①、④層が黒褐色系の土、②、 ⑦、⑨層が黒茶褐色系の土、③、⑤、⑥、⑧層が茶褐色系の土である。①、⑤、⑧層土に少量の炭化物を含む。 遺物は埋土中から、土師質土器の鍋(429)、皿(430、431)が出土した。13世紀頃に比定され、SS35との関連 が窺われる。SK24(第123、124図)は、平面プランは楕円形で、坑底は傾斜して、ピットを穿ち、周壁は外傾 する。長径146cm以上、短径125cm、深さは20cmを測る。遺物は埋土中から、竈片(427、428)が出土した。

第5節 溝状遺構

溝状遺構としたものは6条であるが、うちSD4~6については先に触れているので、当節では概述しない。SD1(第128図・写真図版19)は、A区の北端に位置する。調査界の部分で2又に分かれており、一方は南北に伸び、他方は東西に走る。第128図の土層断面図に示したとおり、SD1はルートを最低2度は変更している。東西方向の溝が最初のルートであり(1)、その後南北方向の溝へルートを移し(2)、さらにルート3へと変わる。周辺には、土葬墓、火葬墓が取り巻く。SX8~11が、南北の溝の東側上端ライン上に並び、溝が途切れる南側の延長部にもさらに墓が連なる。SD1はこれらの墓と同一面から掘り込まれており、溝状遺構とはしたが、本来墓道的な性格をもつものであるかもしれない。SD2(第127、128図・写真図版19)は、土葬墓・火葬墓のA群とB群を隔てる溝で、調査地を南北に横断している。断面V字形で、検出長19m、深さは最深部で1.3mを測る。土層断面から3段階の変遷(1→2→3)が窺われ、SD1と同様、道としての機能が推定される。埋土下層から五輪塔(432~437)が出土した。空風輪2、火輪2、水輪2である。436の側面には風天を表す梵字(バー)が墨書されていたが、他の面には墨書を確認できなかった。なお438、439の空風輪は、近辺から出土したものである。SD3(第69図)は、早里15号墳の周溝と切り合い関係にあるが、時期、性格等不明である。





第128図 SD1・2実測図

第6節 遺構外出十遺物 (第129~133図 · 写真図版39、40)

遺構に伴わない遺物は、縄文時代晩期から近世に至るまで断続的に出土している。440、441は**五輪塔**の火輪で、いずれも角閃石安山岩製である。

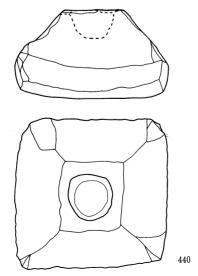
442~450は、縄文時代晩期末葉の土器である。442~446、449は深鉢、447は胴部片、450は底部で、448は屈曲する肩部をもつもので、壺である可能性がある。 451~474は、弥生土器である。451~459は前期末葉~中期初頭に比定され、451、452、459は壺、453~458は甕である。464は、繰り上げ口縁を呈する甕で、肩部以上までケズリが施されており、後期前半(青木Ⅱ期)に比定される。465、466、468~474は後期後半(青木Ⅲ期)に比定され、465、466は甕、468、469、471~473は器台、470、474は器台または高坏である。467は高坏と思われるが、吉備系の可能性がある。460~463は弥生土器の底部である。

475~496は古墳時代の土師器である。475~477は、古墳時代前期(青木V・Ⅵ期)の甕である。478~480は、退化傾向を示す複合口縁を有する甕であるが、古墳時代中期(青木Ⅷ期~区期古段階)に比定されよう。481は大型の甕で、古墳時代前期の青木Ⅷ期以降の所産であろう。482~487、492は高坏で、482は古墳時代前期(青木V・Ⅵ期)、483~487、492は古墳時代中期(青木Ⅷ~区期)に比定される。488~491は低脚坏、493~495は椀で、496は把手である。甑型土器の一部か。510~515、524は、奈良時代の土師器である。いずれも赤色塗彩されており、510~515は皿、524は坏である。517~521は製塩土器である。522は小型の壺で、523は鉢か。

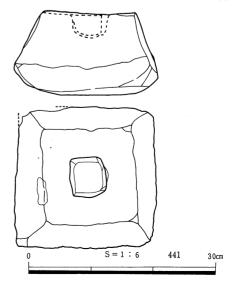
497~509、516は須恵器である。497、500、501は坏蓋、498、499、502~504は坏身である。500は擬宝珠状の摘みを持ち、503、504は高台を有する。502、503は底部糸切りで、504は糸切り後ナデ消している。501は天井部内面につややかな光沢があり、転用硯の可能性がある。497、498はMT15、499はTK10に比定され、500は陰田8式(7世紀後葉)、502~504は陰田10式(8世紀後半)に比定されよう。505、506は器台の可能性を考える。505は筒形器台で、筒部から台部にかけての部位か。外面に波状文が施されている。506は器台の脚端部で、外面に波状文が施されている。507は、台付椀の脚台部か。508は鉢、509は広口壺である。516は、甕の胴部片で、外面格子目タタキ、内面横方向のハケである。

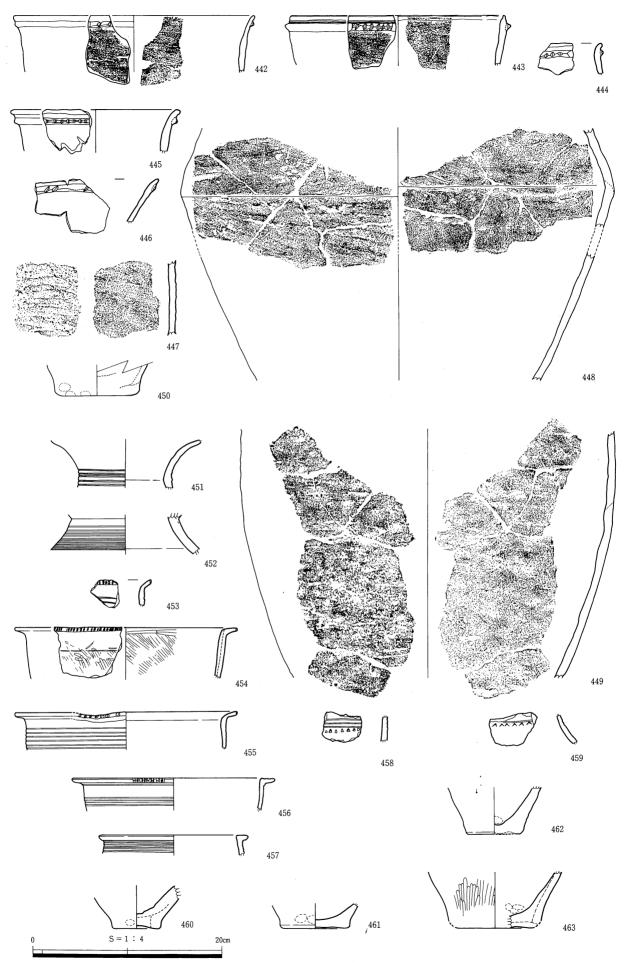
525~540は土師質土器である。525~527は椀、528~533は皿で、533は柱状高台である。525の底部内面にはイタメ状のハケがみられ、527、529~531、533は底部糸切りである。534は鍋、535は羽釜、536は鉢か。537~540は擂鉢である。537、539、540には卸目が観察される。541~547は、陶磁器である。541は白磁の椀の高台で、白濁色の施釉である。玉緑の口縁をもつものと思われ、11世紀後半~12世紀前半に比定される。542~544は青磁椀である。いずれも龍泉窯系で、543が14世紀後半、542と544が14世紀末~15世紀前半に比定される。545~547は国産陶器で、545は17世紀後半に比定され、546、547は18世紀後半以降の片口である。

548は磨石、549は砥石、550はスクレイパー、551、552は石鏃で、553は鉄斧、554は用途不明の鉄製品である。

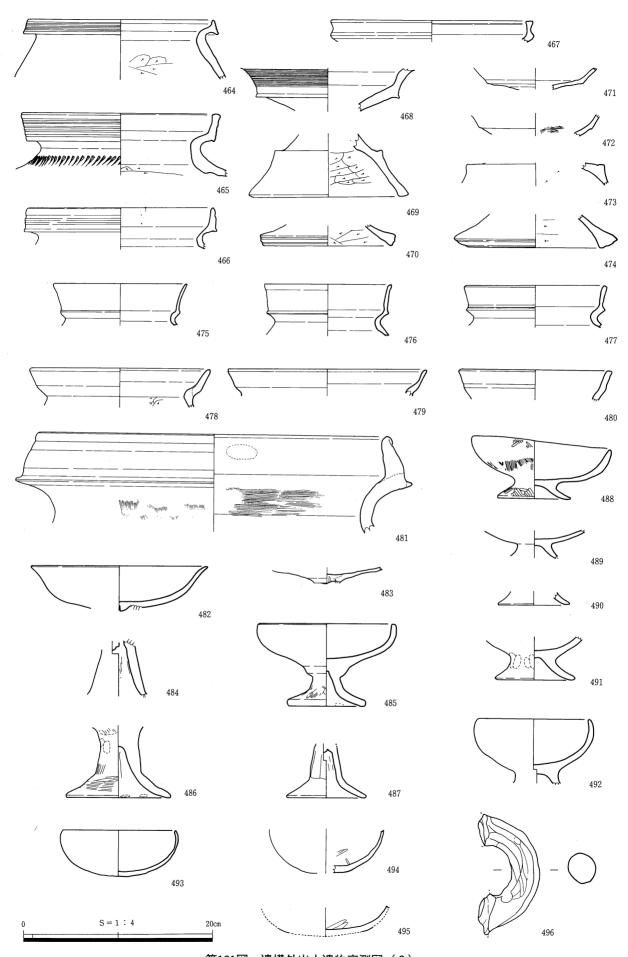


第129図 遺構外出土遺物実測図(1)

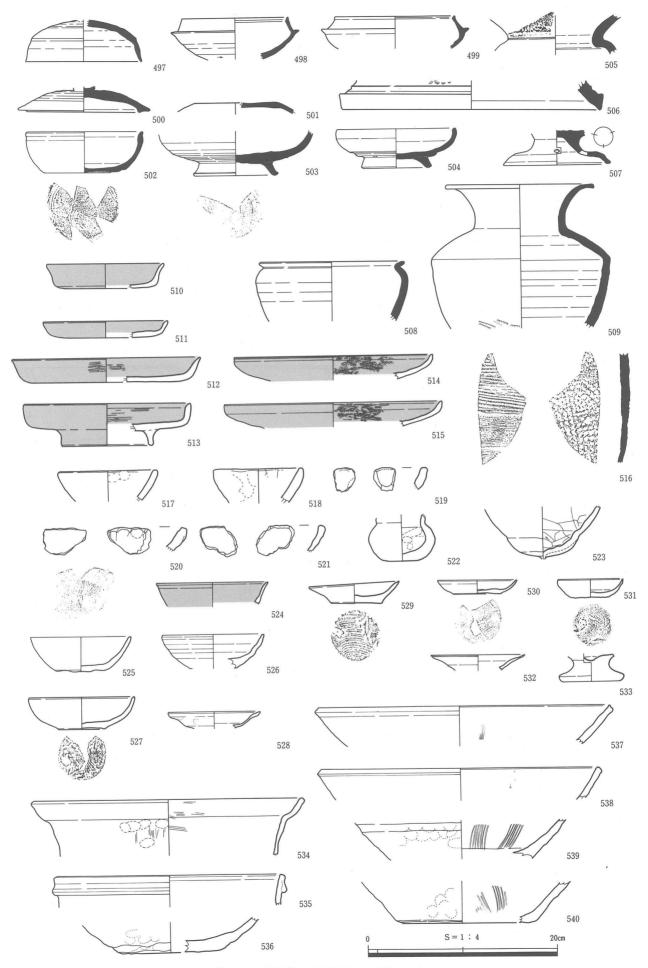




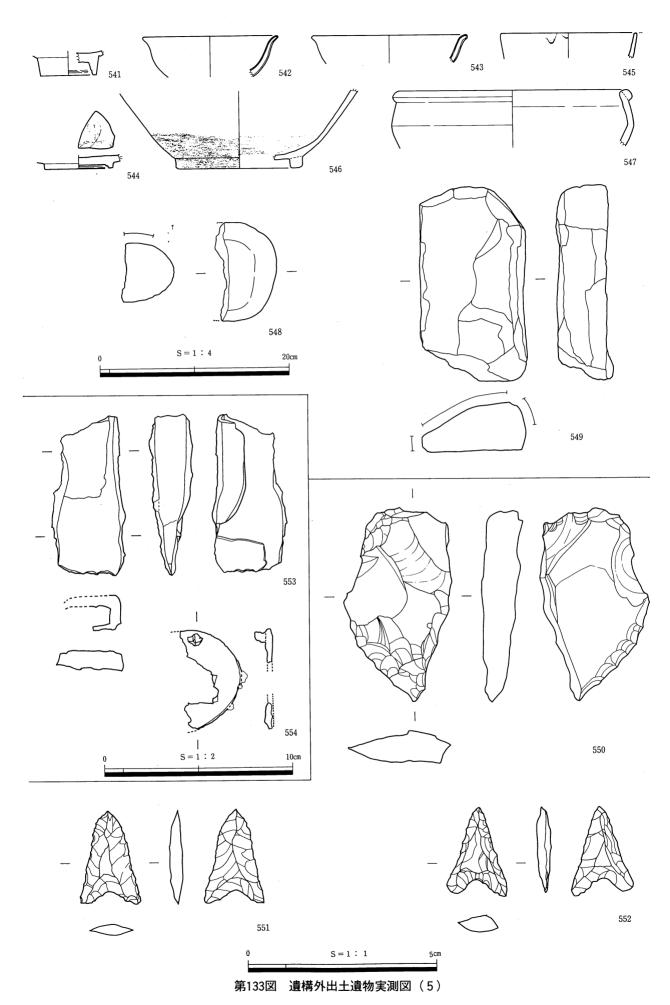
第130図 遺構外出土遺物実測図(2)



第131図 遺構外出土遺物実測図(3)



第132図 遺構外出土遺物実測図 (4)



出土遺物観察表

S S 1

番号 1	番号 12	番号			777 17
1	12				番号
		20	鉄製品	器種不明。薄造りの鍛造品。全体に曲線状を呈し、先細りす	米山27
1 1				る。先端で断面がやや湾曲する。	
2	12		坏	口縁下に1条の凹線状の溝。	山根91
S S 3					
3	13		坏	口縁下に1条の凹線状の溝。	山根88
4	13		獲	口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	山根55
S S 4					
5	14	40	製塩土器	内外面ナデ。口縁端部肥厚。色調内外面橙褐色。	山根80
6	14	40	製塩土器	内外面ナデ。内面ユビオサエあり。口縁端部やや肥厚。色調	山根15
				内外面暗橙褐色。焼成極度に鬆が入る。	
7	14		甕	胴部内面ケズリ。	山根51
8	14		甕	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	山根53
S S 5					
9	15	20	Ш	高台付。内外面、高台内側赤色塗彩。	山根79
10	15		甕	肩部?。外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	山根83
S S 7		-			
11	16		蹇	胴部内面ケズリ。	山根78
12	16	20	蹇	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ナデ。	野島62
13	16		Ш	内外底面赤色塗彩。	野島53
14	16			内外底面赤色塗彩。	野島54
15	16	40	製塩土器	内外面ナデ、ユビオサエあり。口縁端部やや肥厚。色調外面	野島21
				橙褐色、内面淡橙褐色。焼成やや鬆が入る。	
16	16	40	製塩土器	内外面ナデ。外面ユビオサエあり。口縁端部やや肥厚。色調	野島27
				内外面橙色。	
S S 9					
17	17		坏	口縁部下に1条の凹線状の溝。	N 102
18	17		坏	底面糸切りか?。	N 101
S S 11					
19	19	20	甕	口縁部外面沈線1条確認。胴部外面?。胴部内面ケズリ。	米山79
S S 12					
20	20	20	甕	内外面ナデ。	米山73
21	20		甕	内外面ナデ。外面3条の沈線下に矩形気味の連続刺突。	米山75
22	20	20	底部	内外底面ナデ。上げ底。	米山74
23	20	20	石錘	両側縁に抉りあり。緑色片岩製。520g。	山根87
S I 3					
24	24		坏蓋	外面天井部と体部の境に凹線。口縁端部内面に不明瞭な段。	米山36

遺物	図	図版	器	種	特	徴	実測
番号	番号	番号			•		番号
25	24		高坏		坏底部回転ヘラケズリ。脚	部欠く。坏底部内面仕上げナデ。	米山42
26	24	21	甕		胴部外面ハケ。胴部内面ク	- ズリ。	米山44
27	24	21	甕		胴部外面ハケ。口縁部内面	「ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	米山39
28	24	21	甑		胴部外面ハケ。底部外面強	はいヨコナデ。胴部内面ケズリ。底	米山57
					部内面ヨコナデ。胴部内面	うに煤付着。	
29	24		竈		焚き口部。内面下部ケズリ	」。外面庇の貼付け痕。	米山70
30	24		甕		胴部外面ハケ。胴部内面ク	- ズリ。	米山51
31	24		甕		胴部外面ハケ。胴部内面ク	⁻ ズリ。	米山60
32	24	21	甕		胴部外面?。口縁部内面/	、 ケのちナデ、胴部内面ケズリ。	米山41
33	24		甕		外面?。内面口縁部ナデ、	胴部ケズリ。	米山52
34	24		坏蓋		天井部外面回転ヘラケズリ	」。天井部内面仕上げナデ。	米山47
35	24		坏蓋		土師器の坏蓋。		米山45
SI	1						***
36	27	21	坏身		底部外面中心まで回転へき	ケズリ (A類)。底部内面仕上げ	伊藤40
					ナデ。坏蓋口縁端部が熔着	To	
37	27		坏身		底部外面回転ヘラケズリ。	底部内面仕上げナデ。底部中心を	米山72
					欠く。		
38	27		坏蓋		天井部外面中心まで回転へ	、ラケズリ(A類)。底部内面仕上	米山82
				げナデ。外面天井部と体部の境に凹線状の溝。[3の境に凹線状の溝。口縁端部内面	
					に不明瞭な段。		
39	27	21	踉		体部凹線間に刺突列点文。	外面体部下半以下底部まで中心ま	米山84
					で回転ヘラケズリ(A類)	。底部は平底。	
40	27	21	平瓶		底部外面中心まで回転へラ	ケズリ(A類)。	米山78
41	27	21	甕		胴部内面ケズリ。		米山81
42	27	21	甕		胴部外面粗いハケ。口縁部	3内面ハケのちナデ。胴部内面ケズ	米山80
					リ。口縁部外面煤付着。		
43	27	22	甕		胴部外面?。胴部内面ケス	り。頸部が長く、肩が張る。	米山83
SIS	5						
44	29	22	甕		口縁部〜底部外面ハケ。口	縁部内面ハケのちナデ。胴部内面	S 60
	-				ケズリ。強く外反する口頸	部。寸の詰まった丸味を帯びた胴	
					部。口縁部~底部外面煤气	一着。	
45	29		甕		胴部外面ハケ。胴部〜底部	内面ケズリ。	S 76
SI8	3						
46	32	22	坏蓋		天井部外面中心まで回転へ	ラケズリ(A類)。天井部内面仕	K 45
					上げナデ。天井部と体部の	境に不明瞭な凹線状の溝。	
SIZ	7						,
47	32	22	坏蓋		天井部外面全面ナデ(D類	i)。天井部内面仕上げナデ。天井	山根7
					部外面に板目状工具痕あり	。口縁端部内面に微かな段。	

SI7~11上層

遺物	図	図版	器	種	特	実測
番号	番号	番号				番号
48	32		高坏		坏底部内面仕上げナデ。脚部を欠くが僅かに透かしを確認。	山根8
49	32		甕		胴部内面ケズリ。	山根9
50	32	22	甑		口縁部下外面ハケのち2条の強いヨコナデ。胴部外面ハケ。	S 32
	,				胴部内面ケズリ。胴部外面煤付着。胴部内面有機物付着。	
51	32		支脚		外面ナデ。底部内面ケズリで、深い上げ底。	山根12
52	32	22	磨石		細い長卵形。側縁頂部に敲打痕。デイサイト製。1380g。	山根43
S S I	S S 19					
53	34		坏蓋		外面天井部と体部の境に凹線状の溝により鈍い稜。口縁端部	S 53
					内面に不明瞭な凹線状の溝。天井部を欠く。	
54	34		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	S 52
					上げナデ。外面天井部と体部の境に鈍い稜、その下に2条の	
					凹線状の溝。	·
55	34	22	坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	N23
					ナデ。底部外面に赤色の付着物。	
56	34		坏身		底部を欠くが回転ヘラケズリ確認。	S 55
57	34		竈		焚き口部~口縁部。庇貼付け。内外ナデ。	N58
58	34		坏蓋		天井部と体部の境に不明瞭な凹線状の溝。口縁端部内面に鈍	S 51
					い段。天井部を欠く。	
59	34		坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	S 56
					ナデ。受け部の下側が凹線状にくばむほど極度にヨコナデさ	
					れ、受け部が水平に倒れて、庇状を呈する。	
60	34	-	蓋		かえりを有する蓋。天井部を欠くが、外面に回転ヘラケズリ	S 54
					内面に仕上げナデ確認。	
61	34		甕		肩部付近?。外面平行タタキのちカキメで緑灰色の自然釉か	S 59
					かる。内面同心円タタキ。	
62	34		甑or竈		把手。外面把手部はナデ。把手下はハケ。内面ケズリ。	S 81
S S 1	8					
63	35		高坏		坏体部外面に1条の凹線。坏底部外面回転ヘラケズリ。坏底	S 46
					部内面仕上げナデ。脚部を欠く。	
64	35		(脚台)		台付椀の脚台?。脚部と台部の境に明瞭な稜線。	S 47
65	35		甕		頸~肩部。肩部外面平行タタキのちカキメ。肩部内面同心円	F 22
					99+。	•
66	35		高坏		坏部内外面ナデ。	N57
67	35		高坏		坏底部内面ナデ。	S 78
68	35		甑		内面口縁部下強いヨコナデ。	N49
69	35		甑		胴部外面ハケ。底部外面ヨコナデ。内面?。	S 77
70	35		竈		内外面強く粗いユビ調整。底部端部粗いハケ。	N60
71	35	23	土製品		内外面二次的に還元焼成。内面シボリ。	山根49
72	35	23	鉄製品		器種不明。断面凸レンズ状。	山根44

S I 6

遺物	図	図版	器	種	特	実測
番号	番号	番号				番号
73	37		坏蓋		天井部外面回転ヘラケズリ。天井部内面仕上げナデ。天井部	K 28
					を欠く。外面天井部と体部の境に稜、凹線なし。	
74	37		坏蓋		天井部を欠く。口縁端部内面に細い1条の沈線状の溝。	K30
75	37		坏蓋		天井部を欠く。外面天井部と体部の境に稜。口縁端部内面に	K27
			:		不明瞭な凹線状の溝。	
76	37		甕		胴部内面ケズリ。	S 62
77	37		甕		胴部内面ケズリ。	S 61
78	37		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	K 29
					上げナデ。外面天井部と体部の境の2条の凹線間に鈍い稜。	
					口縁端部内面に1条の沈線状の溝。	
79	37		坏蓋		天井部を欠く。天井部外面回転ヘラケズリ。天井部内面仕上	N 24
					げナデ。外面天井部と体部の境に稜、凹線なし。口縁端部外	
			<u></u>		面を突帯状に肥厚。	
.80	37		坏身		底部を欠く。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水	K37
					平気味に倒れて、庇状を呈する。	
81	37		坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	K34
					ナデ。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平気味	
					に倒れて、庇状を呈する。	
82	37		坏身		底部を欠く。受け部の下側を強くヨコナデする。	K 36
83	37		高坏		坏部を欠く。2段の長方形透かし2方向確認。本来4方向か。	F 25
					上下の透かしの間に2条の凹線。下段の透かしの底辺に沿っ	
					て1条の凹線。脚部内面に別個体が融着。	
84	37		(脚台)	台付椀の脚台?。脚部と台部の境に明瞭な稜線。その直下に	N 35
					1条の凹線状の溝。	
85	37		高坏		受け部を欠く。脚端部外面に1条の沈線。	K31
86	37	23	直口壺		頚部が歪む。口縁端部がやや内傾しすほまる。外面体部下半	K 24
					〜底部にかけて、底部中心まで及ぶ回転ヘラケズリ(A類)。	
					口縁部内面に3条の凹線条の溝。	
87	37		甑		口縁部内外面、胴部内面ナデ。胴部外面?。	S 68
88	37		支脚	-	外面ナデ。刺突孔あり。	S 74

SI6上層

89	38	坏蓋	天井部を欠く。天井部外面回転ヘラケズリ。天井部内面仕上		
			げナデ。外面天井部と体部の境に稜。口縁端部内面に沈線状		
			の溝。		
90	38	坏蓋	下蓋 天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕		
			上げナデ。外面天井部と体部の境に鈍い稜。		
91	38	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	N 25	
			上げナデ。外面天井部と体部の境に稜、凹線なし。口縁端部		
	-		内面に段なく、鈍い稜線下は端部に向かって先細りする。		

遺物	図	図版	器種	特	実測
番号	番号	番号			番号
92	38		坏身	底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ(B類)。底部	N29
				内面仕上げナデで、段差がついてくぼむ。受け部の下側が強	
				くヨコナデされ、受け部が水平気味に短く摘み出され、庇状	
				を呈する。	
93	38		坏身	底部を欠く。	N26
94	38		有蓋高坏	坏底部外面回転ヘラケズリ。坏底部内面仕上げナデ。脚部透	N34
				かしは?。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平	
				気味に倒れて、庇状を呈する。	
95	38		高坏	脚部を欠く。坏底部内面仕上げナデ。脚部に三角形の透かし	N36
				1ヶ所に確認。	
96	38		高坏	坏底部外面回転ヘラケズリ。坏底部内面?。脚部に透かし確	N41
				認されず。	
97	38		璲	口頸部、底部を欠く。体部凹線間に刺突列点文。外面体部下	F7
				半に回転ヘラケズリ。穿孔の確認できない部位。	
98	98 38 壺		壺	口頸部~体部上半を欠く。体部下半~底部まで、底部中心ま	N38
				で回転ヘラケズリ(A類)。球形の胴部。	
99	38		鉢	内外面ナデ。底部平底で、やや高台気味。内面体部下半~底	N42
				部にかけて淡く黄色ずみ、その範囲内の触感が滑らか。使用	
				痕か。	
100	38		甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	S 66
101	38		甕	胴部内面ケズリ。胴部外面に煤付着。	S 63
102	38	23	甑	口縁部外面ナデ。胴部外面ハケ。底部外面ナデ。口縁部内面	N22
				ナデ。胴部内面ケズリ。底部内面ナデ。 1 対の把手が付き、	
				底部に穿孔あり。胴部輪切りの断面形は楕円形。	
103	38		電	内外面粗くユビ調整。底部端部棒状工具により刻みを施す。	S 75
SS2	0		p-1-30000		
104	39		坏身	底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ(B類)。底部	K32
				内面仕上げナデ。受け部の下側を強くヨコナデ。	
105	39	23	坏身	底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ(B類)。底部	F9
				内面仕上げナデ。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部	
				がやや水平気味。	
106	39	23	坏身	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	F21
				ナデ。受け部の下側がやや強くヨコナデされる。	
107	39		高坏	坏部、脚部下半を欠く。2段の長方形透かしを2方向に確認	F 24
				本来3方向か?。上下の透かしの間に2条の凹線。	
108	39		高坏	坏部を欠く。三角形の透かし2方向に確認。透かし上端に1	K40
				条の沈線。	
109	39		(口縁部)	遠の口縁部?。内外面ナデ。	F13
110	39		壺	頸部。内外面ナデだが胴部寄り内面にシボリを僅かに確認。	K38

遺物	図	図版	器種	特	実測
番号	番号	番号			番号
111	39		(底部)	壺の底部?。僅かに遺存する胴部下半にカキメ。底部外面不	K41
				整方向にケズリ。	
112	39		甕	胴部外面?。胴部内面同心円タタキ。口縁部内外面に暗緑灰	N45
				色の自然釉がかかる。	
113	39		蹇	底部。外面平行タタキのちカキメ。内面同心円タタキ。外面	N 53
				坏が熔着し、緑黄灰色の自然釉の滴りあり。	
114	39		甕 .!	胴部内面ケズリ。	F 38
115	39		甕	胴部内面ケズリ。	F 33
116	39		甕	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	F 28
117	39		甕	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	F 30
118	39		甕	胴部内面ケズリ。	F37
119	39		甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	S 83
120	39		甑	胴部外面ハケ。底部外面ナデ。胴部内面ケズリ。底部内面ナデ。	N61
121	39		支脚	支え部。ユビ調整。	S 87
122	39		支脚	外面ユビ調整。底部内面ケズリ。上げ底。	F 39
123	39		支脚	底部。外面ユビ調整。底面指頭の押圧痕。平底。	F41
S S 2	1				
124	41	23	短頸壺	体部下半に凹線状の溝、以下回転ヘラケズリ。	N21
S S 2	1上層				
125	41		坏蓋	天井部外面回転ヘラケズリ。天井部を欠く。	S 33
126	41		坏身	受け部の下側がやや強くヨコナデされ、受け部が水平気味に	F 27
				短く摘み出される。底部を欠く。	
127	41	23	高坏	坏部を欠く。2段の長方形透かし2方向。下段の透かしの上	K21
				下両端に各1条の凹線。外面脚裾部に1条の凹線。内外面に	
				暗緑灰色の自然釉かかる。	
128	41		竈or甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。胴部内外面に煤付着。	F 50
129	41		甕	胴部外面ハケ、煤付着。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面	S 34
				ケズリ。	
130	41		甕	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	S 35
131	41		電	焚き口部。内外面ナデ。庇貼付け。	S 85
132	41		 電	焚き口部。内外面ナデ。庇貼付け。庇の先端に煤付着。	S 84
133	41	24		焚き口部。外面ハケ。内面ケズリ。	S 86
134	42		甕	口頸部。口縁突帯部に1条の凹線。口縁端部内面を鋭く摘み	F5
				上げる。口縁部内面に別個体の熔着。内外面ともに灰色の自	
10-			The state of the s	然釉かかる。	
135	42	24	甕	胴部外面平行タタキのち肩部〜胴部下半までカキメ。胴部内	K 25
				面同心円タタキ。	
136	42		甕	胴部外面平行タタキで、暗緑色の自然釉かかる。胴部内面同	S 37
				心円タタキで、胴部下半付近で部分的に弱いナデ消し。	

S · S 35

S S 3 遺物	図	図版	器	 種	特 徴		 実測
番号	番号	番号				1	番号
137	45	24	坏		底部糸切り。	Y 1	18
138	45		坏		底部糸切り。	Y1	19
139	45		坏		底部糸切り。	Y2	21
140	45		ш?		柱状高台。底部糸切り。糸を掛け損ねて高台を損傷。	Y2	20
S S 32							-
141	46		坏蓋		天井部を欠く。	K6	59
142	46		坏蓋		天井部を欠く。	F5	55
143	46		高坏		脚部の一部。長方形透かし2方向に確認。本来4方向	可か?。 K7	70
S I 1	2	·			<u> </u>		
144	47	24	坏身		底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ(B類)	。底部 F4	17
	ì				 内面仕上げナデ。		
145	47		坏身		底部を欠く。受け部の下側がやや強くヨコナデされる	5。 F5	51
146			高坏		脚部。2段の長方形透かしを2方向に確認。本来3力	方向か。 SS	92
	47				上下の透かしの間に2条の凹線。		
147	47		(口縁部	5)	壺?。	F	52
148	47	i	壺?		球形に近い胴部。肩部内面ユビオサエ。	K7	72
149	47		竈		胴~底部。外面ハケ。庇の貼付け痕。内面工具によるナ	デ調整。 K7	74
150	47		坏蓋	_	天井部を欠く。かえりをもつ。	SS	90.
151	47		坏身		天井部を欠く。底部外面回転ヘラケズリ。受け部のフ	下側が強 S 8	39
					くヨコナデされ、受け部がやや水平気味。		
152	47		坏身		底部を欠く。底部外面回転ヘラケズリ。底部内面仕上	げナデ。 F4	19
153	47		壺?		横瓶の口頸部?。	K7	71
154	47		高坏		脚裾部。	F5	53
155	47		甕		胴部内面ケズリ。	S8	38
156	47		甕		胴部内面ケズリ。	F4	12
157	47		甑		胴部内面ケズリ。把手あり。	F5	54
158	47		竈		底部。内面上部ケズリ。内面下部ユビによる調整。	F4	45
SS3	33		-				
159	48		甕		口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	K 5	50
S S 2	23						
160	50		壺?		肩部。外面にカキメ。	K	58
161	50		璲		胴部上半部、底部。胴部下半~底部中心まで回転へき	ラケズリ N8	3
					(A類)。底部に3本の線による三角形状のヘラ記号	1 7 o	
162	50	24	甑		外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ	り。 米に	Ц123
S S 2	25						
163	51		甑		胴部内面ハケ。	山村	根22
164	51		椀?		外面煤付着。内面ケズリ。	山	根25
165	51		坏蓋		天井部を欠く。	山	根34
166	51		坏身		底部を欠く。口唇部不明瞭な面取り。		根27

遺物	図	図版	——————— 器 種	特	実測
番号	番号	番号			番号
167	51		坏身	天井部を欠く。受け部の下側を強くヨコナデ。	山根28
168	51	24	壺	肩部外面カキメ。	山根37
169	51		壺or鉢	底部外面回転ヘラケズリ。底部内面仕上げナデ。	山根36
170	51		壺or鉢	胴部下半外面カキメ。底部外面回転ヘラケズリ。底部内面仕	山根35
				上げナデ。	
171	51	24	甕	胴部内面ケズリ。	山根26
172	51		甑 .	外面ハケ。内面ヨコハケ。	
173	51		高坏	坏部内面、脚部外面赤色塗彩。	山根38
174	51	24	坏身	土師質。	山根31
S S 2	6				
175	52	25	小型丸底壺	胴部内面ケズリ。	伊藤29
176	52		甕	胴部内面ケズリ。	伊藤27
177	52	25	鉢	内外面ミガキ。	伊藤14
178	52		高坏	脚部を欠く。	伊藤30
179	52		高坏	脚部を欠く。	伊藤16
180	52	25	高坏	脚部。外面縦方向に面取り。内面シボリ。	伊藤19
181	52	25	高坏	脚部を欠く。内外面ナデ。脚部との接合は円盤充填式。	伊藤17
182	52	25	高坏	脚部との接合は円盤充填式。	伊藤15
183	52	25	砥石	両面と片側面が砥面か?。アプライト製。335g。	伊藤32
S S 2	6上層				
184	53	25	坏身	底部を欠く。	伊藤22
185	53		坏身	底部を欠く。	伊藤21
186	53	25	高坏	脚部。2方向に透かし。本来3方向か。	伊藤20
187	53		甕	胴部内面ケズリ?。	伊藤23
188	53		蹇	胴部外面ハケ。煤付着。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面	伊藤18
				ケズリ。	
189	53		蹇	胴部内面ケズリ?。	伊藤25
190	53	26	蹇	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	伊藤24
191	53		電	外面ハケ。庇貼付け。内面ケズリ。	伊藤31
192	53	26	棒状土製品	両側から半月形の連続刺突。	伊藤28
SS2	27	·			
193	54		甕	口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	K48
194	54	26	壺	胴部外面煤付着。胴部内面ケズリ。	K 62
195	54		高坏	坏底部~脚上半。	K57
196	54		高坏	脚部を欠く。	K46
197	54		高坏or椀	内面ミガキ。	K47
198	54		高坏	坏部。	K 63
199	54		高坏	脚部。	K52
200	54		高坏	脚部。外面ハケ。	K56

S S 24

5 5 2		INT III□	00	T-F-	ni-i-	-t- \1711
遺物	図	図版	器	種	特 数	実測
番号	番号	番号	VT 0			番号
201	54		甑?		胴部内面ケズリ。	K 59
S S 2			1			
202	55		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	N2
					上げナデ。外面天井部と体部の境に凹線状の溝により鈍い稜。	
					口縁端部内面に不明瞭な段。	
203	55		坏身		底部を欠く。	S 10
204	55		坏蓋		天井部を欠く。かえりをもつ。	S 13
205	55	26	高坏		長方形の2段透かし3方向、その間に三角形の透かし2方向	2
					確認。本来3方向か?。上下の長方形透かしの間に2条の凹	
					線。下段の長方形透かしと三角形透かしにかかる1条の凹線。	
					脚裾部に2条の凹線。脚部内外面に薄い緑灰色の自然釉。脚	
					部内面にガラス質化した付着物。	
206	55		高坏		坏部内面仕上げナデ。脚部三角形の透かし1方向、貫通しな	1
					い線状の透かし1方向。	
207	55		椀		内外面赤色塗彩。内面ケズリ。	S 21
208	55		甕		胴部外面平行タタキ。胴部内面同心円タタキ。	N7
209	55		坏蓋		天井部を欠く。	K6
210	55		坏蓋		天井部外面全面ナデ(D類)。天井部内面仕上げナデ。	K10-
211	55		坏身		底部を欠く。	S 4
212	55		坏身		底部を欠く。	S 2
213	55		坏身		受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平気味。	K2
214	55		坏身		底部外面中心、工具による粗いナデ、その周囲ナデ(D類)。	S 1
					底部内面仕上げナデ。全体に大きく焼け歪む。	
215	55		坏身		底部外面全面ナデ(D類)。底部内面仕上げナデ。体部~底	N1
					部外面にヘラ記号。	
216	55		坏身		受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平気味。	K1
217	55		高坏		坏部口縁部。	S 5
218	55		高坏		坏部口縁部。	S8
219	55		高坏		外面、1条の凹線と1条の幅広な凹線状の溝により稜をなす。	S 9
220	55		高坏	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	脚部。透かしを1方向に確認。	K7
221	55		高坏		坏部底部内面仕上げナデ。三角形透かし2方向。	S 7
222	55		壺		頸部。	K8
223	55		甕		胴部内面ケズリ。	S 14
224	55		甕		胴部内面ケズリ。	S 16
225	55		甕		口縁~胴部外面ハケ。口縁端部下ヨコナデ。胴部内面ケズリ。	K17
226	55		甕		胴部内面ケズリ。	N9
227	55		甕		胴部内面ケズリ。	N10
228	55		甕		胴部内面ケズリ。	N14
229	55		鉢		口縁部、底部欠く。	S 23
		L				_~_~

遺物	図	図版	器 種	特	実測
番号	番号	番号	HI		番号
230	55		籠	庇部分。ケズリ。	S 24
231	55		甑	外面ハケ。内面ケズリ。	N15
232	55		支脚	ユビによる調整。	N16
S S 3	1			, 3, 2, 4, 12, 5	1110
233	56	26	獲	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	野島12
234	56	26	手捏ね土器	内外面ユビによる整形。口縁部波状にうねる。	野島29
235	56	26	坏身'	底部外面全面ナデ(D類)。底部内面仕上げナデ。	伊藤7
236	56		甕	胴部外面平行タタキ。胴部内面同心円タタキ。	K5
237	56		蹇	胴部外面煤付着。胴部内面ケズリ。	伊藤9
238	56	26	支脚	ユビによる整形。底部充填。	米山22
239	56		竈	内外面ユビによる強く粗いナデ。底部棒状工具により刻みを	野島16
				施す。	
240	56	27	坏蓋	天井部外面全面ナデ(D類)。ヘラ記号あり。天井部内面仕	伊藤8
				上げナデ。	
241	56	27	坏蓋	天井部外面全面ナデ(D類)。天井部内面仕上げナデ。	野島11
242	56	27	坏蓋	天井部外面全面ナデ(D類)。天井部内面仕上げナデ。	野島9
243	56		坏身	底部外面全面ナデ(D類)。底部内面仕上げナデ。	野島10
244	56		(口縁部)	횮?。外面稜の上位に凹線状の溝。内面口縁端部下に凹線状	野島8
				の溝。	
245	56		甕	外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	野島15
246	56		甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	野島14
247	56		甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ?。	野島13
248	56		甕	胴部内面ケズリ。	.N13
249	56		骶	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	伊藤13
250	56		觝	把手。内面ケズリ。	伊藤12
251	56		甑	外面口縁部下を強くヨコナデ。胴部内面ケズリ。	米山26
252	56	27	甑	胴部外面ナデ。煤付着。胴部内面ケズリ。	伊藤6
253	56		竈	焚き口部。外面ナデ。庇貼付け痕。内面上位ナデ、下位ケズリ。	野島17
254	56		支脚	上げ底の底部。外面ナデ。内面ケズリ。底面ナデ。	伊藤10
255	56	27	手捏ね土器	内外ユビ整形。口縁部波状気味にうねる。	野島23
S S 36	5			•	
256	58	27	坏身	底部外面ナデ(D類)。板目痕。底部内面仕上げナデ。	山根2
257	58		坏身	底部を欠く。	山根1
258	58	27	甕?	底部間近。外面カキメ。内面同心円タタキ。	山根3
S S 37					
259	58		甕	口縁部外面煤付着。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズ	山根4
				リ?。	
S S 38					
260	58		甕	胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	山根5

早里14号墳

遺物	図	図版	器	——— 種	特	徴	実測
番号	番号	番号					番号
261	64		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケ	ズリ(A類)。天井部内面仕	K78
					上げナデ。外面天井部と体部の	境に2条の凹線状の溝により	
					鈍い稜。		
262	64	28	坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケ	ズリ(A類)。天井部内面仕	N 64
					上げナデ。外面天井部と体部の	境に鈍い稜。口縁端部内面に	
				微かに1条の凹線状の溝。			
263	64		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケ	ズリ(A類)。天井部内面仕	S 99
					上げナデ。外面天井部と体部の	境に稜。口縁端部が内側にや	
					や屈曲。		
264	64		坏蓋		天井部外面ほぼ中心まで回転へ	ラケズリ(A類)。天井部内	K80
					面仕上げナデ。外面天井部と体	部の境に鈍い稜。	
265	64	28	坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケ	ズリ(A類)。天井部内面仕上	K76
					げナデ。外面天井部と体部の境	に1条の凹線が部分的に走る	
					が全周せず稜なし。口縁端部内面	面に微かに1条の凹線状の溝。	
266	64	28	坏蓋		天井部外面中心を残して周囲を	回転ヘラケズリ(B類)。天井	K77
					部内面仕上げナデ。外面天井部	と体部の境に2条の凹線状の	
					溝により極めて鈍い稜。口縁端	部内面に鈍い凹線状の溝。	
267	64	28	坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズ	リ(A類)。底部内面仕上げ	K81
					ナデ。受け部の下側に強いヨコ	ナデ。	
268	64	28	坏身		底部外面ほぼ中心まで回転ヘラ	ケズリ(A類)。底部内面仕	N 65
				-	上げナデ。受け部が水平気味に	倒れて庇状を呈する。	
269	64		坏身		底部外面ほぼ中心まで回転ヘラ	ケズリ(A類)。底部内面仕	S 100
					上げナデ。受け部が水平気味に	倒れて庇状を呈する。	
270	64		坏身		底部外面中心を残して周囲を回	転ヘラケズリ(B類)。中心	S 101
					に板目状工具痕。底部内面仕上	げナデ。	
271	64		坏身		底部外面中心を残して周囲を回	転ヘラケズリ(B類)。底部	N 66
					内面仕上げナデ。受け部が水平	気味に倒れて庇状を呈する。	
272	64	28	坏身		底部外面中心を残して周囲を回	転ヘラケズリ(B類)。底部	S 104
					内面仕上げナデ。受け部が水平	気味に倒れて庇状を呈する。	
273	64		坏身		底部を欠く。受け部の下側を強	くヨコナデ。	S 98
274	64		坏身	· · · · ·	底部を欠く。受け部の下側を強		S 97
275	64		坏身		底部を欠く。受け部の下側を強		S 94
276	64	28	坏蓋		天井部外面全面ナデ(D類)。	天井部内面仕上げナデ。	K75
277	64	28	坏身	坏身 底部外面全面ナデ(D類)。底部内面仕上げナデ。		部内面仕上げナデ。	K 79
278	64	29	璲		頸部に波状文。体部上半に2条		S 111
					底部まで回転ヘラケズリ。中心	を残す(B類)。中心部に板	
					目痕。		
279	64	29	提瓶		肩部に円形浮文。頸部に2条の	凹線。体部外面ヘラケズリ後	N 67
					ナデ。		

遺物	図	図版	器 種	特	実測			
番号	番号	番号	m 1 2.		番号			
280	64	- III	(口縁部)	 壺の口縁部?。	S 96			
281	64		椀	内外面赤色塗彩。	K 103			
早里16号墳周溝内								
282	65		坏身	底部を欠く。口縁端部に段をなす。受け部にくぼみなく、平	K 85			
			,	坦面をなす。				
283	65		(口縁部)		S 95			
284	65		(脚台部)	内面ケズリ。	F71			
285	65		椀	内外面ナデ。底部外面工具痕。	K 107			
早里1	4号墳岛	坠 土中						
286	66		甕	複合口縁。内外面ナデ。	F 56			
287	66		甕	胴部片。外面平行タタキ。内面ナデ。	N74			
288	66		甕	胴部片。外面平行タタキ。内面タタキをナデ消し。	N95			
早里1	4、15 5	き墳周辺	<u>n</u>					
289	67		坏蓋	天井部を欠く。外面天井部と体部の境に稜。	N76			
290	67	29	坏身	底部外面中心まで丁寧な回転ヘラケズリ(A類)。底部内面	N72			
				仕上げナデ。口縁端部に溝。受け部にくぼみなく、平坦面を				
			• •	なす。				
291	67		(頸~肩部)	壶?。	N80			
292	67		短頸壺	内外面ナデ。	N71			
293	67		壺	底部中心まで回転ヘラケズリ(A類)。	N92			
294	67		横瓶	胴部片。外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	K88			
295	67		壺	口頸部。内外面ナデ。	F 69			
296	67		皿or高坏	外面ケズリ。内面ナデ。	K116			
297	67		甕	胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。	S 120			
				胴部外面煤付着。				
298	67	29	銅製品	鞘尻の金具か?。	山根111			
S D 4	1							
299	68		甕	口縁部~胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。口縁部外面煤付着。	S 121			
早里1	5号墳							
300	72	29	円筒埴輪	朝顔形。外面タテハケ。断面台形の突帯。内面ナデ。	K 124			
301	72	29	円筒埴輪	朝顔形。内外面ナデ。	K 123			
302	72		円筒埴輪	外面タテハケのち口縁部下ヨコナデ。内面ヨコナデ。	K 121			
303	72		円筒埴輪	外面ナデ。内面丁寧なナデ。	K118			
304	72	29	円筒埴輪	外面調整不明。断面M字の突帯。中段に円形透かし。内面粗	S 112			
				いタテハケ。				
305	72	29	円筒埴輪	内外面ナデ。断面M字の突帯。中段に円形の透かし1対。	S 113			
306	72		円筒埴輪	外面タテハケ。断面台形の突帯。内面調整不明。	K 128			
307	72		円筒埴輪	外面タテハケ。断面M字の突帯。内面縦方向のケズリ。	K 125			
308	72		円筒埴輪	内外面ナデ。断面M字の突帯。円形の透かし。	S 131			

遺物	図	図版	器種	特 徴	実測
番号	番号	番号			番号
309	72		円筒埴輪	外面タテハケのちナデ。断面M字の突帯。円形の透かし。内	S 115
				面ナデ。	
310	72		円筒埴輪	内外面ナデ。	K119
311	72		円筒埴輪	内外面調整不明。断面M字の突帯。底部内面にユビオサエ。	S 114
SXI	1				<u> </u>
312	74	29	馬具・轡	1対の瓢形素環鏡板と、それぞれに 銜 が連結。	米山86
S X 4	1				
313	77		高坏	内外面ミガキ。脚部との接合は円盤充填式。	山根94
S X 6	ŝ				
314	80		器台	受け部。外面ナデ。内面ミガキ。	S 116
315	80		(脚台)	外面ナデ。内面シボリ。	K111
福成与	早里横ヶ	墓力			
316	88	30	蹇	頸部外面波状文、凹線。胴部外面平行タタキ。胴部内面同心	米山35
				円タタキ。	
317	88	30	甕	頸部外面波状文、凹線。胴部外面平行タタキ。胴部内面同心	山根84
				円タタキ。	
318	89	30	甕	頸部外面波状文、凹線。胴部外面平行タタキ。胴部内面同心	山根85
				円タタキ。意図的に破砕したような破片あり。	
319	89	30	簉	胴部外面平行タタキ。胴部内面同心円タタキ。緑灰色の自然	米山87
				釉かかる。	
320	90	31	馬具・飾金具	正方形。鉄地金銅張。4鋲。	山根48
321	90	31	馬具・飾金具	正方形。鉄地金銅張。4鋲。	山根98
322	90	31	馬具・飾金具	菱形。鉄地金銅張。 4 鋲。	山根97
323	90	31	馬具・雲珠	飾鋲と花形座。鉄製。	山根100
324	90	31	馬具・雲珠	2 鋲の隅切方形脚。鉄製。	山根95
325	90	31	馬具・雲珠	2 鋲の隅切方形脚。鉄地金張。	山根96
326	90	31	馬具・雲珠	2 鋲の隅切方形脚。鉄地金張。	山根99
327	90	31	馬具・鉸具	鉄製。	山根102
328	90	31	鉄製品	鉄製穂摘み具か?。 	山根101
329	90	30	甕	胴〜底部。胴部外面平行タタキ。底部外面カキメ。胴部内面	米山84
				同心円タタキ。	
330	90	30	壺	肩部外面に3条の凹線。外面胴部下半〜底部中心まで回転へ	米山76
				ラケズリ(A類)。底部外面「×」のヘラ記号。	
331	90		甕	口縁部。	伊藤43
332	90		甕	胴部外面平行タタキ。胴部内面同心円タタキ。	伊藤44
333	90		甕	胴部内面ケズリ。	山根64
334	90		甕	内外面ナデ。	山根63
335	90		甕	胴部内面ケズリ。	山根65
336	90		甕	内外面ナデ。	山根66

遺物	図	図版	器		特	徴	実測		
番号	番号	番号				,,,,	番号		
337	91	32	坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ	——————————— (A類)。天井部内面仕	伊藤35		
					上げナデ。外面天井部と体部の境に	鈍い稜。			
338	91		坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ		 伊藤37		
339	91	32	坏蓋		天井部外面中心まで回転ヘラケズリ	(A類)。天井部内面仕	山根46		
					上げナデ。外面天井部と体部の境に	凹線状の溝。口縁端部内			
			, 1		面に沈線状の溝。				
340	91	32	坏蓋		天井部外面中心を残して周囲を回転	ヘラケズリ(B類)。天	野島31		
		36			井部内面仕上げナデ。外面天井部と	体部の境に2条の凹線状			
					の溝により稜をなす。				
341	91	32	坏蓋		天井部外面に螺旋状の大雑把な回転	 ヘラケズリ(C類)。天	伊藤39		
		36			井部内面仕上げナデ。外面天井部と	体部の境に2条の凹線状			
					の溝により稜をなす。口縁端部内面	に不明瞭な段。			
342	91	32	坏蓋		天井部外面に螺旋状の大雑把な回転	ヘラケズリ(C類)。天井	伊藤38		
					部内面仕上げナデ。外面天井部と体部	『の境に鈍い稜。口縁端部			
					内面に段。				
343	91		坏蓋		天井部外面に螺旋状の大雑把なケズ	リ(C類)。天井部内面仕	伊藤36		
					上げナデ。外面天井部と体部の境に針	並い稜。口縁端部外面に板			
					状工具痕がめぐる。				
344	91	32	坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	野島30		
					ナデ。受け部の下側が強くヨコナデ	され、受け部が水平気味			
					に倒れて庇状を呈する。				
345	91	32	坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	野島35		
					ナデ。受け部の下側が強くヨコナデ	され、受け部が水平気味	,		
					に倒れる。				
346	91	32	坏身		底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕上	伊藤33		
				244	げナデ。受け部の下側が強くヨコナ	デされる。			
347	91	32	坏身		底部外面中心を残して周囲を回転へ	ラケズリ(B類)。天井	米山49		
					部内面仕上げナデ。受け部の下側が	強くヨコナデされる。			
348	91	32	坏身		底部外面中心を残して周囲を回転へ	ラケズリ(B類)。天井	野島32		
					部内面仕上げナデ。受け部の下側が	強くヨコナデされ、受け			
				·	部水平気味に倒れる。				
349	91	33	高坏		坏部底部外面回転ヘラケズリ。坏部	底部内面仕上げナデ。三	山根47		
					角形透かし2方向。				
350	91	33	高坏		坏部底部外面回転ヘラケズリ。 坏部	底部内面仕上げナデ。三	山根50		
					角形透かし2方向。				
351	91	33	高坏		坏底部内面にアカメガシワの葉の押具	王。三角形透かし2方向。	野島34		
352	91	31	提瓶		両肩に把手1対。体部外面カキメ、	裏面平行タタキをナデケ	伊藤45		
		•			シ。体部内面回転ナデ、対面同心円	タタキ。			

遺物	図	図版	器種	特	実測
番号	番号	番号	AL AL W/ 1 111		番号
353	91	31	鉄鉢形土器	外面体部上半タテハケ。体部下半ヨコハケ。上下半の境付近	│伊藤14 │
				にユビオサエ。口縁部外面ハケナデケシ。口縁端部外面に凹	
05.4	0.1	0.1	キ ナ	線状の溝。口縁端部面取り。体部内面ミガキ。	A LITTO
354	91	31	高坏	坏部内面ミガキ。脚部外面ミガキ。脚部内面裾部ミガキ。外	山根72
0.55	0.1	0.1	Litte More	面、坏部内面、脚部内面裾部赤色塗彩。	Matter
355	91	31	横瓶	胴部外面平行タタキ。両側カキメ。胴部内面同心円タタキ。	伊藤26
356	91	34	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	米山37
				上げナデ。天井部と体部の境に鈍い稜。口縁端部内面に凹線 	
				状の溝。	
357	91	34	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	米山38
				上げナデ。天井部と体部の境に鈍い稜。天井部外面に赤色物	
				質付着。	
358	91	34	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	米山36
		: :		上げナデ。天井部と体部の境に鈍い稜。口縁端部内面に凹線	
				状の溝。	
359	91	34	坏身	底部外面中心まで回転ヘラケズリ (A類)。底部内面仕上げ	山根45
				ナデ。	
360	91	34	坏身	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	野島38
				ナデ。	
361	91	34	坏身	底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ (B類)。底部	米山50
				内面仕上げナデ。	
362	91	34	坏身	底部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ(B類)。中心	伊藤34
				に板状工具痕。底部内面仕上げナデ。受け部の下側が強くヨ	
				コナデされ、受け部が水平気味に倒れ、庇状を呈する。	
363	92	34	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	野島37
				上げナデ。天井部と体部の境に鈍い稜。	
364	92	35	坏蓋	天井部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。天井部内面仕	野島33
				上げナデ。天井部と体部の境に鈍い稜。口縁端部内面に凹線	
				状の溝。	
365	92	35	坏身	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	野島36
				ナデ。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平気味	
				に倒れ、庇状を呈する。	
366	92	35	坏蓋	天井部外面中心を残して周囲を回転ヘラケズリ (B類)。天	米山67
				井部内面仕上げナデ。外面天井部と体部の境に凹線によって	
				 鈍い稜をなす。赤色物質付着。	ľ
367	92	35	坏身	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。底部内面仕上げ	米山66
				 ナデ。受け部の下側が強くヨコナデされ、受け部が水平気味	
i				に倒れ、庇状を呈する。	
368	92	35	 坏蓋	天井部外面全面ナデ (D類)。天井部内面仕上げナデ。	米山65
			_ ·	1 - 22/ 0 / 27/ Hell 1 http:///	1 , , ,,,,,,,,

遺物	図	図版	器 種	特 数	実測
番号	番号	番号		,	番号
369	92	3536	坏身	│ │底部外面全面ナデ(D類)。底部内面仕上げナデ。	米山68
370	92	35	直口壺	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。	米山64
371	92	35	直口壺	底部外面中心まで回転ヘラケズリ(A類)。頸部に4状の凹線。	米山63
372	92	36	鉄鏃	長頸鑿箭式。断面片丸。逆刺無し。紐巻痕あり。	野島70
373	92	36	鉄鏃	長頸鑿箭式。断面片丸。逆刺無し。紐巻痕あり。木質遺存。	山根112
					野島73
374	92	36	鉄鏃 '	長頸鑿箭式。断面片丸。逆刺無し。	野島69
375	92	36	鉄鏃	長頸鑿箭式。断面片丸。逆刺無し。箆被あり?。	野島71
376	92	36	刀子	茎に木質遺存。	山根104
377	92	36	刀子	関部に鎺が遺存。茎に木質遺存。	山根103
378	92	36	耳環	突き合せ密着。腐食。	野島68
379	92	36	耳環	突き合せ離れる。鍍銀。	野島66
380	92	36	耳環	突き合せ密着。腐食。	野島67
381	92	36	馬具・轡	長方形立聞素環鏡板付轡。 後は2連式。	伊藤46
382	92	36	小玉	ガラス小玉。濃青色。	山根110
383	93	37	大刀	全長95cm。倒卵形の鍔、鞘尻の金具遺存。切先から茎まで木	伊藤42
				質遺存。刀身部木質を覆う皮膜状の物質。	
SX	7				
384	94	38	Ш	手捏ね成形。内面ヨコナデ。外面ユビオサエ。橙灰褐色。	S 109
SXS	9				
385-	1 9	6	銅銭	皇宋通寶。北宋。初鋳1039年。裏面無銘。径2.39cm。	山根138
385-	2 9	6	銅銭	皇宋通寶。北宋。初鋳1039年。裏面無銘。径2.48cm。	山根140
385-	3 9	6	銅銭	元豊通寶。北宋。初鋳1078年。裏面無銘。径2.40cm。	山根137
385-	4 9	6	銅銭	紹聖元寶。北宋。初鋳1094年。裏面無銘。径2.31cm。	山根139
385-	5 9	6	銅銭	至道元寶。北宋。初鋳995年。裏面無銘。径2.45cm。	山根125
385-	6 9	6	銅銭	皇宋通寶。北宋。初鋳1039年。裏面無銘。径2.45cm。	山根125
S X 1	0				
386	99		Ш	ロクロ成形。底部外面板目。内面ヨコナデ。橙灰褐色。	S 108
S X1	7				
387	101		五輪塔	水輪。平面径30.8cm。高さ19cm。18.5kg。角閃石安山岩製。	山根121
388	101		五輪塔	水輪。平面径28cm。高さ20.4cm。19kg。角閃石安山岩製。	山根120
389	101		五輪塔	地輪。平面幅32.8cm。高さ21.5cm。39.5kg。角閃石安山岩製。	山根123
S X1	.6				
390	103		五輪塔	火輪。平面幅35.4cm。高さ17cm。22kg。角閃石安山岩製。	山根118
391-	1 10	3	銅銭	元豊通寶。北宋。初鋳1078年。裏面不明。径2.45cm。	山根124
391-	2 10	3	銅銭	□□元寶。裏面不明。径2.33cm。	山根124
391-	3 10	3	銅銭	開□通□。開元通寶か?(唐·初鋳621年)。裏面無銘。径2.47cm。	山根124
391-	4 10	3	銅銭	景徳元寶。北宋。初鋳1044年。裏面不明。径2.41cm。	山根127
391-	5 10	3	銅銭	銘不明。裏面不明。径2.46cm。裏面に布付着。	山根127

遺物	図	図版	器種	特	実測		
番号	番号	番号			番号		
391-	6 10	3	銅銭	祥符通寶。北宋。初鋳1009年。裏面無銘。径2.48cm。裏面に	山根126		
				布付着。			
S X 1	8		•		J		
392-	1 10	5	銅銭	祥符元寶。北宋。初鋳1008年。裏面無銘。径2.48cm。	山根135		
392-	2 10	5	銅銭	祥符□寶。裏面無銘。径2.50cm。	山根136		
392-	3 10	5	銅銭	元祐通寶。北宋。初鋳1086年。裏面無銘。径2.44cm。	山根132		
392-	4 10	5	銅銭	熈寧元寶。北宋。初鋳1068年。裏面無銘。径2.34cm。	山根133		
392-	5 10	5	銅銭	元祐通寶。北宋。初鋳1086年。裏面無銘。径2.47cm。	山根134		
S X1	9						
393-	1 10	7	銅銭	淳化元寶。北宋。初鋳990年。裏面無銘。径2.43cm。	山根129		
393-	2 10	7	銅銭	元豊通寶。北宋。初鋳1078年。裏面無銘。径2.34cm。	山根128		
393-	3 10	7	銅銭	元豊通寶。北宋。初鋳1078年。裏面無銘。径2.33cm。	山根131		
393-	4 10	7	銅銭	大観通寶。北宋。初鋳1107年。裏面無銘。径2.50cm。	山根130		
S X 2	0						
394	108	38	坏	ロクロ成形。底部外面静止糸切り。体部内外面ヨコナデ。橙	K83		
				褐色。			
395	108	38	小皿	ロクロ成形。底部外面静止糸切り。体部内外面ヨコナデ。橙	K84		
				褐色。			
S X2	6			,			
396	109		小皿	底部外面糸切り。高台気味の底部。橙褐色。	S 106		
S X3	3						
397	109		五輪塔	空風輪。空輪部平面径16.5cm。風輪部平面径16.5cm。高さ	山根105		
				24.3cm。5.3kg。凝灰岩製。			
S K1		<u> </u>	F				
398	113	38	壺	頸部外面ハケ。肩部外面ハケのちミガキ。頸部と肩部の境に	山根70		
				2条の貼付け突帯。頸部内面ミガキ。肩部内面ハケ。			
399	113	38	(底部)	平底。外面ミガキ。内面ナデ。底部外面ナデ。底部内面ユビ	野島41		
				オサエ。			
SDS	5						
400	114		甕	内外面ナデ。口唇部に斜行するキザミ。外面に6条の櫛描平	山根41		
			Was a second	行線。			
401	114		甕	内外面ナデ。口唇部にキザミ。外面に櫛描平行線4条確認。	山根40		
402	114		甕	内外面ミガキ。	野島24		
403	114		(底部)	平底。内外面ミガキ。底部外面ナデ、布目痕あり。	山根58		
404	114		(底部)	平底。外面ミガキ。内面ナデ。底部外面ナデ。	野島46		
405	114		(底部)	平底。内外面ミガキ。底部外面ミガキ。底部内面爪痕あり。	山根59		
	S K13						
406	116		直口壺?	頸部。黒灰色の自然釉かかる。	山根73		

S K17

遺物	図	図版	器	種	特	実測
番号	番号	番号		,		番号
407	118	38	甕		胴〜底部外面ハケ、内面ケズリ。胴〜底部外面黒班あり。	S 110
S K 19	9					
408	120		高坏?		脚部。	N 37
409	120		鉢?		外面口縁部下を強くヨコナデ。	S 80
S K 20	0					
410	122		坏身		底部を欠く。	F2
411	122		高坏		坏部内面仕上げナデ。脚部三角形透かし2方向。	F6
412	122		高坏		坏部内面仕上げナデ。脚部透かし無し。	S 26
413	122		甕		外面平行タタキのちカキメ。内面同心円タタキ。	F1
414	122	* .	支脚		外面ユビによる調整。底部内面上げ底、ケズリ。	S 25
415	122		甕		胴部内面ケズリ。	S 28
416	122		甕		胴部内面ケズリ。	N19
417	122		甕		胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	S 30
418	122		甕		胴部内面ケズリ。胴部外面赤色塗彩。	S 31
419	122		甕		口縁~胴部外面ハケ。口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケ	F3
					ズリ。	
420	122		甕		口縁部。	N20
421	122		甕		胴部内面ケズリ。	S 29
422	122	38	甕		胴部内面ケズリ。胴部外面煤付着。	N18
423	122		甕		口縁部内面ハケのちナデ。胴部内面ケズリ。胴部外面、底部	F4
					内面煤付着。	
424	122	38	甕		胴部外面粗いハケ。胴部内面ケズリ。胴部外面煤付着。	S 27
425	122		甕		胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。	K20
426	122		甕		胴部外面ハケ。胴部内面ケズリ。胴部外面煤付着。	N17
S K2	4					
427	124		竈		口縁部。外面粗いナデ。内面ナデとケズリ。庇貼付け。	野島18
428	124		竈		庇。ナデ。	米山11
S K2	3					
429	126		鍋		体部外面タテハケ。煤付着。口縁部内面ハケのちナデ。	K 64
430	126		(底部)		高台気味の底部。	K 55
431	126		(底部)		底部外面回転糸切り。	K54
SD2	2	•				
432	127	,	五輪塔		空風輪。空輪部平面径16.3cm。風輪部平面径14.8cm。高さ	山根107
					22.2cm。4.4kg。角閃石安山岩製。	
433	127		五輪塔		空風輪。空輪部平面径17.1cm。風輪部平面径17.4cm。高さ	
					19.7cm。3.9kg。角閃石安山岩製。	
434	127		五輪塔		火輪。平面幅29.1cm。高さ13.8cm。13kg。角閃石安山岩製。	山根117
435	127		五輪塔		火輪。平面幅28.2cm。高さ13cm。12kg。角閃石安山岩製。	山根116

遺物	図	図版	器 種	特	実測
番号	番号	番号	~ t\ l#	Lth	番号
436	127		五輪塔	水輪。平面幅28.1×25cm。高さ18.8cm。20.5kg。平面形楕円	山根116
				形。4側面に墨跡あり。1面に梵字確認するが他は不詳。角	
105	105		At 1440	閃石安山岩製。	.I. III
437	127		五輪塔	水輪。平面幅31.8cm。高さ19cm。26.5kg。角閃石安山岩製。	山根122
	2 周辺		 	# 및 # # # # # # # # # # # # # # # # # #	.1.48110
438	127		五輪塔	空風輪。空輪部平面径19cm。風輪部平面径18.5cm。高さ	山根113
100	107			29.9cm。7.5kg。角閃石安山岩製。	.1.48100
439	127		五輪塔	空風輪。空輪部平面径15cm。風輪部平面径15cm。高さ21.9cm。	山根106
)# b# b		.		3.8kg。角閃石安山岩製。	
	大出土道 「一」。。	夏物 「			1 17
440	129		五輪塔	火輪。平面幅24.3cm。高さ13.6cm。10kg。角閃石安山岩。	山根115
441	129		五輪塔	火輪。平面幅22.1cm。高さ12.8cm。7.5kg。角閃石安山岩。	山根114
442	130		深鉢	刻目突帯文(D字)。内外面ナデ。外面煤付着。	F68
443	130	39	深鉢	刻目突帯文(V字)。突帯の上位に2条の沈線。内外面ナデ。 	F67
				外面煤付着。	
444	130	39	深鉢	刻目突帯文(O字)。内外面ナデ。	野島25
445	130	39	深鉢	刻目突帯文(O字)。内外面ナデ。	野島58
446	130	39	深鉢	刻目突帯文(斜行するO字)。内外面ナデ。	野島59
447	130		(胴部)	外面板ケズリ。内面ナデ。	K117
448	130	39	壺?	屈曲する肩部。外面板ケズリ。内面丁寧なナデ。	F73
449	130		深鉢	外面ナデ。煤付着。内面板ケズリ。	S 129
450	130	39	(底部)	平底。底部にユビオサエ。	F61
451	130		壺	内外面ナデ。頸部外面5条の平行線。	米山31
452	130		壺	内外面ナデ。頸部外面11条の平行線、その上位に貼付突帯。	米山30
453	130		甕	内外面ナデ。口縁部下に2条の平行線。口唇部にキザミ。	米山59
454	130	39	甕	外面ナデ、ミガキ。煤付着。口縁部内面ミガキ。胴部内面ハ	山根68
				ケ状のナデ。口唇部にキザミ。	
455	130	39	甕	内外面ナデ。口縁部下に6条の平行線。口唇部にキザミ。	米山71
456	130		甕	内外面ナデ。口縁部下に3条の平行線。口唇部にキザミ。	K23
457	130		甕	内外面ナデ。口縁部下に6条の平行線。	野島52
458	130	39	甕	内外面ナデ。3条の平行線下に三角形の連続刺突。	米山61
459	130	39	壺	内外面ナデ。1条の沈線下に三角形の連続刺突。	野島4
460	130		(底部)	上げ底。内外面ナデ。底部外面ユビオサエ。底部内面爪痕。	野島43
461	130		(底部)	平底。内外面ナデ。底部外面ユビオサエ。	米山1
462	130		(底部)	平底。内外面ナデ。底部内面ユビオサエ。	米山28
463	130		(底部)	平底。外面ミガキ。内面、底部ナデ。底部内面ユビオサエ。	米山62
464	131		甕	口縁部4条の平行線。胴部内面ケズリ。	F 60
465	131		甕	口縁部 5条の平行線。肩部外面連続圧痕。胴部内面ケズリ。	F 64

遺物	図	図版	器	——— 種	特	実測
番号	番号	番号				番号
466	131		甕		口縁部3条の平行線がナデ消されている。胴部内面ケズリ	o F57
467	131		高坏		内外面ナデ。口縁端部面取りし、2条の凹線。	F 66
468	131		器台		受け部。口縁部9条の平行線。内外面ナデ。	S 118
469	131		器台		脚部。外面ナデ。内面ケズリで、裾部ナデ。	S 117
470	131		器台or	高坏	脚端部に2条の凹線。外面ナデ。内面ケズリ。	F 62
471	131		器台		受け部。内外面ナデ。	K109
472	131		器台		受け部。外面ナデ。内面ミガキ。	F72
473	131		器台		脚部。外面ナデ。内面ケズリ。	F 63
474	131		器台or	高坏	脚端部に2条の凹線。外面ナデ。内面ケズリ。	S 119
475	131		甕		口縁部内外面ナデ。胴部内面ケズリ。	N47
476	131		甕		口縁部内外面ナデ。胴部内面ケズリ。	N48
477	131		甕		口縁部内外面ナデ。胴部内面ケズリ。	F 59
478	131		甕		胴部内面ケズリ。	K49
479	131		甕		内外面ナデ。	K51
480	131		甕		内外面ナデ。	米山13
481	131		壺		口縁部内外面ナデ。頸部外面タテハケ。頸部内面ヨコハク	F 58
					口縁端部を外側に折り返して肥厚させる。口頸部内面に炒	ŧ.
482	131		高坏		坏部。脚部との接合は円盤充填式。	山根29
483	131		高坏		坏部。内外面ナデ。脚部との接合は円盤充填式。	K110
484	131		高坏		脚部。内面シボリ。脚部との接合は円盤充填式。	山根32
485	131		高坏		内外面ナデ。脚部外面筋状の調整痕。脚端部内面ユビオサコ	-。 野島60
486	131		高坏		脚部。外面ハケ。内面シボリ。端部内面ユビオサエ。	野島5
487	131		高坏	<u>,</u>	脚部。外面縦方向に面取り。	米山10
488	131	39	低脚坏		坏部外面ハケ。脚部外面ユビによる成形。	山根71
489	131		低脚坏		調整不明。	山根30
490	131		低脚坏	?	脚端部。	S 18
491	131		低脚坏		内外面ナデ。坏部と脚部の境にユビオサエ。	米山3
492	131		高坏		内外面ナデ。	伊藤4
493	131		椀		調整不明。	米山5
494	131		椀		内面ミガキ。	S 17
495	131		椀		内面ミガキ。	S 19
496	131		(把手)	甑形土器の把手?。把手装着部の体部内面ケズリ。	N 100
497	132		坏蓋		天井部を欠く。天井部外面ヘラケズリ。外面天井部と体部	₿の 米山58
					境に鈍い稜。	
498	132		坏身		底部欠く。底部外面回転ヘラケズリ。口縁端部面取り。	伊藤2
499	132		坏身		底部欠く。口縁端部面取り。	野島2
500	132	40	坏蓋		ボタン状のつまみ、かえりあり。天井部外面回転ヘラケズリ	- 野島22
					天井部内面仕上げナデ。	
501	132		坏蓋		天井部外面回転ヘラケズリ。内面つややかな光沢。転用硯?	。 野島55

遺物	図	図版	器 種	特	実測
番号	番号	番号			番号
502	132		坏	│ │ 底部外面回転糸切り。底部内面仕上げナデ。口縁部下に凹線	N 69
				 状をなす強いナデ。	
503	132		坏	底部外面回転糸切り。底部内面仕上げナデ。高台付。	N77
504	132	,	坏	高台付。底部外面回転糸切りのちナデ。高台の外周回転へラ	N70
				┃ ┃ケズリ。底部内面仕上げナデ。	
505	132	40	器台?	筒形器台?。台部と脚部の境の部位?。内外面ナデ。台部外	K11
				面波状文。暗緑色の自然釉かかる。	
506	132		器台?	脚端部?。外面波状文。内面ナデ。	野島6
507	132	40	(脚台部)	内外面ナデ。円形の透かし3方向。	K 39
508	132		鉢?	内外面ナデ。	山根89
509	132	40	広口壺	内外面ナデ。胴部外面下端にハケ状工具の圧痕あり。	米山77
510	132		Ш	内外底面ナデ。内外底面赤色塗彩。	野島51
511	132		Ш	内外底面ナデ。内外底面赤色塗彩。	野島45
512	132		Ш	内外底面ミガキ。内外底面赤色塗彩。	山根92
513	132		Ш.	高台付。外面、底面ナデ。内面ミガキ。体部内外面、高台部	山根93
				外面赤色塗彩。	
514	132		ш	外面ナデ。内面ミガキ。内外面赤色塗彩。	K 102
515	132		Ш	外面ナデ。内面ミガキ。内外面赤色塗彩。	K90
516	132		甕	外面格子目タタキ。内面横方向のハケ。	K73
517	132	40	製塩土器	内外面ナデ。内面ユビオサエ。色調内外面橙褐色。	山根14
518	132	40	製塩土器	内外面ナデ、ユビオサエ。色調内外面淡橙褐色。	山根13
519	132	40	製塩土器	内外面ナデ。外面ユビオサエ。口縁端部やや肥厚。色調内外	山根18
				面淡橙褐色。	
520	132	40	製塩土器	内外面ナデ。内面ユビオサエ。内外面橙褐色。焼成鬆が入る。	山根17
521	132	40	製塩土器	内外面ナデ。口縁端部やや肥厚。色調内外面淡橙褐色。	山根16
522	132		小型壺	内面ユビオサエ、ナデ。底部平底。	米山8
523	132	40	鉢?	内面ケズリ。外面不明。色調内外面茶褐色。	伊藤5
524	132		坏	内外面赤色塗彩。	K104
525	132		椀	体部内外面ナデ。底部外面ユビオサエ。底部内面イタメのち	N83
				ナデ。	
526	-132		椀	ロクロ成形。内外面ナデ。	N 84
527	132		椀	ロクロ成形。内外面ナデ。底部静止糸切り。	米山29
528	132		小皿	手捏ね成形。内外面ナデ。外面ユビオサエ。	K94
529	132	ļ	小皿	ロクロ成形。内外面ナデ。底部静止糸切り。	米山43
530	132		小皿	ロクロ成形。内外面ナデ。底部静止糸切り。	K91
531	132		小皿	ロクロ成形。内外面ナデ。底部回転糸切り。	K96
532	132		小皿	内外面ナデ。	K 105
533	132		Ⅲ?	柱状高台。底部糸切り微かに確認。	F43
534	132		鍋	外面タテハケ、ユビオサエ、煤付着。内面ヨコハケ。	米山2

遺物	図	図版	器 種	特	実測
番号	番号	番号			番号
535	132		羽釜	貼付け突帯。口縁端部面取り。	K97
536	132		鉢	体部、底部外面ユビによる調整。内面ナデ。平底で高台気味	K92
				の底部。	
537	132		擂鉢	内外面ナデ。内面に卸目。	K98
538	132		擂鉢	内外面ナデ。	K 101
539	132		擂鉢	外面ユビによる調整。内面ナデ、卸目(単位7条)。	K100
540	132		擂鉢'	外面ユビによる調整。内面ナデ、卸目。	K99
541	133		白磁・椀	高台露胎。内面白濁色の施釉。	伊藤1
542	133		青磁・椀	淡緑色の施釉。龍泉窯系。	野島1
543	133		青磁・椀	淡緑色の施釉。内外面貫入。龍泉窯系。	米山6
544	133		青磁・椀	薄緑色の施釉。高台内面露胎。草花文。龍泉窯系。	K67
545	133		陶器・椀	薄緑色の施釉。内外面貫入。	米山7
546	133		陶器・片口	白濁色の施釉。底部露胎。	米山34
547	133		陶器・片口	緑灰色の施釉。内外面貫入部分的にあり。	米山33
548	133		磨石	デイサイト製。470g。	山根86
549	133		砥石	アプライト製。2kg。	米山32
550	133	40	スクレイパー	黒曜石製。14.8g。	野島65
551	133		石鏃	安山岩製。0.9g。	山根19
552	133		石鏃	安山岩製。0.9g。	山根20
553	133	40	鉄斧	袋状。鍛造。	山根6
554	133	40	鉄製品	円盤状。	山根21

註 蓋坏の (A~D類) については、P146参照。

第5章 考察

第1節 福成早里遺跡における集落の構造について

福成早里遺跡では、山の斜面をL字状に掘削して平坦面を造成した遺構を総計50基検出した。この内従来の竪 穴住居跡の概念に収まるものはその名を踏襲した。一方、平坦面が狭長な長方形あるいは半月形を呈する、柱穴 が一直線上に4基以上並ぶ、緩やかな弧を描く溝が見られる、溝及び柱穴がまったく存在しないなど、従来の竪 穴住居跡の範疇から逸脱する要素を含むものは、テラス状遺構と呼称した。当遺跡における竪穴住居跡は、溝を 後背壁面側に切り、その対面側には溝を設けないという構造的特徴を持つもので、平坦面は長方形あるいは方形 を呈し、主柱穴は2~8本である。一方、テラス状遺構は、

- ① 柱穴が直線上に並ぶ、大型のもの ② 柱穴が直線上に並ぶ、小型のもの
- ③ 柱穴が存在しない、大型のもの ④ 柱穴が存在しない、小型のもの

という4タイプに分類できる。規模の大小は、長さ5m以上を大型、5m以下を小型に分類した。テラス状遺構 の上部構造を推察する例として、①タイプのSS19を挙げる。SS19では、床面付近で検出された土師器の甕 (44) が、SS19の上方に位置するSI5より出土した破片と接合している。土師器の甕(44) の口縁部及び胴

	6世紀末葉~	~7世紀初頭	7世紀前葉	7世紀中葉	8世紀
	S I 4 · 5 S S 19① · 20③ (S S 14④ · 15④)		S I 4 · 5 S I 6 · 8		
B-1群			S S 18①	(S I 9) (S S 16②) (S S 17④)	
	S I 12-1	S I 12 – 2		?	
B-2群	S 29①	S S 30① S S 32①		S S 31(3) S S 23(3) (S S 33(4)) (S S 34(4))	
A-1群					S S 4 ① · 5 ①
A 14F				1	S S 3 ②
					S S 9 ③
	計) 造構 夕(の後のす数字に	 		S S 7 ①
			関連を推定したもの		S S 6 4 · 8 4

部の大半はSS19の床面付近より検出されたものである。床面には雨水が流れた痕跡が存在し、上方のSD6の延長にあたる。土層断面には増床のための盛り土の痕跡は見られなかった。これらより、SS19は狭長な平坦面上において、一列に並ぶ柱が屋根を支え、後背壁面側に壁を持たない建物であることが推察される。ただし、ひとつのモデルケースにすぎない。

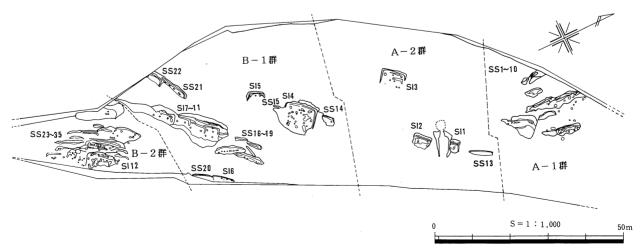
遺構は、分布状況から、 $A-1\cdot 2$ 、 $B-1\cdot 2$ 、C の 5 群にグルーピングしている。以下、各群を構成する遺構の構造の分析から単位集団を把握し、当遺跡の集落構造及びその変遷について検討を試みたい。

比較的遺構の密度の高いA-1群及びB群に着目し、各遺構を出土遺物・切り合い関係から時期別にまとめたものが左の表である。これによれば、B群においては、6世紀末葉から7世紀前葉にかけて竪穴住居跡とテラス状遺構が併存していることがわかる。B-1群においては、6世紀末葉~7世紀初頭にSI4・5とSS19・20が併存し、7世紀前葉にはSI6・8とSS18が同時に存在していることがわかる。B-2群ではSI12と①タイプのSS29が同時期に存在している。SI12が建て替えられると、呼応するかのように、SS29を切ってSS30が築かれる。両者とも東方への平行移動を示す。

このように竪穴住居跡・テラス状遺構という上部構造の異なる建物の組合せは、6世紀末葉から7世紀中葉、時期が移り変わっても同じ構成を示すことが窺われる。このことから、竪穴住居跡とテラス状遺構の組合せはひとつの単位として捉えることが可能と思われる。このように見ていくと、B群内における6世紀末葉~7世紀中葉の集落は、2単位程度で成り立つ小規模なものであったことが推察される。

ところでA-1群においては、竪穴住居跡は見られず、奈良時代に比定されるテラス状遺構のみが存在している。遺構の位置関係を見ると、①タイプの $SS4 \cdot 5$ の上方に②タイプのSS3、①タイプのSS7の上方に④タイプのSS6が存在しており、ここではB群とは異なり、「①タイプ+小規模なテラス状遺構」という単位が想定できる。奈良時代になり、竪穴住居から①タイプのテラス状遺構へ、中心的建物としての機能が移行したものと思われる。なお、SS5の下方、SS8の南隣には、③タイプのSS9が位置している。SS9は位置及び形態から、A-1群における共通の作業場あるいは広場的存在ではないかと推察する。

福成早里遺跡の集落は、6世紀末葉から7世紀中葉にかけてB群を中心に展開し、奈良時代には建物の構成を変え、A-1群に移る。この両時期の間を埋める7世紀後葉のテラス状遺構は、早里山より谷を隔てた荒神山斜面に位置するC群である。当遺跡における集落は、B群→C群→A-1群の順に位置を変えている。しかし、これらに居を構えた集団が系譜的につながるものかは判断できない。B群とほぼ同時期に存在する早里14号墳と福成早里横穴墓にA-1群が近接することから、A-1群とB群とは系譜的につながりをもたない集団の可能性が考えられる。ところで、A-1群から出土した製塩土器・赤色塗彩のなされた土師器の皿は、官衙遺跡や寺院跡で見られることの多い遺物である。これらより、奈良時代に至って、当集落はそれまでの一般集落からの脱却を余儀なくされ、律令体制の下、性格の変容を迫られたものと推察する。



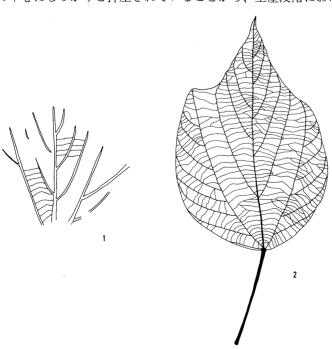
第134図 テラス状遺構配置図

第2節 福成早里横穴墓について

1. 葉脈圧痕のある高坏について (第135図、写真図版33)

福成早里横穴墓前庭部で出土した須恵器の高坏の坏部内面には、葉脈の圧痕がみられた。鳥取県生物学会、田中昭彦先生に鑑定していただいた結果、この葉脈はアカメガシワの葉と判明した。田中先生の御教示によれば、アカメガシワは、トウダイグサ科の植物である。本州(秋田県以南)・四国・九州・沖縄に自生しており、鳥取県内においても普通に見られる。雌木と雄木とに分かれる雌雄異株の落葉高木である。木の大きさは、高さ15m、径40cmほどで幹は灰褐色で縦に割れ目が入る特徴がある。葉の長さは15~30cm、幅7~14cmと大ぶりである。葉の基部には腺点が2つあり、基部の3脈がとくに太い。側脈は7~9対ある。また、アカメガシワは夏から秋にかけて葉をしげらせる。よって、この葉脈圧痕のある高坏は夏から秋にかけて製作されたことがわかる。古代においてはこの葉に食物を盛ったことから菜盛葉(サイモリバ)・五菜葉(ゴサイバ)の名がある。また、カシワとは古来から食器として用いる葉の呼び名で、『日本書紀』にいう「葉盤(ひらで)」に相当すると考えられている。このような植物の葉の圧痕を土器に施す例は、中国地方においては確認されていない。木葉文は、弥生時代前期において普遍的に認められる意匠であるが、これ以後は絵画的に描かれるようになる。古墳時代にはいると、古墳の石室などに写実的な木葉文が線刻される例が見られるが、土器の意匠としては用いられることはない。鳥取県下においては、この石室壁面の線刻に木の葉を描いた例が比較的多く、空山2・10・15号墳、米岡2号墳、宇部野山古墳において確認されている。これらは樹種は不明だが、綾杉状の葉文を施し針葉樹と広葉樹がある。

アカメガシワの葉脈を押圧した高坏は、前庭部中央付近と奥壁の右側壁寄りの土器類が集め置かれた地点で出土した破片が接合したものである。集め置かれた土器類の中には完形の高坏が2個体あるが、アカメガシワの高坏はこれらの高坏と形態的には同じである。陰田編年においては、低脚無蓋高坏の出現は陰田6式(T K217併行期)となるが、大谷晃二氏の編年(註)ではA 4 タイプにあたり、出雲4期、陶邑編年のT K209併行期(6世紀末~7世紀初頭)に相当する。出雲4期は、同時に出土した蓋坏の時期とも重なり、この高坏は横穴墓築造段階の所産と考えてよい。また、赤彩された高坏がアカメガシワの高坏と同じ前庭部中央付近、かつ同じレベルにおいて破片で出土している。したがって、アカメガシワの高坏、赤彩された高坏はともに追葬の際に破砕されたと考えられる。さらに、同様な須恵器の高坏のうちアカメガシワの高坏のみが抽出され破砕されていることから、追葬時においても葉脈圧痕の土器に対して特殊な認識を有していたことが窺われる。葉脈圧痕は高坏の坏部内面の中心にしっかりと押圧されていることから、生産段階における偶発的な産物であるとは考え難い。横穴墓



(註)大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」 『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994年

考えられる。

築造段階の埋葬の際にも何らかの特別な役割を 担った土器とみるべきであろう。アカメガシワ の高坏には、生産者ではなく埋葬行為を行う集 団すなわち消費者側の意図が反映されていると

第135図 高坏坏部内の葉の押圧状況とアカメガシワの葉脈

2. 前庭部から羨道部にかけての遺物の出土状況について

福成早里横穴墓では、前庭部から玄室にかけて多数の土器が出土した。閉塞石と羨門部側壁との間には須恵器の蓋坏を詰め込むなど、玄室内は完全に封鎖された状態であり、盗掘を受けていない。前庭部の土器も撹乱をうけておらず、原位置を保っており、なかには意図的な土器の配置が窺えるものもある。本項では、前庭部から羨道部にかけての土器の置かれた状況から、横穴墓における最終追葬時の様相について考察したい。玄室内の土器から、本横穴墓はTK209併行期に初葬が行われ、陰田7式期に追葬が行われていることが判断される。

前庭部においては、右寄り奥壁近くにおいて須恵器の蓋坏が重ねられ、須恵器の高坏、土師器の鉄鉢形土器とともに集め置かれている。土器の時期は、須恵器類がTK209型式併行期のもの、鉄鉢形土器が陰田7式期の所産と考えられる。これらの土器は前庭部床面から約30~40cm浮いており、追葬時に置かれたことは明らかである。前庭部中心軸上の奥壁近くにおいても坏蓋1個体が置かれ、レベルは床面から30cm程度浮く。この南東側には口縁部を下に向けた横瓶が置かれ、床面より約5cm浮く。横瓶の南西側約60cmには、須恵器の坏蓋の破片がほぼ同レベルで出土するが、この坏蓋は、閉塞石と羨道部側壁との隙間に詰め込まれた坏蓋と接合する。よって、横瓶は最終追葬段階に置かれたものと判断できる。前庭部入口近くの右側壁寄りでは馬具が集中的に出土し、これらも、追葬時に置かれたものと考えられる。

閉塞石と羨門部との隙間には、須恵器の蓋坏が詰め込まれていた。閉塞石表側と裏側の個体が接合するなど、 意図的に破砕され詰め込まれたものもある。詰め込まれた蓋坏の時期はTK209併行期であり、閉塞石に詰め込 みが行われた時期は、玄室内の土器から判断して、追葬時の陰田7式期と考えられる。

羨道部の羨門部近くにおいては、羨道部主軸方向に沿って須恵器の蓋坏3個体が出土した。蓋坏の時期はTK 209併行期であるが、最終追葬時の閉塞直前に置かれたものと考えられる。

前庭部の埋土中からは須恵器の甕および提瓶の破片が出土した。大型の甕4個体以上、提瓶1個体であり、前庭部の中央付近を中心として分布する。また、⑤層上面からアカメガシワの葉脈圧痕を有する高坏が、さらに上層からは赤色塗彩された土師器の高坏が、それぞれ破砕した状態で出土している。

以上の所見から、最終追葬時における埋葬の過程を推察する。まず、埋まった状態の前庭部を再掘削し、閉塞施設を開ける。次に、遺体を搬入するわけであるが、前庭部の土器が玄室内の初葬に伴う土器と同型式であることから、まず玄室内の土器を前庭部へ搬出し、その後に遺体を玄室内へ搬入したと考えるのが自然であろう。ところで、こうした行為は前庭部への遺物の「掻き出し」として捉えられることが一般的である。しかし、本横穴墓における前庭部の土器からは、玄室内からの「掻き出し」とは考えにくい状況が窺える。前庭部右側壁寄りの土器は、追葬の際に新たに土師器の鉄鉢形土器を加えていること、また、須恵器の高坏のうち、アカメガシワの葉脈圧痕のある個体のみを抽出して破砕し、前庭部中央付近に散布していること、さらに、玄室内には遺体を安置しても、土器を置くスペースが確保できることなどから、これらの土器は、最終追葬時において前庭部で再度使用することを目的として、玄室から搬出されたと考えられる。

遺体を搬入の後、閉塞を行う。羨道部の入口付近に須恵器の蓋坏3個体を並べた後、一枚石にて閉塞を行う。 周辺の横穴墓で閉塞石をもつものは、西伯町マケン堀横穴墓群では29基中6基、米子市陰田横穴墓群では28基中 9基であり、同大始山横穴墓群・東宗像横穴墓群にはみられない。一方、島根県安来市高広横穴墓群では11基中 8基で確認されるなど、石材調達の容易さは考慮されるべきであるが、出雲地方寄りにおいて顕著にみられる。 石を用いての閉塞が出雲地方からの影響によるものであるとすれば、問題はそれのみにとどまらず、横穴墓における葬法の伯耆地方への浸透をも反映しているものと考えられよう。

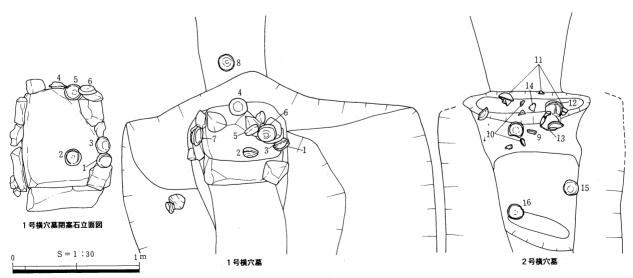
閉塞の後、閉塞石と羨門部側壁との隙間に須恵器の蓋坏を詰め込む。これらの土器自体の時期は、前庭部の須恵器同様、TK209併行期であり、追葬の際に玄室より搬出されたものと推察される。類例として、島根県安来市高広遺跡 I 区 1 号横穴墓がある。ここでは閉塞石に貼り付くかたちで土器が出土した(第136図左側)。坏蓋 2、坏身 1 を 1 セットとして、 1 セットを閉塞石最上部右側に、他の 1 セットを閉塞石正面右下に貼り付け、閉塞石下の右端に坏身 1 を置く。これらは全て完形である。蓋坏の時期は TK209型式併行期であり、閉塞石に貼り付

けが行われたのも玄室内の土器から推して同時期と判断される。また、古墳においても同様な行為が認められる例がある。米子市東宗像 5 号墳では、横口部を有する組み合せ式箱式石棺の蓋石と小口石および側壁との間に白色の粘土により目張りをし、この上に円筒埴輪の破片、完形の須恵器の坏蓋 3 ・坏身 2 個体を貼り付ける。蓋坏が、陶邑編年のTK10型式、およびTK209型式併行段階の所産であり、初葬時と追葬時の両方の土器が使用されたと考えられる。

ここにおいて注目すべきは、閉塞に用いられる土器には、すべて須恵器の蓋坏が用いられていることである。 蓋坏が、古墳時代後期における墳墓の副葬品において一般的な器種であることは確かである。しかし、追葬時に 玄室から搬出されたと考えられる須恵器には、蓋坏のほか高坏・横瓶・壺などがあるにもかかわらず、蓋坏だけ を抽出している。つまり、閉塞に関わる土器については、蓋坏が意識的に選択されたということであろう。ただ、 同じ蓋坏でも、閉塞石に土器を破砕して詰め込む、完形のまま貼り付けるなどその在り方には多様性が認められ る。また、福成早里横穴墓では坏蓋3・坏身4個体、高広遺跡I区1号横穴墓では坏蓋4・坏身3個体、東宗像 5号墳では坏蓋3・坏身2個体がみられるなど、坏蓋・坏身の数が同一ではない。このことは、羨道部から前庭 部にかけての蓋坏の置き方やセット関係に厳密さが求められていないことを示すものと考えられる。

ところで、前庭部右側壁寄りの土器はいつ置かれたものであろうか。先述のように、これらの土器とほぼ同レベルにおいて前庭部羨門部近くに坏蓋、中央部付近にアカメガシワの葉脈圧痕を有する高坏が破砕されて置かれている。また、この高坏の破片の一部が 前庭部右側壁寄りの土器の中に含まれている。したがって、これらの土器は、前庭部がある程度埋められた後に同時に置かれたものと判断できる。そうすると、これらは遺体の搬入時に玄室から搬出されてから前庭部の一部を埋め戻すまでの間、前庭部以外のいずこかに一時的に保管されていたことになる。保管されるということは、その後使用するという明確な意図の表れと考えられる。また、搬出された土器の中でも、閉塞に関しては蓋坏が選択され、初葬時の所産であるアカメガシワの高坏や提瓶が、前庭部を埋めた段階ではじめて破砕されている。このことから、土器の差別化が行われたことが推察される。したがって、玄室から搬出された土器は、本来初葬に伴う副葬品であったと同時に、最終追葬時においては、前庭部での祭祀に用いる土器としても認識されていたと考えられる。

最終段階として、前庭部に須恵器の甕および提瓶の破片を散布する。意図的な破砕を窺わせる個体があること (写真図版30・318)、前庭部埋土の下層①~④層には全く包含しないことから、前庭部をある程度埋め戻した後に、破砕した破片を散布したものと判断できる。土層断面の観察から、羨門部付近を重点的に、閉塞石が埋没する程度に前庭部を埋めた後に、須恵器の甕を散布している状況がみてとれる。破片の範囲が前庭部の北側や前庭部奥壁上方にまで広く分布することから、前庭部の奥壁上方から播かれたものである可能性が高い。甕片にはレ



第136図 高広遺跡 I 区 1 号・2 号横穴墓羨門部遺物出土状況実測図 (『高広遺跡発掘調査報告書』より再トレースして転載)

ベル差が1m近くあることから、前庭部を埋めながら数回に分けて破片を播いたことが想定される。なお、破片は、甕の個体を問わずレベル的なばらつきが認められることから、数個体を同時に破砕して個体の区別なく散布したことが推察される。

このように、福成早里横穴墓では、最終追葬時において、前庭部の埋め戻しは、非常に丁寧に行われており、 蓋坏の閉塞石と羨道部側壁との隙間への詰め込みとともに、横穴墓の封鎖をより丁重にかつ厳重に行おうとする 意図の表れと想定される。

以上の過程を経て、福成早里横穴墓の最終追葬が終了したものと考えられる。これを次表のようにまとめた。その普遍性については、周辺地域におけるさらなる検討が必要であろう。

【福成早里横穴墓における最終追葬時の埋葬過程】

前庭部を再掘削する。

羨門部を開口し、玄室内の土器を前庭部に搬出するなど、遺体搬入の準備を行う。

遺体を搬入する。

(玄室から搬出した土器は保管)

羨道部中心軸付近に須恵器の蓋坏3個体を並べて置く。

一枚石により閉塞する。

羨道部側壁と閉塞石との隙間に須恵器の蓋坏を詰め込む。 前庭部中心軸付近に横瓶を置く。

羨門部付近を中心に、閉塞石が埋没する程度に前庭部を埋める。

玄室から搬出したのち保管していた土器を、前庭部右側壁寄りに鉄鉢形土器を新たに加えて置く。 中央付近にはアカメガシワの葉脈圧痕を有する須恵器の高坏を破砕して置く。

須恵器の甕・提瓶、赤色塗彩された土師器の高坏を破砕し、前庭部を埋めながら播く。

参考文献

『陰田』米子市教育委員会1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会1984『東宗像遺跡』鳥取県教育文化財団1985『大始山横穴墓群』鳥取県教育文化財団1987『マケン堀古墳群・北福王寺遺跡』西伯町教育委員会1990『出雲の横穴墓』山陰横穴墓研究会1997